



始



大正十年六月二十五日
南支那及南洋調查第五十輯

佛領印度支那大觀

臺灣總督官房調查課

注意

本調査ハ執務竝ニ閱覽ノ便宜ヲ計リ印刷ヲ以テ筆寫ニ代ヘタルニ止リ、敢テ之レヲ公刊スルモノニ非ラス

例言

寄贈本

一、本調査書ハ一九一〇年巴里出版ノマニヤバル大尉ノ著書「佛領印度支那」(Magnus Pahl - L'Indo-chine Française)ヲ多年東京ニ在リテ佛領印度支那各般ノ事情ニ通曉セララルル横山正脩氏ノ翻譯セルモノナリ。

一、從來佛領印度支那ト我臺灣トノ關係ハ他ノ南洋諸領ニ比シ稀薄ナリシモ、近海防定期航路ノ開設ヲ見ントシ、是レヨリ漸ク兩者ノ經濟的關係密接ナスルニ際シ、先ツ彼ノ地ノ事情ニ大體ニ於テ通スルノ要アリ。於是乎本翻譯書ニ意義アルモノト信ス。

一、原書ハ歐洲戰亂以前ニ出版セルヲ以テ最近ノ事情ヲ缺クノ憾アリト雖、記事簡潔ニシテ正確、能ク概要ヲ傳ヘテ遺憾ナシ。且ツ佛領印度支那現在ノ地理、經濟、軍備等ニ就テハ大體ニ於テ戰前ト大差ナキヲ以テ依然參考上ノ價值尠ナカラサルカ故ニ印度支那ノ大要ニ通セントスル者ノ好資料タルヘシ。

一、最後ニ繁忙ノ業務ヲ有セラレ乍ラ本書ヲ翻譯セラレタル横山氏ニ對シ深厚ナル謝意ヲ示ス。

大正十年六月二十五日

臺灣總督官房調査課

1424-478



大正十年六月二十五日
寄贈
11.4.14

佛領印度支那大觀目次

第一章 地誌

第一節 面積及境界

第二節 山嶽誌

第三節 氣候(雨量)

第四節 水路誌

(一) 湄公河

(二) 紅河

第五節 海岸

第六節 人種學

(一) 柬埔寨人

(二) 印度人

(三) イタ人

(四) 安南人

目次

一
一
二
七
一〇
一〇
一四
一六
一九
二〇
二〇
二一
二二
二三

書目本



(五) 支那人……………二二

(六) 最近ノ侵入民族……………二四

(七) 結論……………二五

(八) 印度支那ノ人口……………二六

(九) 人口ノ分配……………二七

第二章 政治地理……………二七

第一節 印度支那征服略史……………二七

(一) 交趾支那ノ征服……………二八

(二) 柬埔寨佛國ノ保護權下ニ置カル……………二九

(三) 東京及ヒ安南ノ征服……………三〇

(四) 老撾ノ占領……………三八

(五) 廣州灣ノ占領及ヒ支那トノ協約……………三八

第二節 行政組織……………三九

(一) 印度支那聯合國……………三九

(二) 總督ノ權限……………四〇

(三) 總理事官ノ權限……………四一

(四) 印度支那高等會議……………四一

(五) 土人行政……………四三

第三節 司法組織……………四三

第四節 財政制度……………四五

第五節 土人政策……………五〇

第六節 重要都市……………五三

(一) 交趾支那……………五四

(二) 柬埔寨……………五四

(三) 安南……………五六

(四) 東京……………五七

(五) 老撾……………五八

(六) 廣州灣……………五九

第三章 經濟地理……………五九

第一節 交通道路

(一) 道路

(二) 河川及掘割

(三) 鐵道

(四) 計畫中ノ鐵通

第二節 農業

(一) 概要

(二) 農業進歩ノ實行

第三節 農産統計

(一) 食料品ノ耕作

(イ) 米、(ロ) 王蜀黍、(ハ) 他ノ耕作物

(二) 高價植物ノ耕作

(イ) 胡椒、(ロ) 茶、(ハ) 咖啡、(ニ) 茴香樹

(三) 工業用植物ノ耕作

(イ) 煙草、(ロ) 棉花、(ハ) 粗麻、(ニ) 黃麻、(ホ) 樹綿

五九
六〇
六三
六七
七一
七六
七六
七七
八〇
八〇
八二
八四

(四) 其他ノ雜種産物

(イ) 護模、(ロ) ラック、(ハ) 其他

(五) 森林

(六) 牧畜

第四節 商業

第五節 内國商業

第六節 外國貿易

(一) 關稅制度

(二) 貨幣制度

(三) 外國貿易ノ價格

(四) 佛國ヨリノ輸入ト外國ヨリノ輸入トノ比較

(五) 佛國向ケ輸出

(六) 摘要

(七) 輸入品

(八) 輸出品

八五
八六
八六
八七
八七
八七
八七
八七
八九
九〇
九一
九二
九四
九六
九六
九七
九七
九七

(九) 商港……………九七

(イ) 柴根、(ロ) 海防、(ハ) ツーラー、(ニ) 廣州

(三) 通過貿易……………一〇〇

(二) 結論……………一〇二

第七節 工業……………一〇三

(一) 土人ノ工業……………一〇三

(イ) 花菱製造、(ロ) 養蠶業、(ハ) 製鹽業、(ニ) 漁業及其副産物、(ホ) 奢侈品製造

(二) 歐洲人ノ工業……………一〇六

(イ) 機械的工業、(ロ) 纖維工業、(ハ) 食料品工業、(ニ) 採掘工業(石炭、鐵、錫、鉛、亞鉛、金)

(三) 第二位的工業……………一一一

(イ) 製紙業、(ロ) 窯業、(ハ) 麥酒製造業、(ニ) 澱粉製造業

(四) 結論……………一一一

第四章 陸海軍組織……………一二二

第一節 陸軍組織……………一二二

第二節 駐屯軍……………一二三

(一) 其組織……………一二三

(イ) 東京、(ロ) 安南、(ハ) 交趾支那

(二) 其目的……………一二五

(三) 國內秩序ノ保全……………一二六

(四) 國境ノ平穩……………一二六

(五) 亞細亞問題……………一二八

(甲) 支那ノ軍事的進歩、(乙) 太平洋問題

(六) 日佛協約ノ履行……………一二一

(七) 駐屯軍ノ最良利用法……………一二三

(イ) 土人兵ノ募集、(ロ) 安南國民軍ノ考案

第三節 海岸防禦ノ組織……………一三四

第四節 結論……………一三六

原書マルセイユ大學名譽教頭ポール・ガフアレル氏序

數日前余ハ「ステール」ノ古地圖ヲ緝閱セリ、此地圖ハ一八七〇年戰爭以前ニ余
カ用ヒシモノニシテ當時甚タ完全ナルモノト看做サレタリ、其中ニアル印度支那
ノ地圖ハ余ニ大ナル感動ヲ與ヘタリ、此地圖ニ於テハ東京、安南、交趾ニ就テ唯僅ニ
二十許ノ地名ヲ示セルニ過キス、山ニ就テハ毫モ指定無ク、大河ハ唯漫然トシテ流
ルルノミ、眞ニ人ニ知ラレサル土地ト云フテ可ナルヘシ。

之ヲ貴下カ製作シテ本編ニ添附セル地圖ト比較シテ、余ハ其間ノ進歩ノ跡ヲ認
メサルヲ得ス、實ニ吾人カ地理上ノ無智識ヲ嗤笑セラレタルノ時代ハ今ヤ去レリ、
貴下カ同僚竝ニ貴下ノ盡力ニ依テ、吾人ハ今ヤ安全ナル地上ニ進行シ得ルニ至レ
ルカ、之レ現ニ目撃スル明白ナル事實ナリ、此ニ於テ此至好ナル小編ヲ編纂セラレ
タルコトニ就テ貴下ニ謝ス、此小編ハ貴下カ得ラレタル見聞ヲ要説シ、宛モ我印度
支那占領ノ大興味アル歴史ニ於テ一年代ヲ劃スルカ如キモノナルヲ以テナリ。
老生ヲシテ左ノ指摘ヲ爲スコトヲ得セシメヨ、余カ賞揚ニ堪ヘサルハ貴下カ斷
乎トシテ誇張ノ章句ヲ棄テテ秩序的明瞭ヲ取り、文字ノ粉飾ヲ避ケテ事實ノ精確

二期セルコトナリ、貴下ノ爲セルカ如ク天然ノ作用ト人類ノ作用トヲ研究シ經濟上ノ諸問題ヲ指摘シ亦軍事上ノ問題ヲ研究スルコトヲ忘レズ、此點ニ於テ貴下ハ實ニ讀者ノ爲メニ貢獻ヲ爲ス、余ハ讀者ノ多カルヘキコトヲ信ス。

貴下ハ亦之ニ由テ有害ナル臆説ヲ除去スルコトニ與テ力アリ、且現ニ輿論ヲ喚起シ且將來益論議サルヘキ諸問題ニ就テ多クノ説明ヲ與ヘタリ、乃チ貴下カ最モ熱心ナル主張者ノ一人タル高尚ナル此最大佛國ヲ現出スルノ主義ノ爲メニ有益ナル功勞ヲ盡セリ、貴下ハ良國民ノ事業ヲ爲セリ余ハ貴下ノ爲メニ之ヲ祝ス。

貴下ハ本書ノ第一頁ニ余カ名ヲ記入スルコトヲ請ハル、余ハ之ヲ以テ大ナル名譽トシ深ク之ヲ謝ス、貴下ハ斯クシテ植民地發展ノ必要及ヒ吾人カ佛國ノ外ニ多クノ新佛國ノ如キモノヲ播種シツツ吾カ子孫ノ爲メニ光輝アル將來ヲ得セシムルコトニ關シ余カ深キ信念ヲ有スルコトヲ茲ニ改メテ確認スルノ機會ヲ與ヘラレタリ、此等ノ新佛國タルヤ將來文明波及ノ中心タルヘキモノニシテ中ニハ既ニ此域ニ達セルモノアルナリ。

大學名譽教頭 ポール・ガフアレル 識

原著者自敘

余ハ現ニ佛國ノ中學校及高等學校ニ於テ行ハルル地理學科カ「アルゼリー」及ヒ「チユニジ」ニ就テハ懇ロニ説明セラレ、佛領印度支那、西部亞弗利加及「マダカスカ」ニ於テハ僅少ノ紙數ヲ費ヤスニ過キサ、ルコトニ驚ケリ。

北部亞弗利加ニ於ケル我領土ノ重要ヲ認メサルニハアラサレトモ、後者ニ關シテハ多大ノ不精確ナル事實ヲ混同セル漠然タル概要的記述ノミニ満足スル能ハサルコトヲ正當ト信セリ。

此ニ記スル地誌ノ唯一ノ目的ハ佛領印度支那ヲヨリ能ク知ラシムルコトニ存ス、勿論長ク印度支那ニ住居セル佛人ハ書中ノ或事物ヲ以テ既ニ之ヲ知レリト云フヘク、他ノ事物ニ就テハ説明大要ニ止マリテ十分ナラストスヘシ、然レトモ吾カ友人ノ多數ハ一九〇九年ニ於テ我絶東ノ大植民地ニ就キ地文、政治、經濟、地理及ヒ軍事組織ニ對スル一般の觀念ヲ與フル此小冊子ヲ編成セルコトニ就テ恐ラク賛同ノ意ヲ有スヘシト信ス。

余ハ久シキ以前ニ刊行セラレタル良著雜誌、時報種々ナル論文、又ハ演説ニ於テ

散見セル諸參考事項ヲ精選的ニ收縮スルコトヲ試ミタリ、而シテ之ニ加フルニ余
カ卑見ト印度支那在住八年間ニ纂錄セル記事トヲ參照セリ。

二

佛領印度支那大觀

第一章 地 誌

第一節 面積及境界

佛領印度支那ハ印度支那半島ノ東部ヲ組成シ、數國ヲ包有ス、交趾支那、東甫塞、安南、老撾及東京是レナリ。

其面積ハ約八十萬平方キロメートルナリ(註佛本國ハ五十三萬六千四百八平方キロメートルナリ)地理上及ヒ人種上ノ如何ナル標準ニモ依ラサル條約上ノ國境アリテ支那ノ南三省廣東、廣西及雲南ト之ヲ別ツ、其國境ノ延長二千三百キロメートル[此國境ハ東京灣岸茫街市ノ附近リヨンソウ嶼ヨリ發シテ老開ニ於テ紅河ニ達シロンポーニ於テ之レト別レナムウー河ノ諸源流ニ會シナムウー湄公兩河ノ分水線ニ從ヒ雲南ヨリ來レル小河ナムラガ合流セル點ニ於テ湄公河ニ會ス。

夫レヨリ國境ハシエンセン(KiangSen)ニ至ルマテ湄公河ニ從ヒ英領緬甸「シヤン」白夷人ノ國ト老撾トヲ分ツ。

老撾リユアンブラバン王國ノ一部ハナムウーオツク及ヒナムウオン兩河ノ間ニ於テ湄公ノ右岸ニ侵入ス夫レヨリ國境ハ再ヒ此大河ニ沿フテバクムーンノ下流點ニマテ及フ。

一九〇七年三月二十三日ノ佛國暹羅間ノ條約ニ依テ定メラレタル東甫塞、暹羅間ノ境界ハブノン・ダン・レツク山脈ノ嶺頂ニ從ヒ夫レヨリ南方ニ向ヒ暹羅灣ニ暹羅ノコウクツト島ノ前面ニ於テ達ス、斯クシテ東甫塞ノ爲メニ其舊領土バツタンバン、シエムレアツブ、シゾフオン、バノンソツク及ヒチエウカンノ諸州ヲ返還セリ、此面積三萬五千平方、キロメートル、人口三十萬米產ニ富ム、佛國ヨリハ之レカ交換トシテダンサイ及ヒクラツトノ餘リ重要ナラサル小地域ヲ交付セリ。
支那海ハ東及ヒ南ニ於テ印度支那海岸ヲ洗ヒ、暹羅灣ハ南西ニ於テ之ヲ洗フ。

第二節 山嶽誌

片岩、花崗岩、砂岩及石灰岩ヨリ成ル西藏及雲南ノ大高地ハ長大ナル山脈ト爲リテ印度支那ニ延長シ湄公ノ流域ト紅河及安南海岸諸河ノ流域ト區分ス、之レ即チ安南山脈ニシテ初メハ廣ク且稠密ニシテ終リハ狹ク縮小シ、北ヨリ南ニ半島ヲ縱

斷シ頗ル東京安南ノ海岸ト平行スル一大灣曲線ヲ畫ク。

諸山ニ今日ノ形狀ヲ與ヘタルモノハ數百年來ノ水成作用ニシテ片岩、砂岩ヲ分解シ石灰岩山脈ヲ險岸深谿ニ依テ明確ニ箇々分離シタリ。

東京ニ於テ安南山脈ハ頗ル凸凹シ頗ル截斷セラレタル地方ニ盤互ス、此ニハ紅河及其大ナル合流カ其婉曲セル狹キ河底ヲ印ス、山ノ形狀ハ種々ニシテ重疊混亂ス、時トシテハ樹木茂レル大山タリ、例ヘハ老開ノ西ニ當リ黑河ト紅河トノ間ニ在テ印度支那ノ最高嶺(三、一四〇米突)ヲ有スルフアンシーバン河陽ノ西ニ在ルチエレスービン(二千米突)諒山ノ東北ニ在ルモーソン(千五百米突)ノ如シ、又時トシテハ荆棘林ヲ以テ蔽ハルル砂岩嶺アリ、カオバン、茫街、諒山ノ地方ノ如シ、時トシテハ廣濶多少ノ平原ヲ限界スル石灰岩ノ巨壁タリ、バオラツクノ北方ニ於ケルドンカンノ高原ノ如ク此ニハ深キ岩洞アリ、荒蕪セル岩窟アリ、頗ル錯亂シテ相重レル巨大岩アリ、又カオバン州ノルイター及ヒ諒山州ノカイキンノ如ク險岩穴ヲ穿チ宛モ巨大ナル海綿ノ狀ヲ爲シ或ハ狹クシテ近寄り難キ山間谿地ヲ有スルアリ、又例ヘハ河龍灣(ベー・ダロン)ノ岩石ノ如シ、景色絶佳ニシテ昔時山脈カ陷滅セルコトヲ示ス。

巨峯數アリ東京平野ニ懸ル平野ノ水平狀ナルハ其海拔ヲ鮮明ニス、バツイ山(一、二〇〇米突)及ヒタングダオ山(一、三〇〇米突)ハ紅河ヲ狹シテ河内ヲ距ルコト遠カラス、他ノ巨峯ハ海邊ニ奔ル、チエンエンノ附近ナル大マメル山、小マメル山(一、三〇〇米突)ト一、一〇〇米突、十萬山ト稱スル支那領ノ大山脈ノ副峯タルバナイ、マタオ山等ノ如キ是レナリ。

シエンコンヨリミュオン、バト、チユームニ至ル間ノ湄公河ト黑河及ヒ清化ヨリ宜安ニ至ル海岸トノ間ニ甚タ困難ナル地方延長シ上記ノ地方ヨリモ山岳重疊シ且多ク切斷セラル、黑河、ソンマ、ソンカ、ナムウーノ諸河カ山脈中ニ穿テタル狹隘ニシテ深キ諸谿谷ハ海拔一、〇〇〇米突ヨリ一、八〇〇米突ニ及フ諸山ヲ分ツ、之レ上部老撾ノ山岳地方ニシテ險峻ニシテ殆ント攀チ難キ海拔二、〇〇〇米突ニ達スルポーロイ山アリ、氣候温和健康地ニシテ植民ノ爲メニ廣大無主ノ地域ヲ提供スルトランニンノ高原(一、二〇〇米突)ヨリ、黑河トソンマトノ間ニハシブソンチユーターイノ險阻ナル山脈延長ス。

南方ニ向フテハ安南ノ脊髓山脈近ク海ニ迫リ肋骨的數支脈ヲ海岸ニ突出ス、此等ノ支脈ハ往々本脈ニ等シキ高度ヲ有シ、海岸地方ニ一列ノ數水域ヲ作り各安南

ニ於ケル行政的州ト爲ル。

安南山脈ノ中ニテ最モ高キ山巔ヲ有スルハ此中央部分ナリ、即チカンビンノ西北ニブーハク山アリ、海拔二、〇〇〇米突、カントリノ西方虎牙山(一、八〇〇米突)アリ、順化ノ南方ニ當テブーアツア山(二、五〇〇米突)アリ、アトツブーノ東北ニブージヨン山(二、五〇〇米突)アリ、ワレラ岬(七〇〇米突)ノ險崖ト爲リテ海岸ニ終ル、支山脈ニ母山、子山(二、一〇〇米突)アリ。

之レヨリ南ニ至レハ安南山脈ハ西南ニ向テ折レ、交趾支那ヲ組成スル沖積地平原ノ東北輪廓ヲ起伏セシム。

安南脊髓山脈ハ東面支那海ニ向ヘル方ニ於テ險峻ニシテ、西面湄公河ニ向ヘル方ニ於テハ緩傾斜ニシテ稍廣キ數高原ヲ形成ス、此高原中ニテ最モ興味アルモノハ北方ニ於テハカンモン及ブーハクノ高原、中部ニ於テハボロウエン高原(一、三〇〇米突)ナリ、此高原ハ巨大ナル支脈ニシテブノンダレック山脈ト爲テ湄公ノ右岸ニ延長ス、前ニモ云ヘル如ク此山脈ハ暹羅ト東甫塞トヲ別ツモノニシテ、其南面ハ樹木多ク險崖ト爲テ東甫塞領ニ入ル。

此外セダン、ダララック(八〇〇米突)、ランピヤン(一、三〇〇米突)ノ高原アリ皆安南

山脈ノ南部ニ屬ス、ランビヤンニ於テハ將來療養所ヲ建設セララルヘシ。

全體ニ就テ云ヘハ上記ノ諸山ハ樹木甚タ多ク交通困難ニシテ殆ント近接スル能ハサルノミナラス、尙未タ人ノ能ク知ラサルモノナリ、サルハ安南山脈延長千キロメートル以上ノ間ニ於テ稍低キ數通路アルノミ、而シテ此等ノ通路ハ行人少ナシト雖、安南及老撾即チ海岸地方ト湄公ノ谿地トノ間ニ連絡ヲ得セシムルモノナリ、之ヲ北ヨリ南ニ算フルトキハ左ノ如シ。

第一、トランムア峠(一〇〇〇米突、譯者云フボールアリノウ氏カ一九一六年ノ著書ニ於テハ二八〇米突ト云フ)ニシテハトライヲ經テ宜安トバクヒンブーントヲ連絡スルモノナリ、山徑難惡ナリト雖、安南海岸ト湄公河間ノ最短道路ニ當ルヲ以テ甚タ重要ナリ。

(註、宜安トバクヒンブー間ノ距離ハ直徑二百キロメートルニ過キス)

第二、ムージア峠(四六〇米突、アリノウ氏ハ五五〇米突ト云フ)ニシテソンジャン及ヒセパンフアイ兩谿地間及ハチントミユオンタケ間ヲ連絡セシム。

第三、アイラオ峠(八百米突、アリノウ氏ハ四一六米突ト云フ)ニシテ虎牙山ノ南ニ在リ、能ク安南人ヨリ知ラル、此峠ハ馬車ヲ通スヘキ良道ニ依テセパンヒエンノ谿

地ヲ傳ヒツツカントリト湄公河岸ノサヅアナケツトトヲ連絡セシム、此道ハ今日迄安南ト老撾間ノ唯一ノ好道路ナリ。

第四、ノンソン峠ニシテ難易ハ措キ兎モ角モカンナムヲアツトブーニ連絡セシム。

第五、アンケオ峠ヲ通シテ難惡ノ步道アリ、コンツームヲ經テキノントアツトブートヲ交通セシム。

次ニ安南海岸ノ諸流域ハ縦斷的峠ニ依テ相互ノ間ニ交通ス、其中ニ左ノ峠アリハチントカンビン間ノデオカン山(安南門ト稱ス)。

有名ナル雲嶺(四七〇米突)ツーラーヌヨリ順化ニ至ル道路此ニ通ス、今日鐵道嶺下ヲ貫通ス。

デオカ(六百米突)ハ起伏セル地方ヲ通過シテフエンヲカンホアニ連絡ス。

第三節 氣候

印度支那ノ領域廣大ナルカ故ニ氣候ハ一樣ナラス、即チ緯度(東京ノ北端ドンナント交趾支那ノカモウ岬端トノ間ニ緯度ノ差十五度即チ約一六五〇キロメートル)ノ距離アリ、高度、土地ノ性質、海上ト接近及ヒ殊ニ重モナル風向ニ原因シテ變化

ス、然レトモ要スルニ熱帶ノ氣候ニシテ即チ暑クシテ濕氣アリ。

印度ニ於ケルカ如ク一年ヲ定期風ノ循環ニ依テ定マレルニ季節ニ分ツ、南西ノ定期風即チ夏ノ定期風ハ五月ヨリ十月マテ行ハル、之レ濕氣ノ氣候、雨ノ氣候ナリ此氣候ノ生スル原因ハ大陸カ過度ニ熱セラレテ大氣ヲ呼ヒ南方ノ濕風之ニ應シテ急ニ此ニ奔向スルナリ、北東ノ定期風ニ於テハ冬期十月ヨリ三月末マテヲ占ム、此季節ニ於テハ濕氣ヲ生スルコト少ナク即チ乾燥季ナリ、此定期風ノ間ハ前定期風ノ時ト反對ノ現象ヲ生シ、風ハ亞細亞ノ内地ヨリ赤道ニ向テ吹ク。

此兩季節ハ交趾支那及東甫塞ニ於テハ殆ント規則正シク明白ニ分界セラレ、然レトモ東京及安南ニ於テハ然ラス、此ニハ中間季節アリテ其期間一定セス其間氣温ニ著ルシキ高低ヲ呈ス、且ツ定期風ノ顛倒的ニ變化セントスルノ時ニ方リ反對ノ方向ヨリ異ナルニ勢力ヲ以テ促進セラルル大氣ハ一定ノ平均ヲ保持スルコト能ハス、此時季六月ヨリ九月マテニ於テ一般ニ恐ルヘキ颶風ヲ生スルナリ。

交趾支那ハ氣温ノ恒久ナルヲ特質トス即チ一年間ニ於ケル氣温ノ差異ハ至テ輕微ナリ、斯クノ如ク暑熱一様ニシテ繼續シ且ツ非常ニ濕氣ヲ含ムカ故ニ歐洲人ノ健康ニ適セス、之ヲシテ早ク貧血ニ陥ラシム。
サイゴン、シヤロン、カン、見、支那、人、の、

東京ニ於ケル氣温ノ變動ハ之レヨリモ大ナリ、夏ハ交趾支那ニ於ケルヨリモ暑ク且ツ苦シト雖、此ニハ眞ノ冬季アリテ歐洲人ノ爲メニ夏季ノ疲勞ヲ回復スルコトヲ得セシム、夏ニ於テ寒暖計三十四度攝氏ヲ示スト雖、冬ニ於テハ東京平野ニ於テ三度マテ下リ、諒山地方ニ於テハ一度マテ下リ、ドンカンノ高原ニ於テハ零點以下ニ降ル。

安南ハ暑シ、然レトモ海ニ接近セルト、軟風ノ來ルカ爲メニ歐洲人ノ居住スルニ交趾支那ニ於ケルカ如ク苦痛ナラス。

東甫塞ニ於ケル氣候モ亦交趾支那ニ於ケルヨリモ凌キ易シ、老撾ニハ苦痛ナル數月アリ、下部老撾ハ東甫塞ノ氣候ニ與カリ、上部老撾ハ東京ノ氣候ニ屬ス。

之ヲ要スルニ印度支那ノ北方ニ於テハ半島連山ノ結果トシテ濕氣ヨリ少ナク、ヨリ大陸的ナリ、南部ニ於テハヨリ暑ク、濕氣ヨリ多ク、東方ニ於テハヨリ平均シ、西方ニ於テハ緯度ニ從フテ變動ス、之ヲ印度支那ノ氣候ト爲ス。

雨量 降雨ハ多量ナレトモ其分配ハ一様ナラス、之レ長大ナル安南山脈ノ存スルカ故ニシテ此山脈ハ氣流ノ分配ニ於ケルカ如ク降雨ノ分配ニ於テモ影響ス、六月ヨリ十一月ニ至ルマテ交趾支那、東甫塞及ヒ老撾ハ多量ノ降雨アルモ安南ニハ甚

タ少ナシ之ニ反シテ東北定期風ノ間ハ安南ニ降雨アルモ、雲ハ安南山脈ノ頂巔ニ支ヘラレテ之ヲ越ユルコト能ハサルカ故ニ湄公河ノ流域ハ殆ント雨ヲ見ス、東京ハ夏雨ノ分配ト東北定期風ノ雨ノ一部ノ分配ヲ受ク、蓋シ海岸ト平行セル山脈ノ形狀カ東北定期風ヲ低地即チ東京平野ニ向テ屈折セシムルヲ以テナリ。

毎年ノ降雨量ハ柴棍ニ於テ一米突七五ヨリ二米突ナリ、ランピヤンニ於テハ其海拔高キカ故ニ畧同量ナリ、河内ニ於テハ〇米突九〇ヨリ一米突ニ減ス、最モ多量ノ降雨アルハ東甫塞ノカンボウ地方ナリ。

第四節 水路誌

湄公及ヒ紅河ハ印度支那ノ二大流脈ナリ、甲ハ北ヨリ南ニ向ヒ長ク約二千五百「キロメートル」ノ間印度支那ヲ流レ、乙ハ西北ヨリ東南ニ向ヒ東京ヲ兩斷ス。

兩河ハ相似タル性質ヲ有ス、此性質ハ水分ヲ供給スル氣候、水分ヲ分配スル山野ノ形勢、水量ト其増減ヲ決定スル地質ヨリ來レルモノナリ、即チ兩河トモ初メハ水ノ浸潤スル急傾斜ノ地域ヲ通過シ終リニ平坦ニシテ水ノ浸潤セサル土地ヲ横キル、共ニ其上流ノ一大部分ニ於テハ水量甚タ不一樣ニシテ縱奔、有害ナル大激流ニ

シテ、下流ニ至ルニ從ツテ緩和シテ其兩岸ヲ肥沃ニシ營養ヲ供給シ、人民ヲ招致シ且航行スルニ堪ユ。

其水量ノ増減ハ甚タ不規則ナリ、西南定期風ヨリ生スル大雨及ヒ雪ノ溶解ハ之ニ莫大ノ水量ヲ與ヘ驚クヘキ増水ヲ來タス、東北ノ定期風ト共ニ乾燥季至ルニ及ントテ水量減少シ、兩大河共ニ砂洲及ヒ小嶼ノ間ニ蜿蜒スル細流ニ過キサルモノトナリ(譯者云フ、之レ誇張ナリ實際ハ斯クノ如キ細流トハナラス)航行ヲ多少困難ナラシム、此時季ニ於テハ湄公河ハ單ニ其熱帶地域ヨリ來ル合流ヨリ水量ヲ供給セラルルノミ。

(一) 湄公河

湄公河ハ其源ヲ西藏ノ大高原ニ發シ老撾ニ入レル頃ニハ既ニ一大河トナル、此河ハ老撾東甫塞、交趾支那間ニ於ケル理想的ノ交通路タルモノナレトモ、不幸ニシテ其流路ノ所々ニ瀑布及急湍アリテ航通區域ヲ數斷シ、航通上ヨリ見テ各之ヲ孤立セシメ通商上ニ於ケル價值ノ大部分ヲ喪失セシム、其急激ナル水流ハ大體ニ於テ北―南ノ方向ヲ取リ、シエンセンニ於テ第一回ノ屈曲ヲ畫キ、リユアンブラバンニ於テ第二回、シエンカンニ於テ第三回、ノンカイノ下流ニ於テ第四回ノ屈曲ヲ爲

シ、再ヒ北ヨリ南ノ方向ヲ取リテクラチエーニ至リ此ニブノンベンノ大屈折始マリ途ニ海ニ終ル。

グイヤンシヤースノ上流四十キロメートルノサンバナマテハ涪公河ハ唯獨木舟ヲ通スルノミ、之ヲ以テグイヤンシヤースヨリユアンブラバンニ遡ルニ十日乃至十二日ヲ要ス、サンバナヨリケンタシヤースニ至ル間ニ涪公ノ大航通域ト稱スルモノアリ、延長五五〇乃至六六〇キロメートル、一年ヲ通シテ吃水一米突ノ汽船ヲ通スルコトヲ得ヘシ、涪公ノ此部分ハ頗ル有用ナルモノニシテリユアンブラバン王國、トランニン州及ヒ暹羅ノ豐饒ナルサコンラコース及バンヅアマケン地方ノ出路ナリ、然ルニ未來ニ富メル此等ノ地方ハ左ノ障害アルカ爲メニ海上ヨリ孤立ス、第一ケンマラットノ急湍長サ百五十キロメートルニシテバクムーン附近ニ終ル、第二通過スル能ハサルコンノ瀑布、此ニハ長サ四五キロメートルノ鐵道アリテ最モ危險ナル水路ヲ迂回スルコトヲ得セシム、第三サンボク、サンボル間ノ急湍ナリ、バツサツク及ヒスタントラント稱スル航通スルヲ得ヘキ二小流域此三急湍ノ間ニ介在ス。

クラチエーヲ下リコンボンチヤンヲ下リ殊ニブノンベンヲ下ルニ及ンテ涪公

河ハ増大シ政府ヨリ補助セララル大河郵船會社ノ稍大ナル汽船ノ航通ニ堪ユ、又クラチエーヲ下ル頃ヨリ涪公ノ露地人口漸ク衆シ。

東甫塞ノ首府ブノンベンニ於テ大河分レテ三流トナル、第一ハトシレサツアノ大湖ニ入り増水季ニ於テ之ニ滿水シ乾燥季ニ於テ之レヨリ排水ス、此大湖ハ乾燥季ニ於テ大河ノ水量ヲ調整スルモノニシテ、涪公河カ周圍ノ高原ヨリ流下セル沖積土ヲ以テ埋填セル一大海灣ノ殘影ナリ、増水季ニ於テハ其水面ノ廣サ四倍トナリ海面ニ比シテ八米突乃至十米突高シ、減水季ニ於テハ沿岸露出シテ其地味頗ル膏腴ナリ。

第二、第三ノ支流ハ前河、後河 (Postérieur et Antérieur) ト稱セラレ、東南ニ向テ流レ其泥土ヲ以テ一大平野ヲ作ル、此平野ハ尙低地ト爲リテ海面ニ延長ス、而シテ此平野ハ交趾支那ノ一部ヲ爲スモノニシテ、尙東北ニ當テ兩グアイコ河ドンナイ河(ランビヤン山ヨリ來ル)及ヒドンナイ河ノ合流タル柴棍河ノ共ニ形成シタル、他ノ平野ト合シテ其大ヲ加フ、此等ノ全體ハ合シテ平坦ニシテ支川及堀割縱横シ、所々ニ小高地ヲ有スル一國ヲ作ル、此等ノ小高地ハ昔日小嶼タリシモノニシテ大河ノ沖積地ヲ以テ大陸ニ繼合サレタルモノナリ、此國ハ迅速ニ増大シ南方海向ニテ地盛リ

セラル然レトモ海岸半水半陸ナル此不確定ノ地方ニ於テハ如何ナル海港ヲモ設定スルコトヲ得ス。

淵公ハ其右岸ニ於テセムーン河ノ水ヲ受クセムーン河ハナムシー河ヲ合セルモノナリ此兩河ハ全ク暹羅領ニ存シ豐饒ナル地方ヲ流ル。

其左岸ニ於テハリユアンブラバンノ邊ニ於テナムウー河ヲ合ス此河ハ黑河及ヒ東京ニ向フ出路ヲ開クモノナリグイヤンシヤースノ下流ニ於テハトランニン州ヨリ來ルナムグン及ヒナムサン河ヲ合スバクナムカンノ附近ニ於テセバンフアイ河合流ス此河ハムージャノ峠ヲ經テ安南ノハチンニ到ラシムルモノナリ之レヨリ下流ニ於テハセバンヒエン河注ク此河ハアイラオ峠ニ至ルヲ得セシム此外サラグアース州ノセドン河セサン及ヒセバンカン兩河ヲ合シテ水量ヲ増セルアツトブー州ノセコン河アリ。

(二) 紅河

紅河ハ其源ヲ雲南ニ發シ老開ニ於テ東京ニ入ル老開ハ廣東ノ一商事會社ノ建設セル市街ニシテ此會社ハ佛人ヨリモ以前ニ紅河カ雲南ニ入ル最近道路ナルコトヲ發見セルナリ安沛ニ至ルマテ紅河ハ頗ル窄迫セラレテ流ル興化ノ附近及ヒ

グイエトリニ於テ二大合流ヲ受ク其ニ同シク雲南ヨリ出テタルモノニシテ水勢モ亦紅河ノ如ク大ナリ右方ヨリ入ルモノヲ黑河トシ左方ヨリ入ルモノヲ清河トス山西ヲ過クルコト僅ニシテ大河兩分シ東京平野起ル紅河ハ更ニ數派ニ分ル就中其大ナルモノハ寧平ニ流ルルダイ河ラビツド堀割ト爲リテ太平河ニ投スル北方ノ支流太平河ハソンカウソンチエオン兩河ノ合セルモノナリニシテ最モ廣キ本流ハアノイホンエンヲ過キテナムデン(南定)ノ附近ヲ流ル。

東京平野ハ紅河及太平河ヨリ組成セラレタルモノニシテ古ヘハ一海灣タリシモノナルカ兩大河ノ冲積土カ次第ニ之ヲ填埋シ今モ尙填埋シツツアルナリ紅河ノ河口多シト雖其流出スル土質物多量ナルカ故ニ皆塞閉セラレ海防港ノ出入モ大船ニハ困難ト爲リ僅ニクワナントリユ一及ヒクワカム兩河ヲ經テ通航スルヲ得ルニ過キス。

航通ノ點ニ於テ紅河ハ尙足ラサル所多シ上流ニ於テハ急流ナルト岩礁アルト水深大ナラサルトノ爲メ下流ニ於テハ位置ヲ變動スル砂洲多クシテ水路ヲ變シ坐洲ヲ頻繁ナラシムルカ爲メナリ一年ヲ通シテ汽船ノ定期航通河内海防安沛ノ間ニ行ハレ増水季ニ於テハ老開マテ行ハル譯者云フ今日ニ於テハ一年ヲ通シテ

安沛、老開ニ至ル定期船無シ、紅河ノ二大合流モ亦甚タ薄弱ナル状態ニテ航通ヲ爲スコトヲ得ス、清河ハチユリエンカンマテ黒河ハシヨボノ岩礁マテ汽船ヲ通スルヲ得レトモ、之レヨリ上流ニ於テハ兩河共ニ巨岩河中ニ散在シ所々ニ急湍ヲ以テ斷タル、而シテ初メハ急湍ヲ通過スルニ冒險的ニ戎克船ヲ以テスルモ上流ニ及ンテハ僅ニ獨木船ヲ用ユルヲ得ルノミ。

唯紅河ノ水流ハ雲南ト海岸地即チ雲南府ト海防トノ間ニ最短距離ノ交通路ヲ開クカ故ニ重要ナリ、余ハ後章ニ於テ我印度支那占領以來東京ヲ經由スル通過貿易カ大ナル割合ニテ増加セルコト、及ヒ目下蒙白マテ運轉セラレツツアル雲南鐵道カ雲南府マテ達シタル後ニハ更ニ増加スヘキコトヲ説クヘシ、雲南鐵道ハ一九一一年ヨリ全通ス。

第五節 海岸

佛領印度支那ノ周圍ハ大部分海ヲ以テ洗ハル、東京灣頭ノ茫街ヨリ暹羅灣上コトクット島ノ附近マテ其海岸ノ延長二千キロメートルヲ過ク、而シテ茫街ヨリカモウ岬端ニ至ル東面ノ部分ハ支那海ニ濱シ西部ハ暹羅灣ニ接ス。

東部海岸ハ大體ニ於テ大ナルS字形ヲ有ス、平野地方ノ海岸ヲ除イテハ一般ニ岩石多シ、S字ノ上部ハ岩石岸ニシテ無數ノ島嶼アルヲ以テ著ルシ、(ベードロン群島、カリバ、ゲバオターブル、チルサン、シヤトウルノ一)等此部分ニハ能ク掩護サレタル灣又ハ入江アリ、チエンエン灣、アロン灣、ホンチイ灣ノ如キ是レナリ。

太平河ノ河口ヨリ宜安ニ至ルマテハ沖積地ノ海岸ニシテ低ク、漸ク海面ノ上ニ出ツルニ過キスシテ一モ港灣無シ、此地方ノ港ハ陸地ノ内部河邊ニ在リ、廣安、海防、タイピン、南定ノ如シ。

宜安ノ南ヨリ安南海岸トナリカツプサンシヤツクニ至ルマテ海岸犬牙ノ如ク出入シ、入江アリ、小灣アリ、險峻ナル岬角アリ、細長ノ半島海ニ入テ多數ノ島嶼トナルアリ、其海中ニ突出セル部分ハ堅キ岩石ヨリ成リ、波濤ニ蝕害セララルコト軟岩ノ如ク甚タシカラス、軟岩ハ顛倒セララルコト堅岩ヨリモ容易ニシテ波濤之ヲ浸シテ弓狀窩ヲ作ル。

ドンホイ、カントリ及ヒチユアチアンノ附近ニ於テハ海岸ニ沿フテ短カキ大河ノ如キモノアリ、之レハ低地ノ可動的砂山ヲ以テ形成セラレタルモノニシテ、此砂山ハ今ハ淺水ノ池澤トナレルモ、古ハハ海灣タリシモノヲ大海ヨリ分離セシメ唯

狭キ水路ニ依テ海ト通セシム、此邊ノ海岸ハ宛モ佛國ラングドックノ入江ニ似タリ。

之レヨリ南ニ於テハ大ナル岬灣ノ出入アリテ相當ノ良港アリ、ツーラーヌ港ハ水深六米突乃至十米突アレトモ、大海ノ風ニ對シテ掩護セララルコト十分ナラス、尙キノ灣アリシユアンデー灣アリワレ岬ノ南ニハ深キホンコエ灣アリ、ナトラン灣アリ、殊ニ良好ナルカムラン灣アリ、或ル人ハ此ニ印度支那將來ノ巨港ヲ築設シ歐洲東洋間航路線ヨリ餘リニ遠サカレル柴棍及海防ニ代ラシムルコトヲ希望セリ、此港ハ時間ヲ空費セシメスシテ海上ニ汽船ヲ碇泊セシメ或ハ貨物ノ積卸ヲ爲スコトヲ得セシムヘシ。

總テ上記ノ港灣ハ船舶ノ爲メニ避難所トシテ多少ノ安全ヲ與フ、フアンラン及フアンチエーノ兩港ハ餘リニ展開セラレ、カツブサン・ジャツク灣ハ掩護十分ナラス。

サンジャツク岬ヨリカモウ岬ニ至ルノ海岸ハ低平、不定、港灣無シ、唯湄公ノ數支流ニ依テ貫通セララルノミ、海上ニブローコンドルノ群島アリ。

暹羅灣ノ方面ニ於ケル海岸ハハチエンニ至ルマテ低平ナリ、注目スヘキモノト

シテハラクジア及ヒハチエン灣トブローダマ群島其他ノ數島嶼アルノミ。

ハチエンヨリ進メハ海岸再ヒ岩石トナリテ高ク、數所ノ半島ト砂濱又ハ沿澤岸ト交互ス、其中多少ノ利益アリトシテ記載スヘキハカンボット、コンボンソムノ兩灣トフコック及ヒコロロンノ諸島ナリ。

第六節 人種學

印度支那ニハ航行スヘキ諸大河アリ、天然ノ港灣アリ、沃地アリ、良林アリ、一言ニシテ云ヘハ人ヲ來ラシメ人ヲ此ニ留マラシムヘキ總テノ材料ヲ有スルカ故ニ、印度支那及ヒ西藏ヨリ集團ヲ爲シテ此ニ來リタル種々ナル人種ヲ保有ス。

此等集團ノ民族ハ土著民族ノ傍ニ來リ、或ハ土著民族ト雜居シ和合シテ生活シ或ハ之ヲ肥沃ナラサル不健康地又ハ收穫少ナキ山地ニ驅逐シテ自カラ其選定セル土地ニ定住スルコトヲ謀レリ、此土著民族ハ今日殆ント全ク消失シ毫モ之ニ關スル精確ナル記録無シ。

此等侵入民族ノ中ニテ吾人ハ逐次左記ノモノヲ研究セントス、第一東甯塞人、第二印度人、第三タイ人、第四安南人、第五支那人、第六最近現時ノ侵入民族マン人、メオ

人、ロロ人、ヌン人。

(一) 東甫塞人

東甫塞人ハ自ラ印度ノ宗教及ヒ技術ニ染浸セルクメル人ノ子孫ナリト云フ、クメル人ハ實際印度ヨリ來リ湄公及大湖ノ沿岸ニ定住セントシ、從來此地方ヲ占有シタル民族ヲ包呑シ、又ハ消滅セシメタリ、其王國ハ第六世紀ヨリ第十二世紀ノ間ニ繁榮セシカ、タイ人ノ侵入以來衰微ニ傾ケリ、トンレサツプ(大湖)ハ此國王ノ中心ニシテ亦卓絶セル文明ノ中心ナリキ、其アソコルノ遺跡ハ吾々ノ爲メニ印度建築術ノ壯宏ナル遺物ヲ與フ、其後東甫塞ハ安南人ト暹羅人トカ覇權ヲ爭フ戰場ト爲リ、以テノロドム王カ佛國ノ保護權下ニ身ヲ託スルノ時ニ及ヘリ。

(二) 印度人

印度人ハ耶蘇紀元一世紀ノ初ニ印度支那ニ來リ、二箇所ニ植民地ヲ建設シ文明ヲ齎ラセリ、其一ハ東方支那海ニ向ヘル所ニシテチャンバ是レナリ、其二ハ湄公ノ下流ニ當リ既ニクメル民族カ占領セル地域ナリ、此第二ノ植民地ハ支那語ニテフーナンノ名ヲ以テ知ラレ、久シク支那ニ朝貢シ一方征服セルクメル人ヲ臣下若クハ奴隸ノ如ク使役セリ、然ルニ第六世紀ノ頃クメル人即チ東甫塞人ハ其壓制ニ堪

ヘスシテ革命ヲ起シ自カラ主權者ト爲リ、從來之ヲ壓制セル貴族政體ヲ廢シ、其偶像寺院ヲ破壞シ、貪婪極リ無キ宗官ヲ放逐セリ、其後東甫塞人ハタイ人ノ傳ヘタル温和ニシテ道德的經濟的ナル佛教ニ歸依セリ。

(著者註、佛教ハ耶蘇教ノ如ク普及シ、平等主義ノ宗教ニシテ宗官ヲ許サス、犧牲ヲ許サス之ヲ支配スル重モナル觀念ハ博愛主義ナリ、自己ヲ抑制シ他人ニ慈善ヲ施スコトヲ佛教ノ二要諦ト爲ス、(サロモン・レーナツク氏ノ宗教史ヨリ抜)。

東甫塞ハ第十二世紀ノ頃其勢力ノ絶頂ニ達セシカ、其生命トモ云フヘキ貴族政體ヲ失フト同時ニ、再ヒ隣國民ノ征服ヲ受クヘキ機會熟セリ。

チャンバノ植民地ハ北方ヨリハ安南人、西南ヨリハ東甫塞人ニ迫ラレ東方ヨリハ支那人、馬來人ノ海賊ニ脅サレ亦等シク崩壞セリ。

(三) タイ人

タイ人(自由民族ノ意義)ハ西藏ノ國境、雲南ノ北方地方及ヒ上部緬甸ヨリ來レルモノナリ、其中上部緬甸ハ一般ニ此民族ノ發生地ノ如ク信セラレ、此地方ニ於テタイ人ハ人口過増ノ爲メニ狹隘ヲ感スルニ至レリ、最初タイ人ハ土着民族ニ接近シテ定住シ之レト混合セシカ、人口ハ増加シ國內ノ耕作地狹少ナルカ故ニ次第ニ諸

大河ヲ傳フテ宛モ溢流ノ如ク南支那、東京、老撾ヨリ東甫塞マテモ蔓延シ到ル所ニ自治國ヲ建設シ(リ)ユアンブラバン、グイヤンシヤ、ヌシエンコン王國ノ如キ更ニ暹羅ノ如キ大國ヲモ建設セリ、タイ人ハ到ル處大河ニ沿フテ住居シ湄公河、其合流珠江、紅河ノ沿岸ニ植民セシカ、珠江谿地ニ於ケル支那人、紅河谿地ニ於ケル安南人ノ如ク之レヨリ有力ニシテ且繁殖力強キ民族ニ衝突セシトキハ自カラ停止セサルヲ得ス、支那人安南人ハ全然之ヲ防遮シタリ、タイ人カ此防遮ヲ受ケタルコトハ湄公谿地ニ於テ其同族カ之レヨリモ容易ナル移住ヲ爲シタルニ參加スルコトヲモ不能ナラシメタリ。

佛領印度支那ニ現住スル重モナルタイ民族ハ左ノ如シ、第一老撾人ニシテブータイ人、ブーウン人、白タイ人、黒タイ人、紅タイ人、ルー人、コーン人等ニ細別セラル、第二東京平野ヲ圍繞スル一帯山地ノトウ人ナリ。

(四) 安南人

蒙古人ト血統關係ヲ有シ、支那人ヨリモ古ルキ安南民族ハ西曆紀元前二世紀頃ニ支那ノ南方廣東ノ方面ヨリ來リタリ、支那人ノ爲メニ驅逐セラレテ安南人ハ徐ロニ且漸次ニ海岸ニ沿ヒ最初ニハ東京ニ、次ニハ安南ニ、遙ニ後ニハ交趾支那及ヒ

東甫塞マテ蔓延セリ、東甫塞ニ於テハ安南人此ニ植民シ、其活動ヲ以テ東甫塞人ノ懶惰ニ代ハテシメタリ。

安南人ハ第十五世紀マテハ支那帝國ニ朝貢セシカ、遂ニ此羈絆ヲ脱シ、征服難婚及ヒ主トシテ農業的植民ニ依テ前占有者ヲ驅除シ吞嚙シタリ、第十六世紀ノ頃安南ヨリチャム人ヲ驅逐シ之ヲ安南海岸ト湄公河トノ間ナル樹木茂レル山地ニ追込メリ、此地方ニ至レハ今日ニ於テモチヤムノ部族ヲ見ルヲ得ヘシ、其一部分ハ平和ニシテ定住スト雖他ハ鬪争掠奪ヲ好ム。

一般ニ云フトキハ安南民族ハ東京及交趾支那沖積平野及ヒ安南ノ海岸諸區域ニ住スル人民ニシテ山國ノ副峯ニ會スレハ停止ス。

(五) 支那人

支那人ハ印度支那半島ノ到ル處ニ散在シテハ重要ナル商業的集團ヲ作ル(交趾支那ニ於ケルシヨロン、安南ノフアイフ、東京ノ茫街地方ノ如シ)商業ニ巧妙ニシテ甚タ起業心ニ富ミ、事實上商業ト小工業トヲ專占ス。

其侵入ハ安南人ノ移住後久シカラサルモノニシテ、支那人ハ安南人ヲ同化セントシテ成功セス、唯之ヲ征服シテ久シク統轄セリ、而シテ安南人ハ久シク反抗シタ

ル後遂ニ其壓抑者タル支那人ノ文學、風習、技術、宗教及文明ヲ採用スルニ至レリ。

(六) 最近ノ侵入民族

楊子江南方ノ地方ヨリ南國ニ向ヒ人民カ引續キ推移、潛入スル移住的運動ハ今日ニ至テ尙止マス。支那語ヲ解シ、支那人トハナラサレトモ、甚シク支那勢力ノ感化ヲ受ケタル新民族數種ハ百年以前ヨリ新陳代謝シテ上部東京ヨリ老嫗ノトランニシテ地方マテ來レリ。即チ福建及湖南ヨリ出テタルマン人、上部貴州ヨリ來リタルメオ人、苗族、四川及上部雲南ヨリ來リタルロロ人、支那ノ南部ニ居テ支那人ヨリ驅逐セラレタルマン人は是レナリ。此等ノ諸民團ハ其通過スル地方ニ於テ其慣レ來リタル氣候及ヒ地質上ノ條件ヲ發見スルコトヲ求ム。其中マン人、メオ人ハ土地カ適當ナル高度ニ存シ、肥沃又ハ灌溉ノ便アルカ爲メ永久的耕作ニ適スルニアラサレハ定住セス。斯カル土地ヲ發見スル能ハサルトキハ、其一時耕作セル地方ノ喪失セル時ニ他ノ地方ニ移轉ス。即チ一集團一家族毎ニ新タナル開拓地ヲ求メテ此ニ移ル。

ロロ人及スン人ハ之レヨリモ簡單ニシテ唯使用スヘキ土地アル所ニ定住ス、又差別無クタイ、メオ、マンノ諸民族ト隣在ス。

(七) 結論

簡單ニ其來歴ヲ研究シタル諸民族ハ何レモ印度支那ノ領土ニ入ルニ當テ、其固有ノ風習、習慣、法律、宗教、言語ヲ帶同シ、且ツ之ヲ保存スルコトヲ欲セリ、而シテ各民族ハ各其傳來ノ方針ニ於テ進行スルコトヲ希望シタリ。此ニ於テ諸民族カ必然ノ勢トシテ相接觸スルヤ互ニ他ノ民族ヲ同化シ他ノ民族ニ侵入スルコトヲ謀レリ、之レ當然ノ事ニシテ之レカ爲メニ時々激烈ナル反動ヲ生セリ。

今日ニ於テモ尙反抗カ到ル處全ク緩和セラレタルニアラス、或民族ハ唯層積セルノミニテ互ニ融和セス、然レトモ多數ノ民族ハヨリ強ク、ヨリ繁殖シ、ヨリ文明ナル民族ト融合セリ、而シテ雜婚ヨリ混血兒ヲ生セルカ爲メ最初存在シタル多クシテ且ツ深キ不和ノ一部分ヲ消滅セシメタリ。

之ヲ要スルニ印度支那ニ於テハ二大民族アリ、一ハ寧ロ印度文明ニ屬スルタイ人ニシテ他ハ支那文明ニ屬スル安南人ナリ、タイ人ハ諸大河及其合流ニ沿フテ發展シ多少光輝アル運命ヲ有シタリ、安南人ハ印度支那人口ノ四分ノ三ヲ占メ甚タ鋭敏ナル國民的感情ヲ有シ、北方ヨリ南方ニ向ヒ海岸ニ沿フテ發展シ最好ノ土地ニ定住セリ、タイ人ハ半島ノ西部ニ安南人ハ其東部ニ於テ覇ヲ爲ス。

東甫塞人モ亦頗ル興味アル民族ナリ。印度文明ノ感化ヲ受ク。此等諸民族ノ文明ハ皆其源遠クシテ尊重スヘキモノナリ。我土人政策ハ之ヲ參酌セサルヘカラス。蓋シ土人政策ナルモノハ上ニ算ヘタル重モナル民族ノ法律、習慣ニ於テ植民制度ヲ適應セシムルヲ以テ、本義トスヘキモノナルコト明カナルヲ以テナリ。

(八) 印度支那ノ人口

印度支那ニ於テハ交趾支那ヲ除ク他ノ諸國ニ於テ未タ人口調査無ク戸籍制度無シ。故ニ確實ニ人口ノ數ヲ定ムルコト甚タ困難ナリ。然レトモ多クノ州ニ於テ行ハレタル調査ヲ縱トシ、各種參考資料ヲ橫トシ更ニ一九〇七年ニ東甫塞ニ還付セラレタル舊州二十五萬ノ住民ヲ合算スルトキハ總人口一六、六〇〇、〇〇〇ト定ムルコトヲ得ヘシ、其分配左ノ如シ。

東 京	東 洋 人	五、七〇〇、〇〇〇	歐 洲 人	八、〇〇〇
安 南	同 上	五、六〇〇、〇〇〇	同 上	二、〇〇〇
交 趾 支 那	同 上	三、〇〇〇、〇〇〇	同 上	六、〇〇〇
東 甫 塞	同 上	一、六〇〇、〇〇〇	同 上	一、〇〇〇
老 撾	同 上	五〇〇、〇〇〇	同 上	二五〇
廣 州 灣	同 上	二〇〇、〇〇〇	同 上	一〇〇

(九) 人口ノ分配

註 東洋人ノ中ニハ日本人約二百人支那人二十五萬人ヲ含ム、又守備軍ニ屬スル歐洲人ノ數ハ上記ノ計算ニ含マレズ。

一平方キロメートルニ對スル人口ノ密度ハ地方ヲ異ニスルニ由テ大ニ差アリ、一方ニ於テハ人口過剩ノ地方アリ、他方ニ於テハ殆ント住民無キ地方アリ、豐饒肥沃ナル平野地方、或ハ河及湖水ノ附近、海ノ附近ハ共ニ人口集中ノ地方ナリ(交趾支那、東京、安南海岸、東甫塞ニ於ケル大湖ノ地方ノ如シ)、侵入シ能ハサル森林、岩石多キ高原、不毛ノ山地ハ人民之ヲ好マス、即チ人口分散ノ地方ナリ(老撾、安南山脈、東京山地ノ或部分ノ如シ)。

印度支那ハ莫大ナル農業ノ富源ヲ有スルカ故ニ、其人民ハ殆ント専ラ土地ノ耕作ニ依テ生活ス、然ルニ佛國ノ文明ハ土人ノ活動ノ爲メニ新タナル道ヲ開キ、後ニ陳ルカ如ク商工業ニ於テ土人ヲ要求スルニ至レリ(鑛山、製造品、智的職業)。

第一章 政治地理

第一節 印度支那征服畧史

佛國ト安南帝國トノ最初ノ關係ハ佛國東印度會社及外國傳道會社ノ設立時代

ニ週ル。

最初ノ通商上及外交上ノ行動ハ東印度會社カ東京副王ニ爲シタル交渉トアド
ランノ僧正ビニヨウドブエーヌカ安南皇帝ジャロン(嘉隆帝)ニ對スル使命ナリ。

(一) 交趾支那ノ征服。

嘉隆帝ノ後繼諸皇帝カ宣教師及耶蘇舊教徒ヲ殘害セルカ爲メ、佛國海兵ノ爲メ
ニ幾回カ干涉スルノ機會ヲ與ヘタリ、殊ニ一八四七年、一八五〇年及ヒ一八五六年
ニ於テ然リ、次テ一八五八年ニ至リ嗣德帝カ命令シタル虐殺ノ結果トシテ傳道會
社ハ那破崙三世及女王イザベル(西班牙)ノ武力干涉ヲ惹起セリ。

一八五九年二月十七日ゴウドジュヌイイー提督ノ佛西兩國ノ水陸兵二千三
百人ヲ以テ柴棍ヲ奪取セルコトハ東洋ニ於ケル佛國植民地ノ發端トナレリ、頃日
交趾支那ニ於テハ盛大ニ之カ五十年紀ヲ祝賀セリ。

支那遠征ノ爲メニ他ノ軍隊カ出發セル爲メ柴棍ノ守備隊僅ニ七百人ナリシ時、
安南ノグントリフオン將軍ハ大兵ヲ率ヒテ密ニ之ヲ包圍シ有名ナルキーホアノ
壘柵ヲ築ケリ、一八六一年シヤルネル提督カ援兵ヲ以テ到着セルカ故ニ佛國攻勢
ニ出ツルコトヲ得、軍艦ヨリ陸揚ケセル大砲ヲ利用シテ艦隊ト陸兵トノ協同作戰

ヲ行ヒ、一八六一年二月二十四、二十五兩日ノ勇敢ナル戰鬪ニ依テキーホアノ敵戰
線ヲ突破シ、安南軍ヲ擊退シ四月ミトヲ占領セリ、ピエンホア(邊和)ノ城廓ハ同年十
二月ニ奪取セラル、嗣德帝ハ遂ニ和ヲ請ハサルヲ得サルニ至リ、一八六二年六月五
日ノ條約ニ依テ柴棍(嘉定州)ミト邊和ノ三州及ヒブーロコンドル群島ヲ佛國ノ爲
ニ割ケリ。

其後附近諸州ノ安南都督ニ教唆セラレテ叛亂常ニ絶ヘサルカ故ニ之ヲ根絶ス
ルカ爲メド・ラ・グランジエール提督急襲シテ西方諸州(ウインロン、シヨドツク、ハチ
エン)ヲ侵略シ、之ヲ前ノ三州ニ併合シ、交趾支那全部佛領ニ歸セリ(一八六七年)。

(二) 東甫塞佛國ノ保護權下ニ置カル。

東甫塞ノノロドム王ハ東方ヨリハ安南王ニ迫ラレ、西方ヨリハ暹羅王ヨリ威脅
セラレ常ニ安キヲ得サルカ故ニ、遂ニ一八六三年八月十一日ノ條約ニ依テ佛國ノ
保護權下ニ立テリ、此條約ハド・ラ・グランジエール提督カノロドム王ノ側ニ使命ヲ
託シテ送リタルドウダール中佐ノ老練ニ依テ得タルモノナリ、其後四年ヲ經テ暹
羅ハ正式ニ此保護權ヲ承認シタリ、然レトモ東甫塞ヨリ奪取シタルバツタンバン、
アンコル及ヒシエムレアツブノ諸州ハ依然トシテ之ヲ保有セリ。

佛國ヨリノロドム王ニ命シタル一八八四年六月十七日ノ協約ヲ以テ交趾支那ニ對スル東甯塞ノ地位ヲ確定的ニ規定シ、東甯塞ヲ以テ行政上交趾支那ノ延長セラルモノト爲セリ、然レトモ此協約ハ或叛亂ヲ生セシメ軍隊ノ干涉ヲ必要ナラシメタリ、一八八五年六月三日及ヒ五日フタン及ヒアソコルノ戰鬪、同年六月十二日ノ一部ノ間ビユルサツトノ戰鬪是レナリ。

(三) 東京及安南ノ征服

富メル此兩國ノ併合ハ、之レヨリモ長ク之レヨリモ困難ナルコトヲ要シタリ。支那ニ住居セシ佛國ノ一商賈ジャンジュビイハ初メテ東京及ヒ紅河ノ谿地ヲ經テ、佛國商業ノ爲メニ雲南ノ市場ヲ開クカ爲メドウダールドラグレノ視察團及ヒフランシスガルニエーノ與ヘタル貴重ナル報告ヲ利用スルノ考案ヲ有シタリ、且彼レハ安南官吏カ其事業ニ凡ユル障害ヲ與ヘタルニ拘ハラズ、一八七三年三月支那ノ馬將軍ニ送ルヘキ武器ノ行李ヲ以テ雲南ノマンハオニ達スルコトニ成功セリ、馬將軍ハ當時雲南ニ起リタル回教徒ノ猛烈ナル叛亂ヲ鎮定スルノ任ヲ帶ヒタル者ナリ、其後少時ヲ經テジャンジュビイハ鹽ノ行李ヲ以テ此難事業ヲ再ヒスルコトヲ欲セリ、然ルニ安南官憲ハ武力ヲ以テ之ニ反對シタルカ故ニ、ジエビエ

イハ此ニ於テ交趾支那政府ニ之ヲ訴ヘテ其保護ヲ要求セリ。

當時交趾支那政府ノ長官タリシジュブレー提督ハ報ヲ得テ稍困惑シ、海軍大尉フランシスガルニエーニ砲艦二隻、海陸兵二百ヲ付シテ東京ニ送レリ、ガルニエーハ稍漠然タル訓令ヲ帶ヒテ談判ヲ試ミシモ成功セス、終ニ忍耐スル能ハスシテ一八七三年十一月二十日其小部隊ヲ以テ河内城ヲ奪取セリ、夫レヨリ更ニ進ンテ僅二十日間ニ東京平野ノ大部分ヲ占領シタリ、安南政府ハ此大膽ナル行動ニ驚駭シ、自カラ進ンテ和議ヲ請ハサルヲ得サルニ至リシカ、其常癖ノ惡意ヨリシテ之レト同時ニ黑旗軍ト稱スル支那ノ亂民團ニ佛人ヲ驅逐スルカ爲メニ援助ヲ請ヘリ、而シテ此黑旗軍次第ニ增長シ大膽ナル行動ヲ取リシカ故ニ、フランシスガルニエーハ之レカ驅逐ニ力ヲ盡ササルヲ得サルニ至リ、遂ニ伏兵ニ陥リ今日其墳墓ノ在ル附近ニ於テ戰死セリ、次テフランシスガルニエート安南官憲間ニ生シタル爭議ヲ解決スルカ爲メニ、交趾支那ヨリ派遣セラレタル民政官フィラストルハ一八七四年ノ初メニ於テ安南官憲ト一ノ協定ヲ爲シ、一八七四年三月十五日ノ條約ヲ以テ之ヲ正式有効ノモノト爲セリ、此條約ニ於テハ紅河ノ自由航通ヲ保證シ、歐洲貿易ノ爲メニ海防、河内及ヒキノンヲ開放セリ、然レトモ事實上フランシスガルニエ

一ノ大膽ニシテ先見アル政策ヲ放棄シタルニ等シ、何トナレハ佛軍ヲ全東京平野ヨリ撤退スルコトヲ承諾シタルヲ以テタリ。

當然ノ勢トシテフィラストール條約ハ安南人ニ於テ遵守セラレス、而シテ黑旗軍カ東京ニ常屯シ、且支那政府カ安南皇帝ヲ臣下ト見テ常ニ其政務ニ干涉セルカ爲メニ多數ノ葛藤迅速ニ生シ且重大トナレリ、東京ニ於テ相當ニ多カリシ西班牙宣教師モ亦自カラ取テ代ランカ爲メニ佛國ノ霸權ヲ攻撃シ、一方英國ハ其常慣ノ如ク離間策ヲ講シテ天下ヲ佛國ニ反對セシムヘク刺激セリ。

此困難ナル形勢ハ一八八二年ニ交趾支那長官ルミール・ド・ヴィエールカ四方ヨリ包圍セラレタル河内ノ守備隊ヲ増援スルノ必要ニ迫ラレシ時迄繼續セリ、此時歩兵二箇中隊砲兵一小隊ヲ送り、之ヲ海軍大佐アンリー・リヴィエールノ指揮下ニ置ケリ、當時リヴィエールノ使命ハ至テ平和的ノモノニシテ唯紅河ノ警察ヲ十分ニシ佛人ノ利益ヲ保護シ、而シテ之レカ爲メニ其小部隊ヲ戦闘セシメサルコトニ存シタリ。

然ルニ安南人ハ尙執拗ニ敵意ヲ表シタルカ故、尊敬セシムルカ爲メニ之ヲ攻撃セサルヲ得サルニ至レリ、此ニ於テフランシス・ガルニエールノ壯舉ニ倣フテ再ヒ河内城ト東京平野ノ一部ヲ占領セリ、安南皇帝ハ直ニ之ヲ支那政府ニ訴フ、黑旗軍ノ多數ノ部隊、支那、安南ノ正規兵來テ再ヒ我河内ノ小守備隊ヲ包圍スアンクロー、リヴィエールハ之ヲ突破シテ大打撃ヲ與ヘ山西街道ノ紙橋(Pont de papier)附近ノ村落ニ堅固ニ占據セル黑旗軍ヲ進撃セント欲セシカリアラス、他ノ勇敢ナル將校ト共ニ此突戰ニ死セリ、軍隊亦滅失シテ河内ニ歸レリ、實ニ慘敗セルナリ、此ニ於テ東京ノ問題ハ眞率露骨的ニ現出シ迅速ナル解決ヲ要求セリ、即チ東京ヲ撤退スヘキカ、或ハ兵力ヲ以テ之ヲ占領スヘキカノ一ヲ選ハサルヘカラス、而シテ第二ノ解決採用セラレタリ。

アルマン博士ハ佛國政府ノ交渉委員トシテ順化府ニ派遣セラレ、交趾支那守備軍司令官ブーエール將軍ハ東京ニ於テ軍事行動ヲ取ルノ任ヲ受ケタリ、將軍ハ約四千ノ兵ヲ用ヒテ河内ノ附近ヲ掃蕩シ、平野各地ノ守備隊ヲシテ四周ニ行軍シテ國內ヲ平定シ、偵察隊ヲ出シテ屢之ヲ巡視スルコトヲ得セシメタリ、此時ニ當テ嗣德帝死シ、安南朝廷ニ對シテ干涉ヲ行フヘキ好機會ヲ生シ、佛國ハ油斷無ク之ニ乘シタリ、即チクールベール提督ノ小艦隊ハチュアンナン砲臺ヲ砲撃シテ之ヲ占領セリ、(一八八三年八月十八日ヨリ二十日)安南政府狼狽シ急ニ佛國委員ト共ニ一八八三

年八月二十五日ノ條約ニ調印セリ、此條約ニ依テ安南ハ佛國ノ保護權ト、之レヨリ生スル總テノ結果トヲ承認シタリ、此ニ於テ支那ニ對スル安南ノ獨立ヲ明白ニ確定セリ。

クールベール提督ハ陸海軍ノ總指揮官ニ任セラレ多數ノ援兵ヲ得テ東京平野ノ平定ニ著手シ、六千人ヲ率ヒテ有名ナル山西進撃ヲ企テ一八八三年十二月十五日フサヲ取リ同月十七日山西ヲ取レリ、山西ニ於テ一萬以上ノ支那正規兵アリシコトハ支那人カ叛徒ト共謀セルコトヲ證ス。

其後クールベール提督ハ支那海ニ出動シ、ミヨール將軍之ニ代テ東京軍隊ノ總指揮官トナレリ、將軍ハ大增援隊ト共ニ東京ニ上陸シ一萬六千人ノ遠征隊ヲ組織スルヲ得タリ、此遠征隊ハブリエールドリスル、ネグリエール兩將軍ノ二箇旅團ヨリ成ル、一八八四年三月十二日北寧城占領セラレ、同十九日太原占領セラレ、四月十二日ニハ興化、六月一日ニハ宣光 (Euyeh-quang) 占領セラレ國內組織セラルルニ至レリ。

東京ニ於テ幾回カ挫折シタル後、支那モ亦和議ヲ講スルコトニ決定セリ、李鴻章トフルニエール將軍間ノ談判ハ遂ニ一八八四年五月十一日ノ天津協約ト爲レリ、此協約ニ依テ、支那ハ東京ヲ撤退スルコトヲ約シ、安南帝國ニ對スル宗主權ヲ放

棄セリ。

此時ニ際シ一方ニ於テバトノートルハ安南朝廷ト一八八四年六月六日ノ順化條約ヲ調印セリ、此條約ハ今日ニ於テモ尙ホ安南帝國ト佛國トノ關係ヲ規定スルモノナリ、順化府ニ於テ支那皇帝ノ印璽ハ火中ニ溶解セラレ、眞ニ支那カ安南人ニ對スル任命權ノ最後ヲ示シ、茲ニ君臣ノ關係ハ嚴然トシテ其跡ヲ斷ツニ至レリ。

或者ノ言ニ據レハ、此事北京ニ知レタル故カ他ノ者ノ言ニ據レハ、支那人元老派ノ勢力大ナリシカ爲メカ、恐ラク兩原因相合セシカ、爲メカ、支那ハ其約束ヲ履行スルコトヲ爲サス、即チ東京ヲ撤退セス亦之ニ就テ佛國政府ニ豫告スルコトスラ爲サス、之レカ最モ直接ノ結果トシテ有名ナル事件即チバクレノ要撃ヲ來タセリ、此要撃ノ眞原因ハ今日尙ホ明カニ知ラレスト雖之レカ爲メニ諒山ヲ占領セントセシジュゼンズ枝隊ハ引返ササルヲ得サルニ至レリ、此約束違反ノ爲メニ陸海軍ノ活動ハ再ヒ開始セリ。

レスペール提督ハ基隆ヲ砲撃セリ(一八八四年八月四日)、一方ニ於テクールベール提督ハ閩江ヲ遡リテ福州ヲ砲撃シ、重モナル支那兵器廠ヲ破壊シ(八月二十三日)ヨリ二十五日、次テ基隆ヲ占領シ、臺灣ヲ封鎖シ、澎湖島ヲ占領セリ(一八八五年三月)東京

ニ於テハブリエール・ド・リスル將軍ミヨ一將軍ニ代ハリネグリエ一將軍ハケツプ及ヒシユ一ノ戰鬪ニ於テ(一八八四年十月)廣西ノ正規兵ヲ阻止シ一方ニ於テジユセ一ヌ大佐ハ同年十月宣光ヲ威脅セル雲南ノ正規兵ヲ擊退セリ。

此年十二月ノ末、總指揮官ブリエール・ド・リスル將軍ハゴヅアニネリ及ヒネグリエ一ノ兩旅團ヲ率ヒテ諒山進撃ヲ企テニユイボツプ、チユイホアドンソン、フオグイ、バクグイアイノ諸戰鬪ヲ交エ一八八五年二月十三日諒山ヲ占領シ支那兵ヲドンダンノ彼方ニ擊退セリ。

支那兵ト相對シテネグリエ一旅團ヲ殘留シ、總指揮官ハ他ノ旅團ヲ率ヒテ二月十六日諒山ヲ發シ河内ヲ經テフドアンニ至リ、此ニ同月二十八日モウシヨン枝隊ト再會セリ、之レ一萬五千ノ黑旗軍ヨリ包圍セラルル宣光ノ圍ヲ解カンカ爲メナリ、ブリエール・ド・リスル將軍ハ策ヲ定メテ清河ノ谿地ヲ經テ宣光ニ向ヒ、甚タ困難ナル行軍ノ後ホアモツクニ達シ包圍軍ヲ此ニ擊破セリ(一八八五年三月二日、三日)、斯クシテ宣光ハ勇敢ナル包圍ヲ支持シタル後免脱セラルルコトヲ得タリ。

諒山ノ方面ニ於テハ支那軍ハドンダンニ向テ再ヒ攻勢ヲ取レリ、ネグリエ一將軍ハ之ヲ遂撃シテ退却セシメ、進ンテ南關ノ門ヲ越エバンボウノ戰線ヲ攻撃シテ

利アラス(三月二十三、四日)諒山ニ退却スルコトヲ要シタリ、三月二十八日キールアノ戰争行ハル、戰鬪中ネグリエ一將軍ハ負傷シテ其指揮權ヲエルバンゼ一中佐ニ讓リシカ、中佐ハ突然トシテ歸シタル責任ノ重大ナルコトニ恐慌シテ退却ヲ命令シ、名狀スヘカヲサル狼狽ヲ以テドンソン及ヒシユ一ノ方向ニ之ヲ行ヘリ、何トナレハ敵軍ハ毫モ勝利ヲ得シニアラサルカ故ニ追撃セサリシヲ以テナリ、此退却カ總指揮官ノ餘リニ驚愕セシムヘキ、餘リニ輕率ナル電報ヲ以テ報道セラレタルカ爲メ佛國ニ於テ非常ノ反響ヲ生シ、遂ニフエリ一内閣ノ顛覆ヲ來タシタルコトハ人ノ知ル所ナリ。

佛國政府ハ遠征隊ヲ増加シテ二箇師團ト爲セリ、クールシ一將軍之レカ總指揮官ト爲リ最モ廣キ軍事及ヒ民政ノ權力ヲ附與セララル。

之レヨリ間モ無ク支那ハ佛國軍艦カ嚴密ナル封鎖ヲ行フカ爲メ、南方ヨリ北方ヘ米ノ輸送カ中斷セララルヨリ生スル結果ノ重大ナルヘキコトニ恐レ、和議ヲ請ヒ一八八五年四月四日和約ヲ調印シ、一八八五年六月十七日ノ天津條約ヲ以テ之ヲ批准セリ、此條約ニ依テ支那ハ明確ニ安南及東京ニ於ケル佛國ノ保護權ヲ承認シ、佛國ハ臺灣及澎湖島ヲ之ニ還付セリ。

クルルシー將軍ノ安南ニ來ルヤ兵一千ヲ以テ順化ニ滯留セシカ此時安南軍ノ襲撃ヲ受ケタリ然レトモ容易ニ之ヲ擊破シ咸宜王ハ攝政チユイエート共ニ脱走シドンカン王代ヲ位ニ即ケリ。

東京ニ於テハジャモン、ワルネー兩將軍國內ノ政治上及軍事上ノ組織ヲ成就セリ。

一八八六年ニ於テ東京ニ最初ノ文官總督ポールベール來著セリ東京平野、山地及國境地方ノ平定ヲ完成スルカ爲メニハ尙ホ數年間多クノ小討伐ヲ爲スコトヲ要シタリ此任務ノ實際ニ全ク成功セルハ一八九七年ノ終期ノミ。

(四) 老撾ノ占領

老撾ニ關シテ暹羅ト或葛藤ヲ生シ佛國武力ノ干涉ヲ要シタル結果トシテ一八九三年十月三日一八九六年一月十五日一九〇二年及ヒ一九〇四年ニ於テ行ヒタル條約若クハ協定ニ依リ湄公右岸ニ至ルマテノ安南脊面ノ中界地ノ所有權ヲ佛國ニ與ヘタリ一九〇七年ニ於テ暹羅ハバクタンバン、シエンレアツブ及ヒシヅフオンノ諸州ヲ東甫塞ニ還付セリ。

(五) 廣州灣ノ占領及支那トノ協約

印度支那ノ附近ヲ安全ニ保ツカ爲メニ一八九七年佛國ハ支那ヨリ海南島ハ如何ナル形式ヲ以テスルモ外國ニ讓渡セララルコト無カルヘシト約束セル宣言ヲ得タリ一八九八年四月十日支那ト行ヒタル協定ハ上記ノ宣言ヲ補充シ廣州灣ヲ租借地トシテ佛國ニ與ヘ又東京國境ニ接スル廣東、廣西、雲南ノ支那南方諸州ヲ他國ニ讓渡セサルコトヲ約束セリ且此協定ハ此等ノ諸州ニ於テ商業的進入、土地開發及ヒ鐵道敷設ノ權ヲ佛國ニ與ヘタリ。

第一節 行政組織

(一) 印度支那聯合國

政治上ヨリ見テ佛領印度支那ハ五國ヲ包有ス交趾支那、安南、東京、東甫塞、老撾是レナリ外ニ一九〇〇年之ニ附屬セシメラレタル廣州灣ノ地域アリ之ヲ合シテ一八九七年ニ實現シタル印度支那聯合國ト稱スルモノヲ組織ス。

交趾支那ノミハ植民地ナリ故ニ代議士ヲ以テ代表セラル安南、東京ハ植民地高等會議ニ列スヘキ一人ノ代表者ヲ選出ス東甫塞モ亦然リ他ノ諸國ハ單ニ佛國ノ保護權下ニ置カル各國共ニ其固有ノ制度ヲ有ス然レトモ何レノ國ニ於テモ佛國

ノ行政權有效ナル方法ヲ以テ干涉ス。唯國ニ由テ其方法ヲ異ニスルノミ、故ニ保護權ハ安南ト東京ト、又ハ老撾ト東甫塞トニ於テ同一ノ方法ヲ以テ實行セラレス。

總テ此等ノ諸國ハ總督カ實行スル一定ノ政治方針ニ從フ、總督ハ印度支那聯合國ニ共通ナル一大行政機關ヲ直接掌管シ、交趾支那ニ於テハ副總督、他ノ諸國ニ於テハ總理事官、廣州灣ニ於テハ民政官ヲ以テ實行セラルル地方的利益ノ管理ニ於テ監督ス。

(二) 總督ノ權限

此高官ハ佛共和國ノ代表者ナリ、內閣會議ヲ經テ大統領命令ヲ以テ任命セラル。其有スル多數ノ職務及權限ハ一八九一年四月二十一日ノ大統領命令ニ於テ規定セラル。殊ニ總督ハ中央豫算ノ編成者ナリ、但シ此權限ハ之ヲ恒久的ニ其責任ヲ以テ財務兼會計局長ニ委任ス、即チ此局長ハ中央豫算ノ編成及ヒ實行ニ任ス、又總督ハ植民地ノ内外防禦ニ就テ責任ヲ有ス、之レカ爲メニ植民地ニ存在スル陸海軍兵力ヲ使用スヘシ、但シ如何ナル場合ニ於テモ軍隊ノ直接指揮ヲ爲スコトヲ得ス。

一九〇九年三月十八日ノ大統領命令ハ印度支那總督府ニ於ケル農商山林局及ヒ公共教育ノ本局ヲ廢止セリ、之レ地方分權ノ爲メニセル良好ナル處分ナリ、又之

ニ由テ總督ノ任務ヲ輕フシ、高等政策及ヒ方針ニ關スル問題ヲ研究スルカ爲メニ多クノ時間ヲ與フ、此ニ於テ總督ノ職任ハ最初ノ衝動ヲ與ヘ、之ヲ指導シ、之ヲ監督スルコトニ存ス、要スルニ統御スルコト是レナリ。

(三) 總理事官ノ權限

總理事官ノ職權ハ頗ル佛國ニ於ケル知事ノ職權ニ似タレトモ、之レヨリモ廣シ、其管轄スル國內ニ於テハ總督ノ代表者トシテ委任セラレタル權力ヲ有シ、秩序及ヒ政務ノ良好ナル進捗ニ就テ責任アル自治的官吏ナリ、其職權素ヨリ重大ナルカ上ニ、更ニ上ニ陳ヘタル一九〇九年三月ノ大統領命令ヲ以テ之ヲ擴張セリ、即チ爾來農業、商業及ヒ公共教育ノ指導ヲ行フ、東京總理事官ハ此上ニ河內醫學校舊印度支那醫學校ニ就テ監督權ヲ有ス。

總理事官ハ其配下ニ直接ノ共同者トシテ州長タル民政官ヲ有ス、交趾支那ノ副總督ハ毎年定期會ニ於テ交趾支那地方豫算ヲ決議スル植民地會議及ヒ官房會議ノ輔佐ヲ受ケ、老撾ヲ除ク他々總理事官ハ保護國會議ノ輔佐ヲ受ク。

(四) 印度支那高等會議

印度支那高等會議ノ組織、其職務權限ハ多クノ條文ヲ以テ規定セラル、其職任ハ

甚タ重要ニシテ眞ニ政府ノ機關ナリ。

此會議ハ左ノ義務ヲ有ス。

第一、豫算ニ就テ意見ヲ陳フルコト。

第二、印度支那ノ陸軍部及ヒ海軍部ニ經費ヲ分配スルコトニ就テ其意見ヲ呈スルコト(此經費ハ植民省豫算ノ補助金トシテ支出スルモノナリ、一九〇九年ニ於ケル此補助金ノ額ハ佛國ノ陸軍費ニ對スル分擔トシテ一三、六五〇、〇〇〇法ナリ)。譯者註サロウ總督ハ此後九千萬法公債募集ノ時、其元利償還資金ニ供スルカ爲メ毎年之ヨリ三、六五〇、〇〇〇法ヲ削減スルコトニ成功セリ。

第三、中央豫算又ハ地方豫算ノ負擔タルヘキ一般的又ハ地方的利益ノ公共事業ノ必要及割付ケニ關スル意見ヲ呈スルコト。

毎年基本會議ニ於テ總督自ラ議長ト爲リ、事情ニ精通セル議員相討議シ相會商ス。又財政ニ關シテ自由ニ發議ヲ爲シ、政務ノ良好ナル管理ニ參加ス。此高等會議ハ單ニ原案登記ノ機關タルニ止マラスシテ(今日ニ於テハ此會議ニ於テ原案ヲ改廢スルノ權利無キ故ニ斯克云フ)恰モアルゼリーニ於ケル財政委員會ノ如クニ活動シ、印度支那總督府ノ爲メニ繼續セル精神ト實行ノ繼續トヲ與フルニ力ヲ盡サン

トスルノ傾向アリ。

高等會議ノ常設委員會ハ緊急ノ場合ニ於テ高等會議ニ付議セララルヘキ事件ニ就テ其意見ヲ徵セラルヘシ。

(五) 土人行政

土人行政ハ、安南ニ於テハ古昔行ハレタルモノヲ變スルコト頗ル少ナシト雖、他ノ諸國ニ於テハ之ヲ變更セリ、安南人間ニ於テハ土人行政ノ根底ハ村社ニシテ、老弱人間ニ於テハ「ミユオン」即チ州ナリ、安南ノ州ハ州長官ノ統轄ニ屬ス、州長ハ其階級ニ應シテ「トンドック」(土人總督)「チユアンフ」(巡撫)又ハ「カンダオ」ト稱セラル、州ハ府府ハ縣我邦ノ郡ニ相當ス、縣ハ郡我村ニ相當ス、郡ハ社(我字ニ相當ス)ニ分タル、其長ヲ「カンフ」知縣、郡長、里長ト稱ス。

土人州長官ハ州ノ首府ニ於テ其補佐トシテ一人ノ「カンボ」(行政部長)、一人ノ「カンナシ」又ハ按察(裁判長)、一人ノ「ランピン」又ハ「フオランピン」(土兵指揮官)等ヲ有ス。

第三節 組織

佛國カ大ニ力ヲ盡シタルニ關ハラヌ印度支那ニ於テハ未タ之ニ必要ナルヘキ

司法組織ヲ有セス(譯者云フ、此後民法刑法訴訟法等ノ公布アリタリ)。目下制定中ノ大統領命令ハ遠カラス現行ノ制度ニ少ナカラサル變更ヲ加フヘシ。但シ現行ノ制度モ亦曾テ植民省ニ於テ甚タ能ク組織セラレタル委員會ト共ニ十分ニ研究セラレシモノナリ。

司法ノ組織及ヒ運用ハ、今日迄ハ一八九六年ノ大統領命令ヲ以テ規定セラル。但此命令ハ幾回カ改正セラレタリ。此命令ニ依レハ歐洲人ト土人間ニ生シタル爭議衝突ハ土人裁判所ニ於テ審理セラル(譯者云フ、其後ノ改正ニ於テハ單ニ土人間ノ裁判ノミヲ土人裁判所ニ於テ審理シ、歐洲人對土人ノ裁判ハ佛人裁判官ニテ審理スルコトトナレリ)。

佛人裁判所ニ屬スル民事裁判所、輕罪裁判所、治安裁判所ハ交趾支那河内順化、ブノンペン海防及ヒツौरラスニ於テ開設セラレ、土人裁判所ハ保護權下ノ諸國ニ於テ開設セラル。

控訴院一アリ、其管轄ヲ全印度支那ニ及ホス、三局ヲ有シ二局ハ柴棍ニ、一局ハ河内ニ在リ。

司法組織カ屢改正セラレタルコトハ安南人ノ爲メニ其自由財産ヲ保護シ、而シ

テ其思想ト需要トニ適合スル裁判制ヲ與フルコトノ困難ナルヲ證スルモノナリ、蓋シ此等改正ノ目的ハ現行ノ法律ヲ偏頗無ク公正ニ此植民地ニ適應セシムルコトニ存シタリ。

第四節 財政制度

一八九七年迄ハ印度支那ハ眞ニ寄物細工ノ財政状態ヲ有シ、各國分立シテ協同セサリシカ故ニ植民地ノ經濟的將來ヲ危フスルノ恐レアリタリ。

一八九八年七月三十一日ノ大統領命令ハ斯カル状態ヲ廢シ、印度支那中央財政ヲ制定シ、此植民地ノ爲メニ固有ノ財源ヲ與ヘタリ。此命令ニ於テハ印度支那共通利益ノ費用ハ中央財政ノ豫算ニ計上セラルヘク、而シテ此豫算ハ印度支那高等會議ヲ經テ總督ニ依テ決定セラレ、植民大臣ノ發議ニ基キ内閣會議ヲ經テ大統領命令ヲ以テ裁可セラルヘシ。又上記七月三十一日ノ大統領命令ハ支辨スヘキ一般利益ノ費目及ヒ之ニ對スル收入ヲ決定セリ、而シテ之レト同時ニ地方財政ノ收入及ヒ支出ヲ規定セリ。

中央財政ノ收入及支出ノ事務ハ出納局長之ヲ統一ス、地方財政ノ同一事務ハ出

納官吏之ヲ統一ス。

中央財政ハ植民地全體ノ寫影ノ如シ中央財政ノ資源及運用ヲ害スル者ハ同時ニ植民地ノ信用ヲ害シ之ニ反シテ財政ヲ涵養シ之ヲ確實ニスル者ハ植民地ノ勢力及ヒ富ヲ増加スルノ結果ヲ現ハス此ニ於テカ十年以來制定セラレタル此中央財政ヲ研究スルノ興味アリ。

一九〇二年マテ數年間ノ繁榮ハ印度支那財政ノ所期ニ幸ヒセリ然ルニ一九〇三年同四年及ヒ同五年ノ不作ハ著シク歳入ヲ減シ財政上ノ均衡ヲ危フセリ且ツ此大ナル不利ニ更ニ他ノ不利ナル二事情加ハレリ第一「ビヤストル」(印度支那通貨銀元)ノ相場低落シテ既ニ打撃ヲ受ケタル國庫ニ更ニ著シキ損失ヲ生シタルコト第二著手セラレタル公共工事ノ經費カ餘リニ樂觀ニ過キタル豫算ヲ超過シタルコト是レナリ。

但シ財政的危機ハ一時的ニ過キサリキ何トナレハ唯一九〇五年及ヒ一九〇六年ニ於テノミ生シタル歳入不足モ左シタル巨額ニアラス一九〇五年ニ於テハ五十二萬三千弗一九〇六年ニ於テハ二十九萬弗ニ止マリ而シテ一九〇七年ノ豐作ハ約三十七萬三千弗ノ歳入超過ヲ再現スルニ足リシヲ以テナリ一九〇八年ノ中央政ノ財歳入ハ(中央財政ノ名目ニテ行ハレタル同年度ノ收入全額ハ一九〇九年三月三十一日マテニ三六、八一〇、〇〇〇弗ニ上レリ毎年六月三十日ヲ以テ前年度決算ノ締切リトス)一九〇八年十二月三十一日迄ニテ三四、七四〇、七七二弗ニ上リ同年度ノ豫算ニ超過スルコト一、九三五、七七二弗ナリサレハ思フニ年度締切リ迄ニハ四百萬弗以上ノ歳入超過ト爲ルヘク之レハ印度支那豫備金庫ノ在高ヲ増加スヘキモノナリ此豫備金庫ノ在高ハ一九〇九年ノ初メニ於テ九百七十二萬二千弗ナリキ。

此ノ如ク僅ニ一年ノ豐作ハ二年間ノ不作ヨリ生シタル損失ヲ回復スルニ足リシコト之レ此植民地ノ生氣ニ富メル明證ナリ。

一八九八年以來ノ中央歳計ヲ比照スルトキハ歳入カ年々規則正シク増加セルコトヲ示ス其增加率一八九九年ヨリ一九〇三年ニ至ル五箇年間ニ於テ約百分ノ五十、一九〇四年ヨリ一九〇八年ニ至ル五箇年間ニ於テ約百分ノ十三ナリ斯ノ如ク歳入増加ノ割合ノ減少セルコトハ必スシモ或ル人ノ云ヘル如ク此國ノ納稅能力ノ限界ニ近ツケルモノナリト云フヘカラス何トナレハ此納稅能力ナルモノハ一國ノ經濟的發達ニ伴フテ伸張セララルモノナルヲ以テナリ然レトモ一時的ニ

歳出ノ増加ヲ制限シ且ツ税關及專賣局カ餘リニ多額ニ見積レル收入豫算ヲ縮少スルコトヲ必要トスヘシ。

ソハ兎モ角モ此植民地ノ財政的狀態ハ満足ニシテ寧ロ良好ナリト云フテ可ナリ中央歳計ハ一八九六年及ヒ一八九八年ニ起シタル公債ノ元利償還ノ爲メ重キ年賦ノ負擔ヲ有スルニ拘ハラズ確實ニ其義務ヲ盡シテ契約ヲ履行スルコトヲ得ヘキノミナラス雲南鐵道敷設費勘定ノ協定ヨリ生スル新負擔ヲ支辨スルノ餘力アリ此新負擔ハ一九〇八年四月十三日ノ仲裁々判ニ依リ印度支那政府ノ責任ニ歸スルモノニシテ其額五千三百萬法之レカ爲メニ此植民地ハ新タニ公債ヲ起ササルヲ得サルニ至レリ。

歳入ノ引續キタル増加ハ殆ント全部アルコール、鹽、阿片ノ專賣ヨリ生ス之レ土人生活狀態ノ改良セラルル適確ナル徵候ナリ即チ其收入増加スルカ故ニ生活ノ程度ヲ進メテヨリ多ク消費スルナリ土人ニ課スル租税ノ收入カ比年増進スルコトハ之ヲ證ス而カモ此課税タルヤ過重ニアラス何トナレハ印度支那ノ人口ヲ千六百六十萬トシ其歳計ヲ一九〇八年ノ豫算ニ依テ收支共ニ三二、八〇五、〇〇〇弗トシテ之ヲ割當ツルトキハ一人ノ負擔僅ニ二弗即チ約五法ニ過キス此負擔ハ決

シテ過重ナラス。暹羅ニ於テハ之レヨリ高ク一九〇七年ニ於テハ六弗ニ達ス唯要ハ收税ノ誅求的ナラサルコトニ在ルノミ。

地方財政ノ收入ハ直接税及ヒ其類似税ヨリ成リ之レ亦逐年増加シ累年ノ比較對照甚タ良好ナル狀態ニ在リ。

參考トシテ一九〇〇年及ヒ一九〇四年ノ中央歳計豫算ヲ對照センニ前者ハ五三、三五七、〇〇〇法、後者ハ七二、九六七、〇〇〇法ノ收入及ヒ支出ニ計算セラレタリ。一九〇六年ノ中央歳計豫算ハ三一、三一、〇〇〇弗即チ一弗ニ對スル二法三十五ノ相場ニテ七三、三四八、二〇〇法、一九〇八年ノ同豫算ハ三二、八〇五、〇〇〇弗、一弗對二法五〇ノ歳計定率ニテ八二、〇〇〇法、一九〇九年ノ同上歳計ハ三四、五三七、〇〇〇弗ニシテ一弗對二法四十ノ歳計定率ニテ八二、八八八、八〇〇法、一九〇八年及ヒ一九〇九年ノ地方歳計豫算ハ歳出歳入共ニ左ノ如ク決定セララル。

國名	一九〇八年 年度	一九〇九年 年度
東 安 東	五、八九三、〇〇〇	六、一一六、〇〇〇
甫 南 京	二、九一五、〇〇〇	三、一〇一、四六六
塞	二、五八二、〇〇〇	二、七八四、〇〇〇

老 五、〇〇〇、〇〇〇
支 一、〇一八、〇〇〇
那 五、〇〇〇、〇〇〇

五、〇〇〇、〇〇〇

八六五、五〇〇
五、一六一、七八三

第五節 土人政策

良好ナル土人政策ハ、國內ニ在ル重モナル民族ノ法律及ヒ習慣ニ植民制度ヲ適合スルコトヲ根本義トシ、土人ノ利益、宗教、遺傳若クハ迷信マテモ之ヲ尊重スルコトヲ要ス。又土人ノ有形無形ノ發達ヲ謀リ同時ニ經濟上ノ發達ト文明トヲ生シ、平和及ヒ秩序ト共ニ富、幸福、健康、衛生ヲ増進スルコトヲ要ス。

此政策ハ、組合政策ヲフ適切ナル語ニ於テ要記セラル。此定則ハ總テノ政府及議會ノ贊同ヲ得タリ、此主義ハ曾テ適用セラレテ成功セザリシ「同化政策」ニ代ハルヘキモノナリ。同化政策ハ、安南人ニ佛人的心理ヲ與フテフ不可解ノ問題ヲ解決セント欲シタルモノナリ。組合主義ノ政策ハ之ニ反シ、土人ニ固有ナル文明ノ割域ニ於テ土人ヲ發達セシムルコトニ存ス。

吾人ハ未ダ能ク土人ヲ知ラス、故ニ其必ス複雜セル心理状態ヲ洞見スルコト困難ナリ。此ニ於テ土人ハ全ク誠實ニ佛國ニ歸依セリト云フコトモ、又土人ハ全然忠

實ナラスト信スルコトモ共ニ極端ニ過クト思ハル。唯爭フヘカラサルコトハ印度支那ノ人民ハ佛人ト接觸シテ進化セリ。而シテ新聞紙ニ於テ日本人ノ戰勝ヲ知リ又泰西文明ノ疑フヘカラサル利澤ヲ知レリ。其進化稍急激ナリシカ故ニ、土人間ニ幾分ノ不平ヲ生シ、一層精確ニ云ヘハ一般ノ不安ヲ生セリ。此不安ノ事ハ高級大官ノ演說中ニモ指摘セララルニ至リタルモノニシテ、之ヲ消散スルノ必要アリ。此形勢ヲ救済スルノ一方法ハ佛國ノ勢力ニ有害ナル或思想ノ宣傳ヲ巧ニ防遏スルコトニ存ス。此等有害ノ思想ハ、若シ之ヲ放任スルトキハ年月ヲ經ル内ニ數回ノ凶作カ連續セルトキ、安南人ヲシテ佛國ニ對スル誠實心ヲ失フニ至ラシムルノ恐れアリ。素ヨリ安南人ノ誠實ハ實在ヨリハ外觀ナルノミ。又密使カ自由ニ徘徊シテ夜間民家ニ至リテ不良ノ言說ヲ宣傳シ、自由獨立ハ希望アルコトヲ說キ、又ハ佛國政府ニ對スル激烈ナル攻撃ヲ記載スル小冊子ヲ配布シ、奉天ノ勝利者ノ稱贊ヲ爲シ、黃色人種モ亦爲ス有ルコトヲ記セル文書ヲ分配スルヲ禁止スルコトヲ要ス。

組合政策ハ實際ニ土人ノ理由アル希望及ヒ要求ニ對シテ意ヲ注カシメ、佛國人ヲシテ土人ノ身體ニ對シテ一層大ナル尊重ヲ爲サシメ、國內ノ政治ニ就テ土人官憲ノ參加ヲ一層明瞭ニ承認シ、土人ノ衛生、状態ヲ改良スルモノナルヲ以テ(醫療救

濟、種痘等)之レカ適用以來上ニ記セル不安ヲ減少シ、佛國ノ聲威ノ爲メニ甚タ有害ナル不正秘密結社ノ組織ヲ困難ナラシメタリ。

好意的且ツ友愛的ナル佛國ノ寛大ナル保護ノ利澤ヲ最モ能ク感セシメ、保護國民ノ誠實ヲ我レニ確保スルニ最モ適當セル此政策ノ效果ニ依リ、政府ハ一九〇八年ニ於テ原因ハ異ナレリト雖モ、同時ニ安南及ヒ東京ニ於テ起リ、一時憂慮スヘカリシ政治的運動ヲ容易ニ鎮壓スルコトヲ得タルナリ。又此思慮アル進歩的政策ニ依テ明白ニ排佛的宣傳カ行ハレタル交趾支那ニ於テ騷擾ヲ避クルコトヲ得タリ。何トナレハ交趾支那ノ農民ハ此ノ如キ政治的運動ニ無感覺ノ態度ヲ取り、以テ財產ノ自由ナル享有ヲ得セシメ、國內農富ノ開發ヲ漸次有利ナラシムル政府ニ反抗スルノ意無キコトヲ表明セリ(此末句ハ一九〇八年印度支那高等會議ニ於テクロビユカウスキー總督演說ノ一節ナリ)。

良好ナル結果ニ富メル此政策カ公明誠實ニ適用セララルルニ於テハ、我保護民ヲシテ其利益ハ佛國ノ利益ト密接ニ結託セルモノナルコトヲ了解セシムヘキ唯一ノモノナリ。又此政策ノミ獨リ佛國人民政官ト人民トノ間ニ介在スル土人官憲ヲシテ其資格及ヒ權威ノ觀念ト共ニ義務及ヒ責任ノ觀念ヲ生セシムルモノナリ。

然レトモ斯ノ如ク政府カ人民ニ對シテ常ニ懇懇懇切ナルコトニ對シテハ、クロビユカウスキー總督カ一九〇八年十二月印度支那高等會議開會ノ演說ニ於テ陳ヘタルカ如ク、必ス之レカ連帶的觀念ヲ有スルコトヲ要ス。即チ佛國ノ政權ニ對シテ毫モ侵害ヲ許ササルコトヲ明確ニ表白スル意志及ヒ此政權ヲ尊重セシムルカ爲メニハ少シモ假借セサルコトノ確信是レナリ。

此必要ナル觀念ヲ有スルカ故ニ、一九〇八年ニ於テ我軍隊ハ東京ニ侵入シテ掠奪ヲ行ヒタル支那革命黨ニ對シテ猛烈ニ干涉シ、又一九〇九年ニ於テ黃花探ノ匪徒ニ對シテ果敢ナル行動ヲ取レリ。黃花探ハ探題ノ名ヲ以テ知ラレ元ト匪首ノ歸順セルモノニシテ其明確ナル約束ニ背キ追跡セラレタル亂民ヲ庇護シ、之レニ武器彈藥ヲ與ヘ佛國ニ反對スル陰謀ヲ企テタル者ナリ。

此必要ナル鎮壓ヲ行フニ當リ人民ハ佛軍ト共同シ、殊ニ山地及ヒ新舊軍政區地方ノ人民ハ大ニ其力ヲ盡セリ。山地軍政區ノ土民兵ハ恐怖セル匪首探題カ巢窟附近ノ安南人ヨリモ勇敢ナル我補助者ナルコトヲ示セリ。

第六節 重要都市

(一) 交趾支那

柴棍ハ交趾支那ノ首府ナリ。能ク區劃セラレタル美麗ナル都會ニシテ總督及副總督ノ官邸、教會堂、郵便電信局、劇場、市廳、裁判所等ノ如キ宏壯ナル建築物ヲ有ス。其街路ハ美シキ並木ヲ有シ、人車絶エス往來シテ甚タ快活ナリ。旅行者ハ皆動物園及市内公園ノ蔭蔭タル綠樹ヲ嘆賞シ、又附近ノ並木ノ蔽ヘル良道路ニ車馬ヲ驅ルノ愉快ヲ味フ。

柴棍ニハ約六萬ノ人口アリ其内四千人ハ歐洲人ナリ、然レトモ實際柴棍ノ附屬タルニ過キササル商工業都會シヨレンノ十八萬ノ人口ヲ之ニ加フルトキハ莫大ナル數ト爲ル。此兩都ノ間ニハ修繕行届キタル道路アリ、鐵道アリ、市内小鐵道アリ、支那人街ノ運河アリテ密接ノ連絡ヲ保ツ。

交趾支那ノ他ノ重要ナル都市ハバリヤ(人口三萬)、湄公ノ北支流ニ沿ヘルミット(人口二七、〇〇〇)、ビヤンホア(人口二萬)、サデツク(同一萬五千)、米産大集中地ノ一ナルウインロン、ハチエン等ナリ。

(二) 東甫塞

東甫塞ノ首府ハブンベン(人口四萬八千)ナリ、小岡(ブーン)ノ上ニ様式建築共ニ

嘆賞スヘキ寺院(ベン)アルヲ以テ此名アリ。

ブンベンハ東甫塞王シゾワットノ住居スル所ニシテ、更ニ總理事官ヲ置ク。此都會ハ湄公カ四派ニ分ル點ニ於テ好位地ヲ占メ、老撾及ヒ大湖及ヒ其附近州ノ出口ニシテ甚タ殷盛ナル商港ナリ、歐洲人ノ住宅區域ハ甚ダ廣カラスト雖モ土人街ノ多數ノ藁屋ト對照セラル、土人街ニハ所々白堊ノ寺院秀ツ。

上記ベント稱スル寺院ノ外ニ此都會ニハ珍奇ナル紀念物トシテ王宮アリ(殊ニ此王宮ニ於テハ建築材料ノ驕奢ナルコトニ依テ有名ナル一寺院ヲ有ス、此寺院ハ大理石ヲ敷詰メタル宮中ノ廣庭ノ中央ニ在リ、廻廊ノ大壁ヲ以テ圍繞セラレ壁面ニハ色彩畫ヲ以テル、マヤノ古事績ヲ顯ハス)。

特記スヘキ東甫塞ノ他ノ都市トシテハ左ノ如キモノアリ、カンボット、ウードン(舊都ニシテ其遺跡アリ)、農業ノ中心地ニシテ沙仁ヲ産スルバツタンバン、有名ナルアンコルノ舊跡ニ近キカ故ニ特ニ知ラレタルシエムレアツブ又アンコルノ大寺院ハ許多ノ石柱ヲ有シ、廣大ナル堂宇ノ前面ハ彫刻ヲ施サレ、意匠甚タ奇ナル高塔ニハ「ブラマ」ノ巨大ナル顔容ヲ刻ス。總テ印度技術ヨリ來レル「クメル」族技術ノ最モ完全ニ、最モ能ク保存セラレタル遺跡ナリ。此外アンコルワットノ寺院舊王都ノ古

宮殿及ヒ古寺院、アンコルトムノ舊寺院アリ、交趾支那大河郵船會社ハ漸次ニ増加スル觀光者ノ爲メニ最良ノ條件ニテ東甫塞ノ嘆賞スヘキ紀念物ヲ觀覽スルコトヲ得セシムルカ爲メ定期汽船ノ往復ヲ組織セリ。

(三) 安南

順化ハ人口五萬、安南帝國ノ首府ニシテ、ソン・ウオンジャン(順化河)ノ河岸ニ在リ。多クノ印度支那ノ都會ノ如ク順化ハ二區域ノ住民ヲ以テ組成セラル。第一ノ區域ハ官憲街ニシテ王宮、諸省、樞密院、學士會館、寺院等ヲ有シ、第二ノ區域ハ商業ニ用ヒラル、兩區共ニ河ノ左岸ニ在リ。

順化ハ美ナル土人遺物ヲ有スルコト少ナシ。之レ安南人ノ技術ハ常ニ支那技術ノ趣味ヲ有シ曾テ「クメル」技術ノ壯大ニ達シタルコト無キヲ以テナリ。列舉スルノ價値アルハ唯左ノ諸紀念物ノミ。孔子塔、安南王嘉陵、ミンマン嗣德ノ墳墓及ヒ寺院チュートリノ凱旋門、青銅ノ廻廊是レナリ。歐人街ハ全部河ノ右岸ニ建設セラレ、三百六十米突ノ壯大ナル鐵橋ヲ以テ土人街ニ連接セラル。安南ノ他ノ重モナル都市ハ左ノ如シ。第一ツーラー、其港トシテノ研究ハ上ニ之ヲ爲セリ。其附近ニ有名ナル大理石ノ洞窟アリ。第二フアイフホ、支那人ノ重要ナル商業中心地、其他宜安、清化

キノン、ナトラン等ナリ。

(四) 東京

河内ハ東京ノ人口最モ多キ首府ナリ(十五萬人)、印度支那總督府ノ所在地ニシテ總督大抵此ニ住居ス(註、夏季數月柴棍ニ行クコトアリ)。此ノ他印度支那ノ中央諸局モ此ニ在リ。

歐人街ハ土人街ノ傍ラニ埋立地ノ上ニ延長シ、多クノ場所ニ於テ土人街ト交錯ス。歐人街ニハ美麗ナル建設物アリ。路廣クシテ直ナリ。土人街モ亦全部煉瓦ヲ以テ造セラレ、特別ノ形體ヲ有ス。路狹クシテ眞ニ繁忙ナル土人ノ蟻窟ノ如シ。兩街ノ間ニ小湖アリ、兩寺ヲ有ス。此小湖ハ河内市ニ特種絶景ノ印象ヲ與フ。

海防市ハ二萬五千六百ノ人口ヲ有シ、其内千二百人ハ歐洲人、一萬八千人ハ安南人、六千五百人ハ支那人、印度人、日本人ナリ。歐人街ハ建築良好ニシテ清潔ナルモ昔時ハ沼澤地タリシモノナリ。此區域ハ商業ノ中心地ニシテ貿易ノ發達ニ伴フテ斷エス擴張セラル。其公園ニハジュール・フェリーノ銅像アリ。

南定(人口五萬)ハ米ノ大市場ニシテ、亦進士試験ノ行ハルル土人文藝ノ中心ナリ。此ハ有名ナル鑄貝ノ家具ヲ製造ス。

北寧(人口一萬)ハ其刺繡ヲ以テ有名ナリ。ダブカウ、海陽、興安、寧平、山西府、諒環、諒山等ハ商、工、農業ノ中心ニシテ漸次繁榮シツツアリ。

(五)老撾

老撾ノ行政上ノ首府ハヅイヤン・シヤース(人口一萬)ニシテ、湄公ノ大航行流域ノ沿岸ニ在リ。此都會ハ曾テヅイヤン・シヤース舊王國ノ政治及ヒ宗教上ノ中心地トシテ歴史上甚タ重要ナル職任ヲ有シタリキ。今日ニ於テモ其舊時ノ盛大ヲトスヘキ多數ノ殿堂及ヒ紀念建築物ノ遺跡ヲ有ス。多數ノ銅像ヲ有スルシザケットノ寺院、チャチオノ寺院、タトハオンノ大王廟ノ如キ是レナリ。

リユアン・プーバン(人口一萬二千)ハ寺院ノ都會ニシテ、湄公ノ溪地ニ於テ此河カナムカン河ト合流スル地點ノ甚タ景色好キ勝地ニ建設セラル。此都市ハリユアン・プーバン兩王ノ居所ニシテ盤谷及ヒ交趾支那ト關係ヲ有スル上部湄公ノ通商仲次地ナリ。此地方ノ名所トシテハ主トシテ僧侶ノ大管長カ居住スルワイマイ寺ヲ稱ス。

サヴァナケツトハ近時建設セラレタル繁榮ノ都會ナリ。此外アットプー、パツサツク等ノ都會アリ。

(六)廣州灣

廣州ハ此地域ノ首都ナレトモ近時建設セラレタルモノニシテ、全然行政的小市ニ過キス。其繁榮ハ之レヨリモ通商のナルチユカム(人口一萬二千)及ヒ之レヨリモ建設古キホイチエウ及ヒフオールバイヤールニ及ハス。

第二章 經濟地理

第一節 交通道路

交通道路ハ一國ノ經濟的發達ニ必要ナル條件ナリ。故ニ今日印度支那ヲ組織スル諸國ニ於テ政府統轄ノ責任ニ當リタル歴代ノ提督、將軍及ヒ長官ノ最初ノ著眼ハ此等ノ國カ通商ヲ容易ニシテ產物ノ販賣ヲ爲スカ爲メニ必要トスル交通道路ヲ之ニ與フルコトニ存シタリ。幸ニシテ殊ニ其初代ニ於テハ財政狀態甚タ良好ナラサリシカ故ニ彼等ノ盡力ヲ無効ナラシメタリ。

一八九六年二月ニ募集シタル八千萬法ノ第一回公債ハ安南東京ノ財政狀態ニ於テ稍整理ヲ爲シ或工事ヲ實行スルコトヲ得セシメタリ。但シ印度支那ニ於テ企畫セラレタル公共大工事ヲ實行スルコトヲ得セシメタルモノハ主トシテ一八九

八年ニ許可セラレタル二億法公債ナリ。此等大工事中ノ或モノハ公債ヲ待タスシテ當時新年度ノ歲計豫算ニ計上セラレタル經費ヲ以テ既ニ工事ニ著手セラレツツアリシナリ。即チ河内ニ於ケル紅河大鐵橋ノ架設長サ千七百米突ニシテ一九〇二年ニ竣功、河内、諒山及河内雲南鐵道ニ使用セラレ、四百米突ノ順化ノ鐵橋、柴棍ヨリ邊和ニ至ル道路ノピンロイ鐵橋、今日柴棍邊和、タンリン、カンホア鐵道ニ使用セラレ、如キ然リトス。

政府ノ盡力ハ同時ニ道路、掘割、河川及ヒ鐵道ニ對シテ行ハレタリ。余ハ此順序ニ於テ交通道路ヲ研究セントス。

(一) 道路

道路ノ築造ハ佛國植民ノ最モ斬新ナル意匠ノ一ナリ。是カ非カ知ラネトモ吾人カ最良ノ植民者ナル如クニ考察セル「アングロサクソン」人ハ全力ヲ鐵道ノ爲メニ盡ス。

印度支那ニ於テハ甚タ古ク築造セラレテ多少ノ注意ヲ以テ保存セラレタル道路存在セリ。安南人ハ其實用ヲ知レルナリ。柴棍ヲ順化、河内、諒山ニ連絡シナンカン門支那門トモ稱ス。ヲ經テ廣西ニ入ル有名ナル官道モ其一ナリ(大部分安南海岸ニ

沿フテ進ム)。此官道ハ今日尙ホ存シ所々改築修繕セラレ一般ニ能ク保存セラレ。古昔ニ於テモ今日ニ於ケルカ如ク都市、高谿地、港灣ニ通スルカ爲メニ大ナル官道ヨリ副道ヲ分派ス。此副道ハ平野ニ於テ殊ニ多シ。

一八九八年四月二十六日ノ法律ハ一八九六年ニ於テ安南及ヒ東京ノ保護國カ契約セル八千萬法借入金ノ殘額ヲ使用スルコトヲ許可シタルカ故ニ、軍政地區域ニ於テ數條ノ道路ヲ開鑿スルカ爲メニ百五十萬法ノ經費ヲ支出スルコトヲ得タリ。即チ安沛ヨリ老開ニ至ル道路、宣光ヨリ河陽ニ至ル道路、太原ヨリ高平ニ至ル道路等ニシテ、此等ハ皆以前既ニ起工セラレタルモノナリ。

工事を主トシテ實行セラレタルハ左ノ諸道路ナリ。

第一、東京(下)ノ諸道路ハ馬車ヲ通スルコトヲ得)

河内—太原—バツカン—高平道、諒山—ナシヤム道、諒山—チエンエン道、

宣光—ウイエトリ、宣光—安沛道、タケ—カオバン道、宣光—河陽道、

第二、安南、宣安ヨリ老搦トランニ州ノシエンクワンニ至ル道路ハクアラオニ至ルマテハ良好ニシテ、殆ント馬車ヲ通スヘク、夫レヨリシエンクワンニ至ルマテハ粗惡ナル小徑ナリ。河靜ヨリハトライ峠ヲ經テバクヒンブーニ至ルモノ

モ粗悪ナル小徑ナリ。カントリヨリアイラオ峠ヲ經テサヴァナケツトニ至ルモノハ車馬ヲ通スヘシ。ツーラーヌヨリ雲嶺ヲ經テ順化ニ至ルモノハ馬車ヲ通スヘシ。キノンヨリアットブーバツサツクニ至ルモノハ馬ヲ通スヘキモ、粗悪ノ小徑ナリ。フアンランヨリランビヤンニ至ルモノハ馬ヲ通スヘキ小徑ナリ。

第三、交趾支那。柴棍ヨリタリンニ至ルモノハ官道ニシテ荷車ヲ通スヘシ。東甫塞ニ至ルマテ上記柴棍―タリン街道ヲ延長セルモノモ亦荷車ヲ通スヘシ。

第四、東甫塞。ブーベンヨリカンボットニ至ル街道ハ荷車ヲ通スヘシ。

第五、老撾。リュアンフラバンヨリグイヤンシヤ―ヌヲ經テシエンクワンニ至ル道路ハ馬ヲ通スヘシ。

道路上ニ敷設セル輕便鐵道ハ地方的利益ヲ齎シ、本鐵道ノ爲メニ其附近ノ產物ヲ運搬スヘキ必要ノ補助機關ナリ。之レ宛モ合流カ本流ニ其水ヲ送ルカ如シ、此輕便鐵道ノ敷設モ亦等閑ニ付セラレサリキ。現ニ營業中ノ輕便鐵道ノ重モナルハ左ノ如シ。

バンブウ堀割沿岸ノフニンジャンヨリ海防河内鐵道線ノカムジャンニ至ル輕便鐵道ハケサットヲ中心トスル甚タ重要ナル農業地ヲ通過ス。第二ハ柴棍ヨリシ

ヨレンニ至ル輕便鐵道ナリ。

正式ノ許可ヲ得タル計畫中ノ輕便鐵道ノ中ニハ左ノモノアリ。

第一、タングエン(太原)ヨリ河内、グイェトリ老開鐵道ノタブミエウニ至ル輕便

鐵道。

第二、河内、山西ノ輕便鐵道、之ニ使用セラルヘキダイ河ノ大鐵橋ハ既ニ架設セ

ラレタリ。

(二) 河川及堀割

吾人カ上ニ研究シタル印度支那ノ兩大河湄公及ヒ紅河ハ有益ナル航行水路ナリト雖モ、不完全タルヲ免カレス。湄公ニハ航行スル能ハサル急湍アリテ、屢積移シヲ爲スコトヲ要シ、多クノ日子ヲ要スル水路ナリ。江河ハ安沛ヨリ上流ニ於テハ一年ノ或期間ハ不完全ナル状態ニテ航行スルヲ得ルノミ(小汽船ニ就テ云フ)。安沛以下ニ於テハ一年ヲ通シテ利用セラルルコトヲ得ヘシ。

湄公ノ水流ヲ改良シ、積移ヲ廢シ若クハ少ナクトモ積移シノ不便ヲ最小限ニ減スルカ爲メニ大規模ノ工事行ハレタリ。然レトモ如何ニ巨大ナル經費ヲ投スルモ單ニ湄公ヲ改良スルコトヲ得ヘケンモ、決シテ之ヲ制御シテ意ノ如クスルコト能

ハサルヘシ。即チ湄公ハ將來ト雖常ニ遲緩不定不完全ノ水路タルニ止マルヘシ。今日ニ於テモ増水季ニ柴棍ヨリグイヤンシヤースニ至ルニ尙ホ二十日ヲ要シ減水季ニ於テハ二十八日乃至三十日ヲ要ス。而シテリユアンブラバンヨリグイヤンシヤースニ下ルニ四日ヲ要シ、ウイヤンシヤースヨリ柴棍ニ下ルニ十日ヲ要ス。此ノ如ク湄公ノ旅行ハ長クシテ經費多ク且危險無キニアラス。

紅河上流航通ノ問題ハ鐵道カ河ニ沿フテ敷設セラレタル以來、重要ナラサルニ至レリ。然レトモ今日ニ於テモ支那人及ヒ土人ノ舟筏ハ依然之ヲ航通ス。

掘割ノ問題ハ甚タ重大主要ニシテ兩方面ヨリ之ヲ觀察スルコトヲ要ス。第一ハ航通ノ爲メノ掘割ニシテ、第二ハ灌溉排水ノ爲メノ掘割ナリ。

第一、航通ノ爲メノ掘割、交趾支那及ヒ東京ニ於テ此種ノ掘割ノ擴張及ヒ改良ヲ忘却セラレタルコト無シ。現存掘割ノ淺渌及ヒ新掘割ノ開鑿ハ殊ニ大河ノ支流、河川掘割ノ縱橫錯交セル交趾支那ニ於テハ商工業發達ノ必要條件ナリ。今日柴棍ヨリ輸出セラルル米及ヒ穀ノ運送ヲ殆ント全部行ハシムルモノハ掘割及ヒ河川ナリ。

年々巨額ノ經費ヲ此等各種ノ工事ニ充當セラル。而シテ工事ハ一九〇〇年印度

支那高等會議ニ於テ定メラレタル必要ノ順序ニ從フテ實行セラル。

第二、灌溉及ヒ疏水ノ掘割、一九〇八年十二月印度支那高等會議ノ開會演說ニ於

テクロビコカウスキ―總督ハ成ルヘク速ニ實行スヘキ緊要事業ノ中ニ東京及ヒ安南ニ於ケル農業水利工事ヲ算ヘタリ。

印度支那ニ於テハ水流ハ恰モ國土ノ血脈ニシテ總テノ富ノ源泉ナリ。土地ノ廣大ナル面積ヲ合理的ニ及ヒ漸進的ニ灌溉スルコトヲ要ス。之ニ反シテ他ノ地方ハ常ニ水ニ浸リテ耕作ニ適セサルモノアリ。之ヲ乾涸スルコトヲ要ス。故ニ農業水利工事ハ二箇ノ目的ヲ達スヘシ。浸水セル土地ニ於テ排水シ乾燥セル土地ニ於テ送水スルコト是レナリ。此ニ於テ水門、水堰、掘割、堤防ヲ築造スルノ必要ヲ生ス。此等ハ十分ノ研究ヲ經テ一般ノ方案ニ從テ實行スヘキモノナリ。何トナレハ單ニ一地方ニ限レル起業ハ縱令ヒ稱揚スヘキモノナリトハ云ヘ、往々ニシテ隣接セル地方ニ不幸ナル結果ヲ生スルコトアルヲ以テナリ。

我々カスカル工事ヲ實行スルトキハ之レカ恩澤ヲ被ルヘキ安南人ハ大ニ之ヲ德トスヘシ。安南人ハ驚稱スヘキ土地ノ探掘者ナリ。一例ヲ舉ケテ之ヲ示セバ安南人カ平野ヲ保護スルカ爲メ紅河ニ施シタル堤防ノ延長ハ千二百キロメートルニ

達シ之レカ爲メニ運搬シタル土塊ハ五億立方米突ニ及フヘシ。
 今日マテニ行ヒタル灌溉及ヒ排水ノ工事ヨリ得タル結果ハ、甚タ意ヲ強フスルニ足ル。

第一、東京ソynchyoン河ニ水堰ヲ設ケテ、自然的勾配ニ依テ送水スルケツブ掘割ノ開鑿ヨリ、水田六千町歩ニ灌溉スルコトヲ得タリ。以前ニ於テハ此水田ノ收穫ハ殆ント常ニ旱魃ノ爲メニ失ハレタリ。

第二、寧平州キンソン縣ノ排水及灌溉工事ハ從來甚タ惡ンキ條件ニテ一季作ヲ得ルニ過キサリシ、六千町歩ノ水田ニ二期作ヲ爲スコトヲ得セシメタリ。

第三、紅河及ヒソynchyoン間ニ灌溉及ヒ排水ノ兩目的ニテ水門ヲ築造セルカ爲メニ過剩ノ水ヲ排除シ、旱魃ノ時ニ紅河ノ水ヲ引キ七千町歩ヲ耕作スルコトヲ得セシメタリ。

第四、排水ノ掘割ハ交趾支那柴棍ノ西方ニ於テ約十萬町ヲ蔽フ「蘭草ノ平野」ト稱セラレタルモノヲ乾涸シ、健康地ト爲セリ。

此外尙ホ斯カル工事ノ實例ハ東京諸州ノ大部分ニ於テ舉示セラルルコトヲ得ヘク、之レカ爲メニ此等諸州ノ生産能力ヲ増加シ廣大ナル面積ヲ耕作ニ適セシメ

タリ。

(三) 鐵道

一八九八年十二月二十五日ノ法律ハ、佛國政府ノ擔保ノ下ニ七十五年以内ニ償還セララルヘキ二億法ノ公債ヲ起スコトヲ印度支那總督府ニ許可セリ。此金額ハ專ラ印度支那諸鐵道ノ敷設ニ充當セララルヘキ規定ナリ。

此等鐵道敷設ノ目的ハ此植民地ノ政治的統一ヲ實行シ、各種ノ方法ニテ其開發ヲ確保シ、河川運送ノ不備ヲ補ヒ、隣國ニ向フテ商業的進入ヲ爲スコトヲ得セシムルニ在リタリ。

此公債ヲ以テ築造スヘキ鐵道ハ左ノ諸線ナリキ。

鐵道名稱	線路ノ延長
第一、海防、老開線	三、八二
第二、河內、南定、宜安線	三、二七
第三、ツラリス、順化、カントリ線	一、七二
第四、柴棍、カンホア、ランビヤン線	七、六五
第五、ミト、カト線	九、三
合計	一、七三九

今日ニ於テ其全線ノ運轉ヲ爲スモノハ第一、第二、第三ノ三線ナリ。何レモ一部分
 ツ竣功シテ全部開通セルモノニシテ、第一線ハ一九〇六年二月以來、第二線ハ一
 九〇五年三月以來、第三線ハ一九〇八年三月以來運轉セラル。其敷設費第一線ハ五
 千四百萬法、第二線三千三百八十萬法、第三線ハツौरラス、順化間百五、キロメー
 ルニ付テ千七百七十萬法ナリ。豫算ノ經費ハ河内、ヅイエトリ、ハイジョン、老開、清化
 等ノ大鐵橋アリタルニ拘ハラズ、僅ニ超過セラレタルノミ。第四線ハタンリン(二三
 五、キロメートル)マテ運轉ス(譯者註、此線路ハ今日ニ於テハ柴棍、ナトラン間四一八
 キロメートル開通ス)。他ノ部分ハ敷設中ナリ。遠カラスシテ海岸ノフアンチエーニ
 達スヘシ、又フアンラン、ランビヤン線モ敷設中ニシテ、完成セハ海岸ヨリランビヤ
 ン高原ニ達スルコトヲ得ヘシ。第五線ハ未タ工事ニ著手セラレス。

之ヲ要スルニ二億法公債ヲ以テ敷設スヘキ鐵道ノ中ニテ、千、キロメートル餘ハ
 現ニ運轉セラレツツアリ。此外ニ尙ホ左ノ諸線アリ。

第一、河内、諒山、ドンダン線ノ一六〇、キロメートル。此線ハ一八九六年ヨリ一九〇〇
 年ノ間ニ河内ヨリ、フランチヨンノ間、及ヒ諒山ヨリ、ナンカン(支那門)ノ間ヲ敷設
 セラレ、フランチヨンヨリ、諒山ノ間ハ既設ノモノヲ修繕シタリ。

第二、柴棍ミト線(七〇、キロメートル)。久シキ以前ヨリ運轉セララル。

第三、ツौरラス氣象臺島ヨリ、フアイフ(三五、キロメートル)ニ至ル線。

此等ヲ合スレハ總計一、三〇〇、キロメートルト爲ル。線路ハ總テ一米突幅ナリ。
 上記ノ諸鐵道ハ此植民地ノ最モ能ク人ニ知ラレ、最モ價值アリト認メラレタル
 富源ノ開發ヲ爲スヲ以テ目的ト爲ス。而シテ尙ホ後ニ研究スヘキ印度支那ノ經費
 ヲ以テ敷設セル老開、雲南府線及ヒ之ヲ延長スヘキ線ハ主トシテ支那ノ廣大ナル
 市場ニ進入スルヲ目的トセルモノニシテ、第一ニ東京ノ經濟的發展ニ關係ス。

此鐵道ノ敷設ハ二ノ目的ニ應セルモノナリ。第一ハ政治上ノ目的ニシテ、雲南ニ
 我勢力ヲ擴張スルニ在リ、第二ハ經濟上ノ目的ニシテ、緬甸ヨリ入ラレトスル英國
 人ニ先ンシテ雲南及ヒ四川ニ達シ、其物資ヲ支那海岸ノ何レノ港ヨリモ近接セル
 海防港ニ排出セシメ、東京ヲ以テ此等支那福州ノ大ナル通過貿易市場ト爲サント
 スルニ在リ。

一八九八年老開ノ鐵道ヲ雲南省ノ首府ニ延長スル敷設權ニ關シテ、佛國ト支那
 トノ間ニ結ヒタル協定ハ、此政治上及ヒ經濟上ノ觀念ヨリ來レリ。而シテ此協定ニ
 依リ敷設スヘキ鐵道ノ經營ニ關シテハ上記一八九八年十二月二十五日ノ法律第

三條ニ説明アリ之ニ由レハ支那領土内ニ敷設スヘキ部分ハ一ノ特許會社ニ委任スルコトヲ得ヘク此會社ニ對シテハ印度支那政府カ利子ノ保證ヲ爲スコトヲ得ヘシ。

此敷設費ハ一八九八年ニ於テハ七千萬法ト見積ラレシカ一九〇一年ニ於テハ九千五百萬法ニ増加セラレタリ然ルニ其實費ハ一九〇七年ニ於テ一億五千七百萬法ニ達シ尙ホ一億六千五百萬法マテ達スヘシト豫期セララル。此額ハ特許會社ト政府トノ間ニ生シタル爭議ノ結果指定セラレタル仲裁者ノ決定セルモノニシテ、經費ハ之レ以上ニ増加セサルヘシ。一九〇九年三月ノ法律ハ老開ヨリミラチ阿迷州宜良ヲ經テ雲南府ニ達スル鐵道完成ノ爲メ一九〇八年四月十三日ノ仲裁々判ニ依テ此植民地ノ負擔ニ歸セル追加費用ヲ支辨スルカ爲メニ五千三百萬法ノ借入金ヲ爲スノ權ヲ印度支那政府ニ許與セリ。

夫ハ兎モ角モ老開ミラチ、蒙白(ビチユチャイ)ノ區域ハ一九〇九年三月三日ヨリ普通ノ輸送ヲ開始セラレタリ其前方ニ於テモ地行工事ハ既ニ殆ント終リタレハ一九一〇年ノ末ニハ雲南府(四七〇)キロメートルニ達スヘシト豫期セラル譯者註此鐵道カ一九一一年ヨリ全部開通セルコトハ前ニ述ヘタルカ如シ其工費ハ甚

タ大ニシテ「キロメートル」平均三十五萬法ニ當ルヘシ。

此鐵道全部開通スルトキハ雲南東京間ノ通商取引ヲ大ニ増加スヘシ既ニ蒙白支那稅關ノ統計ニ依レハ此運動ハ十年間ニ三倍シ、一八九七年ニ千四百萬法ナリシモノカ一九〇六年ニ於テハ四千五百萬法ニ上レリ。

(四) 計畫中ノ鐵道

印度支那ノ政治的結合ヲ確實ニシ、東甫塞老撾ヲ開發シ暹羅雲南兩廣地方へ經濟的進入ヲ爲シ又安南ノ各地方ヲ連絡セシムルカ爲メニ計畫スヘキ鐵道甚タ多シ。上ニ研究シタルモノハ唯其一部分ニ當ルニ過キス。兵路上ノ見地ヨリスレハ河内ヨリ柴棍ニ至ル印度支那縱貫線ヲ敷設シ之ヲ一方ニ於テ老開經由雲南府ニ延長シ又諒山經由龍州ニ及ホシ他ノ一方ニ於テブノンベン、パツタンバンヲ經由シテ盤谷ニ通セシムルトキハ甚タ著ルシクキ便益ヲ生スヘシ。

然レトモ鐵道ハ之ヲ敷設スルノミニテハ不可ナリ其通過スル地方其他此鐵道ヲ以テ產物ノ輸出道路トスル地方ヨリ十分ナル輸送品ヲ得テ之レカ經營ニ必要ナル收入ヲ與フルコトヲ要ス且植民地ノ財政ハ如何ニ好況ナリトモ絶ニス公債ヲ募集セサルヲ以テ安全ナリトスヘシ而シテ其事業ヲシテ其資力ニ適應セシメ、

現ニ著手中ノモノヲ先ツ完成シ、既成鐵道ノ營業成績ニ注意スルヲ以テ思慮アリトス。今後實行スヘキ鐵道ニ就テハ能ク其線路ヲ研究シ、其見積リノ如キモ餘リニ經費ヲ樂觀的ニ計上シテ他日ノ誤算ヲ來タササルカ爲メニ誠實ニ之ヲ行フコトヲ要ス。此等工事ノ或ルモノハ必要ナレトモ之ヲ他日ニ讓ルコトヲ得ヘク、又或他ノモノハ甚タ有望ナレトモ其實行ヲ更ニ遠キ他日ニ讓ルコトヲ得ヘシ。

計畫中ノ鐵道工事トシテハ左ノモノヲ指定スルコトヲ得。

第一、印度支那縱貫鐵道（單ニ河内ヨリ柴棍マテニテ長サ約千七百米突、此線路ノ中ニテ最モ生産ニ富メル地方ニ當レル部分及ヒ政治上重要ナル部分ハ既ニ敷設セラレ、又ハ工事中ナリ、吾人ハ既ニ之ヲ研究シタリ、今後敷設スヘキ部分及ヒ本線ノ延長ヲ其重要ノ順序ニ依テ列記スレハ、第一カントリ宜安間、第二バツタンバン柴棍線、今日ニ於テハ乾燥季ニハ一九〇七年暹羅ヨリ東甫塞ニ還付セラレタル諸州ハ交通ノ方法無ク孤立ノ状態ニ存スレハ、鐵道ヲ敷設シテ之ヲ連絡セシコト甚タ有利ナルヘシ）第三カンホア、フアイフ線、第四ドンダン龍州線。

此最後ノドンダン龍州線ノ區域ハ一八九七年以來支那政府カ、フイヴ、リー、ユ會社ニ特許シタルモノナリト雖、次第ニ除去スルコト困難ナル故障ヲ生シ今日ニ至

ルマテ其實行ヲ延引セシメタルモノナリ。

又印度支那縱貫鐵道ヲシテサヴァナケツトニ至ルマテ、湄公ノ谿地ヲ進マシメ、夫レヨリ宜安ニ到ルノ線路ヲ取ルヲ以テ有利ナリトセシヤトノ問題ヲ生セリ。此線路ヲ取ルトキハ工事一層容易ナルヘク經費亦現在計畫ノモノヨリモ少ナカルヘク、且一朝外國ノ攻撃ヲ受クルトキ海岸線ヨリモ一層安全ナルベシ。之レ明白ナルカ、如シト雖、少ナクモ此方案ノ缺點ハ現ニ實行中ニシテ、今更ラ之ヲ棄ツルコト能ハサル方案ト重複スルコトニ存ス。尙ホ後ニバルテルミール中尉ノ方案ヲ論スル時ニ更ニ此問題ヲ研究スヘシ。

第二、湄公ハ水路ハ其河流ニ多クノ障害アルカ故ニ上部老撾ノ爲メニ便益ヲ與フルコト甚タ少ナク、此地方ノ產物ハ暹羅ノ方面ニ出ツルヲ以テ一層容易ナリトシ、安南ノ海岸ニ出ツルヲ以テ距離一層短シトス。此ニ於テ既ニ鐵道ノ便宜アル安南海岸ノ諸港ヨリ出テテ湄公河ノ諸地點ニ達スヘキ橫斷鐵道ノ必要ヲ生ス。

此ニ直ニ云フコトヲ要スルハ、老撾ハ礦物森林ニ富メル國ナルカ如シト雖、人口少ナク道路無ク、殆ント荒蕪地ノ如クナレハ之レカ開發ニハ巨額ノ資本ヲ要スヘク、之レカ爲メニ得ル結果ハ割合ニ少ナカルヘシ。一方ニ於テ巨額ノ資本ハ之レヨ

リ近接シ易クシテ、同シク有望ナル他ノ諸國ノ爲メニ一層必要ナレハ、老撾ハ其順番ノ來ルヲ待ツコトヲ要ス。亦之ヲ待ツコトヲ得ヘシ。

海岸ヨリ湄公ニ達スルカ爲メニ最モ稱道セララルル線路ハ左ノ如シ。

1. カントリヨリアイラオ峠ヲ經テサヴァナケツトニ至ル線。
2. 宜安ヨリムージア峠ヲ經テミュオン、ラコース又ハバクヒンブーンニ至ル線。
3. 宜安ヨリトランニン高原ヲ經テリユアンブラバン及ヒヅイヤンシヤースニ至ル線。

4. キノンヨリコンツームヲ經テアツトブーニ至ル線。
5. コンボンチャンヨリチャムビー、ムーンベンヲ經テムークダハンニ至ル線。

此線ハ柴棍ニ向テ老撾ノ產物ヲ引キ付クヘシト爲シ、バルラルミー中尉カ大ニ稱揚シ、佛領亞細亞協會ニ於ケル講演ニ於テ盛ニ主張シタルモノナリ。此鐵道ハ湄公河カ約六百「キロメートル」ノ間一年ヲ通シテ航通セラルヘキ大可航流域ノ始マレル地點ニ於テ此大河ト再會ス(ケンマラツト急湍ノ上流ニ於テ)而シテ其敷設ハ湄公ノ西方殆ント平坦ナル地方ニ於テ經濟的ニ

行ハルルコトヲ得ヘシ。之ニ依テ湄公上流可航域ノ產物ノ外ニナムムーン及ヒナムシー兩谿地ノ物產ヲ柴棍ニ向テ集中セシムヘク、又一支線ヲ敷設スレハ前年暹羅ヨリ東甫塞ニ還付シタル諸州ニ通スルコトヲ得ヘシ。加之此鐵道ハ湄公ノ谿地ヲ經テ印度支那縱貫鐵道ノ一部ヲ組成スヘシ。

此考案ハ人ヲ魅スルニ足ルト雖、其實行ハ恐ラク總テ期待セラレタル結果ヲ與フルコトヲ得サルヘシ。佛國暹羅間ノ一九〇四年ノ條約第七條及ヒ第八條ハ佛國ニ此鐵道ヲ敷設スルノ權ヲ與フ。但シ暹羅ト協定ヲ經ルコトヲ要ス。サレハ暹羅ハ柴棍ノ利益ト爲ルヘキ此鐵道敷設ヲ承諾スヘシトスルモ相互主義ノ名義ニ於テ盤谷、コラツト鐵道ヲウーボン及ヒビムーンニ延長スルノ許可ヲ我ニ請求スヘシ。此鐵道ハ英國ノ資本家カ迅速ニ敷設スルコトヲ得セシムヘシ、サスレハ彼我兩鐵道ノ收益セントスル地方ハ柴棍ヨリモ盤谷ニ近接(柴棍ニ八一、八〇〇「キロメートル」ニシテ盤谷ニハ千「キロメートル」スルカ故ニ、其結果トシテ盤谷ヨリ多クノ利益ヲ占ムルコト明白ナリ。且ツ物產盤谷ニ行クトキハコンボンチャンノ積換ヲ免カレ。殊ニ東甫塞ノ税關手續ノ煩ヲ受ケス。

サヴァナケツト、カントリ線ハ之レヨリモ實行困難ナリト雖、バルラルミー案ニ

優レリト思ハル。何トナレハ距離之レヨリモ短カク、確實ニ上部老撾ノ物産ヲ輸送スヘク且ツ全線印度支那ノ領土内ニ敷設セラレ、其終點地ニハツラノスノ良港アルヲ以テナリ。

第三、支那ハ廣東、廣西、諸州ニ於ケル進入ハ、廣州灣租借地ノ方面ヨリモ之ヲ行フコトヲ得ヘク、之レヨリ二線ヲ起スノ案アリ。

1. ミユイロツク及ヒカオ州ヲ經テ、西江ノ梧州ニ至ルモノ。
2. チエカム、スイカイ、ユウリン州ヲ經テクエイエン及ヒ南寧ニ向フモノニシテ、南寧ニ於テ諒山、龍州、南寧線ニ會合スヘシ。

第一節 農業

(一) 概要

眞ニ耕作サレタル地方ト稱スヘキ東京及ヒ交趾支那平野、東甯塞大湖ノ附近及ヒ安南海岸ノ分割サレタル數區域ニ於テハ、土地甚タ小分セラレ耕作能ク行ハル。然レトモ其方法及ヒ農具ハ原始的ノモノナリ。斯ノ如クシテ印度支那ハ小農ノ國ナリ(譯者云フ、大地主多ケレトモ小作制ニ依リ小區域ニ分テ耕作スルノミ)。

土人ハ甚タ土地ニ執著シ精細ニ之ヲ耕作シ、之ヲ賣ルコト甚タ稀レナリ。然レトモ土人ハ自カラ稍固陋ニシテ常ニ同種ノ農産ヲ耕作シ、孔子ノ教ヲ守テ祖先ノ業ヲ繼クノ外爲ス所無シ。

(二) 農業進歩ノ實行

國內ノ農業ヲ革新スル者ハ智力教育アリ、勤勉ニシテ多少ノ資本ヲ有スル佛人移住者ナリ。此佛人ハ其拂下ケ地ニ於テ土人勞働者ヲ使役シ、一層有益ニシテ收入多キ新規ノ耕作ヲ爲シ、又ハ舊耕作ヲ改良ス。土人ハ利益アル改良ヲ了解シタル後ハ決シテ之ニ反對スル者ニアラサルヲ以テ、將來結果ヲ見テ佛人ノ爲ス所ニ倣フヘシ。

即チ移住佛人ハ第一ニ實驗者トナリ、次ニ普及者ト爲ルノ職任ヲ有ス。政府ハ植民地ニ於テ最モ有益ナル農民ノ間ニ佛國ノ思想ヲ傳播スルカ爲メニ之ヲ利用スルコトヲ要シ、十分ニ移住佛人カ此眞ノ社會的職任ヲ遂行スルコトヲ獎勵スヘキナリ。

移住佛人ニ拂下ケタル土地ハ一九〇九年ノ初ニ於テ約四十五萬町歩ニ達ス。農業ノ進歩ハ尙ホ耕地ヲ増加スルコトニ由テ行ハルヘシ。新タニ耕作スヘキ土地

ハ平野ニモ存ス。一般ニ小シク高く、又ハ少シク低キ土地ニシテ、之ニ合理的漸進的ニ灌溉疏水ノ工事ヲ施セハ直ニ之ヲ開發スルコトヲ得ヘシ。余ハ曩ニ公共工事ノ章ニ於テ之ニ關シテ既ニ行ハレタル所及ヒ計畫セララル所ヲ陳ヘタリ。

未墾ノ土地ハ人口稀薄ナル山地方面ニ於テモ尙ホ頗ル多ク存在ス。安南人ハ山地ノ氣候ヲ恐ル。且ツ安南人ハ其出生ノ地成長セル地ニ戀著シ已ムヲ得サルニアラレハ山地ニ行カス。斯ク祖先墳墓ノ地ニ固著スルハ宗教的感情的ノ羈絆ヲ脫スルヲ得サルカ爲メニシテ、此人種ニ固有ナル缺點ナリ。

幸ヒニシテ兵役ノ義務ニ服スル結果トシテ此大ナル弊害ハ漸次ニ減少シ、將ニ消失セントスルノ傾向アリ。山地ノ屯營ニ服務シタル土人兵ハ滿期後其家族ト共ニ此ニ歸來スルコトアリ。又ハ此ニタイ又ハヌン若クハ東甫塞ノ婦人ト結婚シテ新地域ニ定住ス。一方ニ於テ物價ノ騰貴生活程度ノ向上及ヒ交通ノ漸次ニ容易トナレルコトハ安南人ヲシテ水中ニ油ヲ點スルカ如ク、次第ニ平野ヲ圍繞スル諸州ニ蔓延セシメ之ヲ開發シテ荆棘地ヲ退却セシム。

農業ノ進步ハ又多クノ場所ニ於テ肥料ヲ適當ニ施シテ土地ヲ改良シ、循環耕作ヲ爲シテ收入ヲ増加シ、且ツ農具ヲ完全ニスルコトニ依テ行ハル。土人ハ此國ニ適

當スル農業器械ニシテ其勞力ヲ減シテ、ヨリ廣キ地面ヲ耕作セシメ收穫ヲ増加スルヲ得セシムルモノハ喜ンテ之ヲ使用スヘシ。

或人ハ安南人ヨリモ強クシテ耐忍力ニ富ミ、且ツ勤勉ナル支那及ヒ爪哇ノ農業勞働者ヲ招致シテ移住佛人ノ土地拂下者ニ缺乏スル勞力ヲ供給シ、又上部東京上東甫塞及ヒ老撾ノ未墾地ヲ開發スルノ案ヲ立テタリ。然レトモ余ノ知ル所ニ於テハ今日迄未タ之ニ就テ誠實ナル實驗ヲ爲シタル者無シ。余ハ斯ク或ル亞細亞ノ外國人ノ覺束無キ輸入ヲ爲スヨリハ、土人ノ勞働ニ關スル法律ヲ改良スルヲ以テ農業植民事業ノ進步ノ爲メニ一層ノ利益アリト信ス。

(三) 植民

歐洲人及ヒ土人ノ植民事業ハ印度支那ノ諸國ニ在ル農商山林課ノ管轄ニ屬ス。此課ノ目的ハ現存ノ耕作ヲ擴張シ新種類ノ耕作ヲ此土地ニ適合セシメ、耕作ノ方法ヲ變更改良シ其收得ヲ増加スルニ在リ。此目的ノ爲メニ諸國ノ農務課長ハ補助官衙及ヒ研究所ヲ有ス。其重モナルモノハ獸醫及ヒ獸疫課、分析課(柴棍、河内ニ各一箇所)、農事試驗所、氣象課、山林課、地質課、標本陳列場ノ如シ。

農商課監督官ノ名義ヲ有スル一官吏、總督ニ直隸シ印度支那全體ニ於ケル農業

及ヒ植民ノ發達ニ關スル總テノ問題ヲ研究スル權限ヲ有ス。

此他農業ノ特種ノ利益ハ農會ニ依テ保護セラルル農會ハ其代表者ヲ植民地及ヒ保護國ノ地方會議ニ出席セシメ其會頭ハ法律上印度支那高等會議々員タリ。

第三節 農產統計

(一) 食料品ノ耕作

(イ) 米ノ耕作ハ最モ廣ク行ハル之レ土人食物ノ基礎ニシテ印度支那產物ノ王ナリ此植民地ノ經濟的生命ハ之ニ存ス支那人モ亦大ニ米ヲ消費シ米ハ支那ニ向ケ確實ニ輸出セラル。

米作ハ印度支那殊ニ交趾支那ニ於テ著大ナル發達ヲ爲シ交趾支那ニ於テ現ニ耕作セラルル面積百六十萬町歩而カモ湄公及ヒドンナイ平野ノ半ヲ超ユルコト僅カナルニ過キス東京ノ米田ハ約九十萬町歩ナリ此耕作ハ交趾支那東埔寨老撾ニ於テ尙ホ大ニ擴張セラルルヲ得ヘク東京安南ハ之ニ次ク唯單ニ米作ノミヲ爲ストキハ大ナル不便アルヲ免レス即チ凶年ニ於テ饑饉ヲ恐ルヘク爲メニ反亂ヲ生スルコトアリ故ニ米ノ補助タルヘキ他ノ食料品ヲ耕作シ又高價植物ノ耕作ヲ

スコトハ總テノ方法ヲ以テ獎勵スヘキコトナリ。

米ノ輸出ハ莫大ニシテ殆ント印度支那輸出總額ノ三分ノ二ニ當ル平均八十萬噸乃至百萬噸ニシテ之ヲ超過シタル歲モアリ即チ一九〇七年ニ於テハ非常ナル豐作ノ後交趾支那ノミニテ米百二十五萬噸此價格一億五千萬法以上ノモノヲ輸出スルコトヲ得タリ一九〇八年ニ於テハ九八一、四〇〇噸ヲ輸出シタリ此數量ハ緬甸ニ次テ交趾支那ヲ全世界ノ第二ノ米輸出國タラシムルモノナリ。

東京モ亦海防港ヨリ一九〇七年ニ於テ十七萬一千噸一九〇八年ニ於テ二十五萬四千噸ヲ輸出スルコトヲ得タリ。

(ロ) 玉蜀黍 此植物ハ到ル處ニ少量ツツ耕作セラルルニ過キサリシカ東京ニ於テ漸次ニ大ナル發達ヲ爲シ佛國カ外國產ノ玉蜀黍ニ對シテ保護稅ヲ課スルカ爲メニ本國ニ向ケ輸出品トナレルコトハ特記スヘキ事ナリ之レカ爲メ海防港ヨリ一九〇四年ニ於テ五〇〇噸一九〇五年ニ於テ一、八〇〇噸一九〇七年ニ於テ二九、〇〇〇噸一九〇八年ニ於テ五七、〇〇〇噸ヲ輸出シタリ。

(ハ) 他ノ耕作物 粟黍甘薯甘蔗等ハ村落ニ於テ民家ノ周圍ニ耕作セラルト雖モ其額大ナラス唯地方消費ノ產物タルノミ。

上部東京ニ於テハ此外或地方ニハ蕎麥ノ畑アリ。又都會及ヒ屯營ノ周邊ニ於テハ蔬菜ノ耕作大ニ發達シ、殊ニ東京ニ於テ然リ。此國ニ於テハ十一月ヨリ四月ノ間歐洲種野菜ノ大部分能ク生長ス。一九〇〇年諒山州ニ於テ馬鈴薯ノ耕作ヲ試ミタル者アリシカ成績良好ナリキ。

(二) 高價植物ノ耕作

(イ) 胡椒。交趾支那及ヒ東甫塞ノ一部ハ馬來半島、印度、爪哇ニ次ク胡椒ノ大產出地ナリ。佛本國ニ於テ或植民地產物ノ關稅ヲ半減セルカ爲メニ、此耕作長足ノ進歩ヲ爲セリ。重モナル生産中心地ハ交趾支那ノハチエント東甫塞ノカンボットニシテ、胡椒五千三百噸ヲ柴根ヨリ輸出シタルコトアリ。此量ハ佛國ニ於ケル消費量ヨリモ多シ。斯ク過量ニ輸出スルトキハ本國ニ於テ殘荷ヲ生シ、更ニ之ヲ時トシテハ甚タ不利ナル條件ニテ他國ニ賣捌カサルヲ得サルノ不便ヲ生スヘシ。故ニ大統領命令ヲ以テ半額ノ輸入稅ヲ以テ佛國ニ輸入セラルルコトヲ得ヘキ胡椒ノ數量ヲ年決定シテ公布スルコトトナセリ。

(ロ) 茶。茶ハ土人日常ノ飲料ヲ作ルニ用ヒラル。其消費ハ莫大ナリ。安南(カンナム州)ニ於テハ盛ニ耕作セラレ、東京(重モニリユクナム地方)ニ於テハ之レヨリモ少シク

耕作セラル。著實ナル歐洲人移住者ノ中ニテ土人小作人ノ補助ヲ借テ此耕作ニ從事シ、漸次良好ノ製品ヲ得ル者アリ。印度支那ハ佛國ノ植民地ノ中ニテ茶ヲ産スル唯一ノモノナリ。故ニ此耕作ハ獎勵セラルヘキモノナリ。印度支那茶ハ其品質良好ニシテ香氣佳ナリ。佛國ニ於テモ漸次ニ其價值ヲ認メラレントス。將來此國ニ於テ支那茶、セーロン茶、爪哇茶ニ代ハルヘキモノナリ。殊ニセーロン茶、爪哇茶ノ如キハ品質之ニ優ラサルカ故ニ、之ニ代ハルコトヲ得ヘシ。

(ハ) 珈琲。珈琲ノ耕作ハ歐洲人カ印度支那ニ輸入シタルモノナリ。此耕作ハ迅速ニ擴張セラレス。何トナレハ多クノ資本、勞力ヲ要シ、且ツ少ナカラサル齟齬ヲ生スルヲ以テナリ。然レトモ殊ニ東京ニ於テ頗ル優良ナル珈琲園アリ。此國ニ於テハ其產出稍規則正シク増進ス。印度支那珈琲ノ品質佳ナレトモ未タ能ク知ラレス。一九〇六年馬耳塞ノ植民地博覽會ハ本品ニ對シ或佛國商人ノ注意ヲ惹クニ與テ力アリシカ如シ。然レトモ上ニ記セル理由ニ依リ其輸出ハ決シテ莫大ナルニハ至ラサルヘシ。

(ニ) 茴香樹。之レハ諒山地方及ヒ支那國境地方ニ特有ノ樹ナリ。此樹ヨリ星形(アニス)ヲ生シ支那人ハ之ヲ蒸溜シテ茴香ノ精油ヲ取ル。此精油ハ「アブサント」「アニゼツ

トノ如キ或酒類ノ製造及ヒ香料製造ニ用ヒラル。收護良好ナル年ハ其輸出五噸價格約百萬法ニ達ス。

(三) 工業用植物ノ耕作

(イ) 煙草。此耕作ハ稍擴張セラレ東京ニ於テハ大規模ニ行ハル。此ニハ佛國人ノ會社アリテ一大拂下ケ地ニ耕作シテ品質ヲ改良シタル後次第ニ歐洲人及ヒ土人ヨリ賞味セララルル葉卷煙草土人煙草ヲ製出ス。

(ロ) 棉花。棉樹ハ全植民地ニ於テ野生狀態ニテ生長ス。其耕作ハ原始的ニシテ疎慢ナレトモ將來多量ノ原料ヲ需要スヘキ東京ニ於ケル海防河内南定ノ紡績所及ヒ東甫塞ノ諸紡績所カ盛ニ經營セララルルニ至ラハ必ス廣ク行ハラルルニ至ルヘシ。今日ニ於テ此耕作ハ殊ニ湄公兩岸ニ於テ大河ノ洪水カ年々浸汎スル地方及ヒ安南ノ清化ニ發達ス。棉花ノ品質ハ惡シカラスト雖、選種シテ大ニ改良スルコトヲ得ヘシ。

(ハ) 粗麻。此纖維植物ハ交趾支那、安南、東京ニ於テ耕作セララル。東京ニ於テハ甚タ良質ノモノヲ得、少量ノ輸出行ハレ主トシテ米袋及ヒ綱ノ製作ニ用ヒラル。

(ニ) 黃麻。即チ支那ノ苧麻ハ安南及ヒ東京ニ於テ耕作セララル。能ク之ヲ織ルトキハ

細密ニシテ價值アル麻布ヲ得ヘシ。

(ホ) 樹綿(「カボック」)之レハ「フロマゼー」ノ種類ニ屬スル樹ヨリ生スル纖維物ナリ。專ラ東甫塞及ヒ交趾支那ニ産シ(譯者云フ、東京ニモ産ス)既ニ相當ノ輸出行ハレ漸

次歐洲ニ於テ使用セララル。

(四) 其他ノ雜種產物

(イ) 護謨。護謨ハ葛護謨及ヒ「フィキユス」種ノ護謨樹ヨリ製出セララル(譯者云フ、今日ニテハ交趾支那ニ於テ「プレジリアン」種ノ本護謨ヲ産出ス)之レハ東京、安南山脈及ヒ上部老揭森林ニ生ス。其輸出額一年四百五十噸ト五百噸ノ間ニ在リ。

(ロ) ラック。「スチックラック」又ハ「ゴムラック」(塗料)モ亦同一ノ地方ニ生シ年々五百噸乃至六百噸ヲ輸出セララル。

(ハ) 其他。稍發達セル國內及ヒ國外商業ノ目的物タル他ノ生産品ノ中ニテ左ノモノヲ舉示スルヲ要ス。

植物性油(落花生、ココ、比麻、アブラザン、山桐ノ油)、ベンジヨアン、沙仁及ヒ「キユルキユマ」此最後ノ二物品ハ「カリ」粉ノ調製ニ混和セララルル藥味の產物ナリ。桂皮ハ一九〇四年ニ於テ二百八十噸マテ輸出セラレシカ、肉桂樹滅失セルカ爲メ漸次減少

ス。安南及ヒ交趾支那ノ「コブラ」(コロン核)ハ稍多量ニ佛國ニ輸出セラレ植物性脂肪及ヒ酪(バター)ノ製造ニ用ヒラル。其他「ココーズ」及ヒ之ニ類似ノ數產物アリ。

(五) 森林

此植民地ノ森林富源ハ莫大ナリ。單ニ東京ノミニ就テ見ルモ其全面千百萬町歩ノ中ニテ五百五十萬町歩ハ森林ナリ。之ニ老撾、安南山脈、東甫塞及ヒ交趾支那ノ或州ノ廣大ナル森林ヲ加算スルトキハ五千萬町乃至六千萬町歩ニ達スヘシ。然レトモ未タ十分ナル交通道路無キカ故ニ森林ノ正式開發ニ就テ見ルヘキモノナシ。唯記スヘキハ老撾ノ「チーク」材伐採ト全印度支那ニ於ケル竹林ノ伐採ナリ。チーク材ハ湄公ヲ筏ニ組マレテ下リ、竹ハ米ニ次テ印度支那ニ於ケル最モ重要ナル植物ナリ。

印度支那ノ森林中ニハ熱帶國ノ總テノ樹種アリ。且ツ高地ニ於テハ歐洲ノ或樹種アリ(檜、栗、胡桃、松、杉等ノ如シ)。總テノ木材ハ船、建築材、高價ナル家具、置物ヲ作ルニ適ス。良好ナル森林制度ヲ適用セハ或山地ノ民族カ不知不識ノ間ニ貴重ナル富源ヲ破壞スルコトヲ防遏スルコトヲ得ヘシ。

(六) 牧畜

安南山脈及ヒ上部東京ノ高原、湄公谿地ノ或地方、東甫塞ノ一部及ヒ安南ノ數州ハ水牛、黃牛及ヒ馬ノ牧畜ニ適ス。之ヲ適當ニ利用セハ此動物ノ富ヲ著ルシク増加スルコトヲ得ヘシ。之ニ就テハ亦種類ノ改良、雜種交尾及飼料ノ改良ヲ要ス。

羊ハ乾燥セル牧場ヲ要シ、雲南及ヒ東京、バオラツクノ北方ドンカンニ成育ス。豚ハ總テノ氣候ニ適合シ、廣ク全植民地ニ飼養セララル。土人ハ其肉ヲ愛好ス。

第四節 商業

曩ニ土人政策ニ關スル觀察ニ於テ陳ヘタルカ如ク、土人ノ富ヲ増加スルコトハ誠實ト實利トヲ兼ネタル良植民政策ノ目的ナリ。

開發植民地タル此印度支那ニ於テ此富ヲ増加スルカ爲メニハ土人ノ生産力ヲ増加セシムルコトヲ要ス。即チ農業、工業、鑛山業ノ生産力ヲ増加スルヲ要スヘク、一般ノ商業即チ内國商業、外國貿易、通過貿易、沿岸貿易ノ如キ之レカ伴隨タルニ過キス。人民ハ多ク生産シテ初メテ多ク買フ、而シテ其購買力及ヒ消費力ノ増加ニ由テ此ニ商業ヲ發達セシム。

第五節 内國商業

内國商業ハ印度支那ノ諸國間ニ行ハルル貿易ノ全體ヲ包括スルモノニシテ、河川、掘割、道路、鐵道及ヒ沿岸貿易ニ依テ行ハル。

此商業ハ甚タ重要ナリト雖モ、毫モ之ヲ監査スルコトヲ得サルカ故ニ、頗ル概測的ニ其價格ヲ見積ルコトヲ得ルノミ。勿論山地及ヒ老撾ニ於ケルヨリモ、平野地方ニ於テ盛大ナリ。之レ平野ニ於テハ人口多キト、總テノ交通道路多キニ反シ、他ノ地方ニ於テハ殆ント全ク交通機關無キヲ以テナリ。

此交通機關缺乏ノ結果トシテ、莫大ナル鑛山及ヒ森林ノ富源ヲ有スル老撾ノ如キ國ヲシテ、暹羅ノ顧客タラシムルニ至ル。即チ雨季ニ於テハ湄公右岸ノ合流ナルナムムーン及ヒナムシーノ兩河ハ老撾ノ物産ヲ暹羅ノコラツトニ輸送スル小舟ヲ以テ通航セラル。而シテ此等ノ小舟ハ食料、織物等ノ外國品ヲ積ンテ、再ヒウーボンニ向テ下ル。又交通機關ノ不備ナルコトハ一方ニ於テ暹羅カ英國資本ノ補助ヲ受ケテ、盤谷ニ向テ老撾ノ物産ヲ招致スヘキコラツトウーボン鐵道ノ敷設ヲ希望スル理由ヲ説明スルモノナリ。

大河及ヒ掘割ノ通航ハ進歩シツツアリ。東京、交趾支那及ヒ東甫塞ニ於テ植民地ノ補助金ヲ受クル會社之ニ從事ス。

鐵道ノ輸送モ亦敷設線カ漸次運轉ヲ開始スルニ從フテ著ルシク増加ス。鐵道ハ一國ノ形勢ヲ變更ス。人家ノ聚合、市場共ニ新ニ生シ、遠隔地間ノ關係容易ニ行ハレ宛モ距離ノ減縮セルカ如シ。要スルニ鐵道ハ富ノ造物主ナリ。

獨逸及ヒ佛國ノ或地方ニ於テ行ハルルカ如ク、印度支那ノ經濟的活動ハ航通スルヲ得ヘキ掘割、河川及ヒ鐵道ニ依テ増進ス。之レ此等ノ交通機關ハ各異ナレリト雖モ、互ニ補助シテ相害スルコト無キカ故ナリ。掘割及ヒ河川ハ鐵道ノ補助ニシテ敵ニアラス。掘割、河川ハ重ク、容積大ニ、而シテ價格少ナキ貨物ヲ運送スヘク、鐵道ハ旅客、製造品、高價品ヲ輸送スヘシ。

沿岸貿易ハ統計的監査ヲ受ク。其額ハ平均一年一億五千萬法ニ見積ラルヘシ（一九〇三年ニハ一億五千五百萬法、一九〇四年ニハ一億五千萬法、一九〇六年ニハ一億四千四百十五萬法）。

郵便電信ノ發着數ニ依テ一國經濟的活動ノ進歩ヲトスルコトヲ得ルモノナルカ、此數モ亦増進シツツアリテ收入ニ著ルシキ増加ヲ與フ。郵便局ノ數モ著ルシク増加シ、電信線ノ延長約三萬キロメートルニ達ス。

第六節 外國貿易

植民地ハ其外國貿易カ益盛大トナリ、而シテ此貿易ニ於テ本國ヨリ購買セル部分カ益増加スルニ從フテ益重要視セラルルモノナリ。又輸出ノ數量ハ最モ能ク植民地ノ富及ヒ開發ノ程度ヲ表示スト云フコトハ一ノ確言ノ如クナレリ。一國カ外國ニ生産品ヲ多ク輸出スレハスル程其國ハ富メルナリ。

外國貿易ノ繁榮ハ主トシテ關稅制度貨幣制度及ヒ港灣、港灣ノ位地及ヒ設備ト關係ヲ有ス。

(一) 關稅制度

印度支那ニ於ケル現行關稅制度ハ一八九二年一月十一日ノ法律ニテ佛國ノ爲ニ制定セラレ、同年ノ大統領命令ヲ以テ或斟酌ヲ加ヘタル後之ヲ植民地ニ通用セルモノニシテ、保護制度ナリ。佛國ニ輸入セラルル或種ノ產物ハ稅關普通稅率表Eニ記載セラルル輕減ヲ受ク。此表ニ於テハ珈琲、茶、胡椒、桂皮、アナナ、沙仁ニ關稅五割ノ輕減ヲ認ム。

植民地ハ本國ノ物品ヲ無稅ニテ通過セシムルノ義務アリテ、本國ハ植民地ノ物品ニ對シテ唯一部分ノ輕減ヲ與フルニ過キス。即チ相互主義ニ依ラサルコトハ印度支那ノ多クノ商人ヨリ著ルシク土人ノ購買力ヲ麻痺セシムヘキ經濟上ノ不條

理ナリト觀察セラレタリ。故ニ柴棍、海防、河内及ヒツラーノスノ商業會議所ハ本國商工業ノ正當ナル利益ヲ保護スルノ必要ヲ認ムルト同時ニ、植民地ノ商品ニ對シテ一層ノ自由主義ヲ要求セリ。

植民大臣ハ此等訴願ノ正當ナルコトヲ認メ、一九〇八年一月二十八日植民地ノ經濟的發展ヲ助成スルニ最モ適當ナル植民地關稅制度ノ基礎ヲ決定スルカ爲メニ調査ヲ命令セリ。之レカ爲メ一九〇九年二月委員會組織セラレ、現ニ植民地カ與ヘタル回答及ヒ一八九二年一月十一日ノ法律ニ添附セル稅率ヲ變更スル法律ヨリ生スヘキ影響ニ就テ研究ス。又他ノ方面ニ於テ理由無ク土人ヲ苦メサルカ爲メ、及ヒ支那人ノ占據スル商業ノ一部分ヲ土人ニテ行フコトヲ得セシムルカ爲メニ、印度支那人カ消費スル東洋產ノ或物品ノ輸入稅ヲ大ニ輕減セリ(一八九二年及ヒ一八九八年ノ大統領命令)。

又地方工業ヲ助長スルカ爲メ土人職工カ製造セル或工業品ニ保護ヲ與ヘタリ。
(二) 貨幣制度

印度支那ニ通貨ノ單位タル「ピヤストル」貨ノ相場カ時々變動シ且大ニ變動スルコトハ資本ヲ此ニ招致スル所以ニアラス。サレハ甚タ困難ナル事業ナルヘケレト

モ「ビヤストル」相場ヲ固定スルコトハ甚タ望マシキ事ナリ。斯クスルコトヲ得ハ經濟的活動ノ爲メニ重大ナル新要素トナルヘシ。實際今日ノ如ク「ビヤストル」貨ノ相場不定ナルニ於テハ資本家ハ資本ヲ投シ、又ハ資金ヲ送ルニ當テ幾回カ躊躇スヘシ。何トナレハ其欲スル時機ニ於テ良好ナル條件ニ於テ之ヲ利用スルヲ得ルコト確實ナラサルヲ以テナリ。

(註)此貨幣相場ノ固定ハ銀貨國タル支那カ自カラ金本位又ハ之ニ似タル幣制ヲ採用シタル時ニアラサレハ多クノ不便、困難無シニ之ヲ行フコトヲ得サルヘシ。此ノ固定ノ方法ハ稍急遽ニ印度(一八九三年)馬尼刺及ヒ暹羅ニ於テ實行セラレシカ、豫期ノ結果ヲ奏セサリシ。

(三) 外國貿易ノ價額

左ニ示ス數字ハ少シク四捨五入セルモノナルカ、一九〇〇年以降印度支那ノ通商ニ就テ觀念ヲ與フルモノナリ。

年	度	輸	入	輸	出	合	計
一	九	〇	〇	一八五、八五〇、〇〇〇 ^註	一五五、五五〇、〇〇〇 ^註	三四一、四〇〇、〇〇〇 ^註	

一	九	〇	〇	二〇二、五〇〇、〇〇〇	一六〇、六〇〇、〇〇〇	三六三、一〇〇、〇〇〇
一	九	〇	〇	二一五、〇〇〇、〇〇〇	一八五、〇〇〇、〇〇〇	四〇〇、〇〇〇、〇〇〇
一	九	〇	〇	二〇四、一五〇、〇〇〇	一二〇、四五〇、〇〇〇	三二四、六〇〇、〇〇〇
一	九	〇	〇	一八五、〇〇〇、〇〇〇	一五六、四〇〇、〇〇〇	三四一、四〇〇、〇〇〇
一	九	〇	〇	二五四、五五〇、〇〇〇	一六八、七五〇、〇〇〇	四二三、三〇〇、〇〇〇
一	九	〇	〇	二二〇、七〇〇、〇〇〇	一七六、九〇〇、〇〇〇	三九七、六〇〇、〇〇〇
一	九	〇	〇	二九四、九七〇、〇〇〇	二五三、三六〇、〇〇〇	五四八、三三〇、〇〇〇

以上ノ數字ヲ研究スルトキハ左ノ論定ヲ爲スコトヲ得ヘシ。

第一、輸出額ノ規則正シク増進セルコトハ生産ノ争フヘカラサル進歩ト植民地ノ

富ノ漸次ニ發達セルコトヲ示ス。

第二、一九〇三年及ヒ一九〇四年ノ凶作ノ結果トシテ(暴風洪水、旱魃ノ爲メ)植民地ノ商業ハ一時減退セリ。

第三、輸入カ輸出ヨリモ少ナカリシ時期、即チ此間ニ植民地ノ富カ増加セシ時期ノ後ニ一九〇〇年ノ頃ヨリ反對ノ傾向ヲ生セリ。之レ豫定ノ大工事ニ著手シ多量ノ材料ヲ輸入スルコトヲ要シタルヲ以テナリ。

第四、一九〇七年ノ通商額ハ明カニ前數年ノモノニ優レリ。之レ此植民地殊ニ交趾

支那ニ於テ非常ニ豐饒ナル收穫アリタルカ爲メナリ。
(四) 佛國ヨリノ輸入ト外國ヨリノ輸入トノ比較

印度支那經濟時報ハ一九〇八年ノ或號ニ於テ一九〇七年ニ至ル間ニ於テ印度支那ニ行ハレタル佛國ヨリノ輸入ト外國ヨリノ輸入トニ就テ甚タ興味アル比較ヲ爲シタリ。

輸入原地	自一八九二年平均一年	自一九〇七年平均一年
佛國ヨリ輸入	二三、二八三、〇〇〇 ^法	六一、九〇〇、〇〇〇 ^法
外國ヨリ輸入	五一、六六六、〇〇〇	七九、一七六、〇〇〇

即チ一期ヨリ次期ニ至ル増加率佛國ヨリノ輸入ニ就テハ百分ノ百六十五ニ次テ百分ノ六十一ニシテ外國ヨリノ輸入ニ就テハ百分ノ五十三ニ次テ百分ノ三十七ナリ。又上記ノ數字ヲ對照スルトキハ歴然トシテ佛國ヨリノ輸入カ外國ヨリノ輸入ヨリモ甚タ大ナル割合ニ於テ増進セルコトヲ認ム。

更ニ此等ノ輸入額ヲ一九〇七年及ヒ一九〇七年度ニ就テ比較スルトキハ一層著明ナル結果ヲ示スコト左ノ如シ。

輸入原地	一八九二年度	一九〇七年度
佛國ヨリ輸入	一八、四三八、〇〇〇 ^法	一〇七、四七〇、〇〇〇 ^法
外國ヨリ輸入	五〇、一九三、〇〇〇	一二〇、六一三、〇〇〇

即チ一八九二年度ニ於テハ總額ニ對スル割合佛國ヨリノ輸入百分ノ二十七ニ對スル外國ヨリノ輸入百分ノ七十三ナリシモノ一九〇七年ニ於テハ前者百分ノ四十八ニ對スル後者五十二トナレリ。

且ツ注意スルコトヲ要スルハ此ニ外國ヨリノ輸入ト云フハ歐洲ノ諸外國ヨリ來ルモノニアラスシテ東洋ノ諸國即チ日本、馬尼刺、支那、香港、新嘉坡等印度支那ノ自然的取引地ヨリ來ル商品ヲ以テ殆ント全部ヲ占ム。

此事印度支那ノ地勢ニ依テ容易ニ説明セラル。此等ノ商品ハ東亞細亞ニ特有ノモノニシテ且ツ印度支那土人ノ嗜好習慣ニ適合セルモノナリ。佛國ハ斯カル商品ヲ供給スルヲ得ス。殊ニ食料品ニ於テ然リ。歐洲ノ諸外國及ヒ亞米利加ヨリ來ル產物ハ輸入總額ノ單ニ百分ノ十二當ルニ過キス。之ヲ以テ見レハ此植民地ニ於テ佛國ノ生産品ハ同種ノ外國生産品ノ輸入ノ爲メニ僅ニ侵蝕セラルルニ過キス。

(五) 佛國向ケ輸出

印度支那ノ輸出ニ就テハ佛國僅ニ總額ノ四分ノ一強ヲ受クルニ過キス(印度支那ノ購買額ノ約半分ヲ供給スルニ拘ハラス)。此差異ハ容易ニ説明セラル。即チ輸出ノ最大部分ヲ占ムル貨物ハ東洋諸國殊ニ支那ニ賣ラルル米ナルヲ以テナリ(支那ト印度支那トノ商業ハ一九〇七年ニ於テ約四千萬法ニ上リ、其内三千二百萬法ハ支那向ケ輸出ニシテ、八百萬法ハ支那ヨリノ輸入ナリ)。

六摘要

印度支那ノ經濟的運動ハ左ノ如ク細別セラル。

第一、佛國及ヒ其植民地ニ對シテハ半額弱。

第二、香港新嘉坡經由東洋諸國ニ對シテハ約半額。

第三、他ノ諸外國ニ對シテハ、或ハ直接ニ或ハ上記ノ二大港ヲ經由シテ此等ノ

殘額。

佛國ノ部分ハ今後一般ノ商業カ増進スルニ伴フテノミ増加スヘシ。何トナレハ印度支那トノ商業ニ於テ東洋產ノ物品ヲ佛國カ代テ供給スルコトヲ得サルヘク、一方歐米ノ諸外國ト印度支那トノ取引ハ甚タ僅少ナルヲ以テナリ。加之土人ハ商品ノ品質良好ナルヨリハ其廉價ナルコトヲ喜フ。之レ英國製若クハ獨逸製ノ粗惡

品カ佛國品ヨリモ能ク買ハレ、此植民地ニ於テ首位ヲ占ムル所以ナリ。之レカ對抗策トシテハ佛國品ノ價格ヲ低下シ、且ツ特ニ土人向キノ物ヲ製造スルニ在リ。

(七)輸入品

輸入セラルル物品ハ三類ニ分ツコトヲ得。

第一、食料品 穀粉、捏粉、葡萄酒、他ノ酒類、罐詰等ノ如キ。

第二、製造品 鐵軌器械、織物、加工金屬、銅鐵器、石油、巴里製品、洋傘、洋燈等。

第三、外國產物品 (佛國ニハ同種ノ物品ヲ產セサルモノヲ云フ)阿片、藥種、茶等。

(八)輸出品

第一、食料品 米(大多量ニ)玉蜀黍、漁產鹽等。

第二、特種品 胡椒、茶、煙草、花蕊、護謨、珈琲、アラビヤ護謨、茴香、纖維植物(棉花、黃麻、粗麻、

樹綿、植物性油、山桐、アブラザン、ココ、比麻、落花生ヨリ取レル)、沙仁、桂皮、滌玉、檳榔ノ

實等。

第三、原料品 石炭、鑛石(錫、亞鉛、銅、鐵)、生絲等。

(九)商港

印度支那ノ貿易ハ商港ヲ以テ行ハル。其重モノナルモノハ左ノ如シ。

(イ) 柴棍 柴棍ハ印度支那第一ノ港ニシテ商港ト軍港トヲ兼ス。河岸ニ在リ。不幸ニシテ其位地稍大航路線ヨリ離ルト雖壯宏ナル埠頭、二箇所ノ修理船渠及ヒ十分ナル設備アリ。

之ハ主トシテ交趾支那及ヒ東甫塞ニ産スル米ノ輸出港ナリ。一九〇二年ニ於テ柴棍ニ入リシ汽船六三〇隻、其噸數八三四、三四〇ニシテ、其中三〇一、二四〇噸ハ佛國船ニ屬ス。一九〇七年ニ於テハ七〇四隻、一、六九五、五一五噸、其中五七二、〇六〇噸ハ佛國船ニ屬ス。柴棍ノ輸出入貿易ノ合計ハ一九〇二年ニ於テ二五九、六一三、〇〇〇法ニシテ、一九〇七年ニ於テハ三九一、五五一、〇〇〇法ナリ。

柴棍ハ佛國郵船會社(Messageries Maritimes)郵便船及ヒ貨物運送船ノ巨船及ヒシヤルジュール・レユニ會社ノ汽船ヲ以テ常ニ本國トノ交通ヲ保ツ。

(ロ) 海防 海防ハ東京ノ港ナリ。柴棍ノ如ク河岸ニ在リテ海ヲ離ルルコト三十、キロメートル政府ハ港口ヲ改良スルカ爲メニ常ニ浚渫工事ヲ爲スト雖、遂ニ良港タルコトヲ得サルヘシ。然レトモ今日ノ如クニシテモ甚タ重要ナルモノニシテ、其繁榮ハ漸次増加スヘシ。其輸出ハ東京工業ノ富ノ増加及ヒ其經濟的發達ニ由テ十年間ニ五倍セリ。一八九八年ニ於テ六一三隻ノ汽船海防港ニ出入シ、商品三萬八千噸ヲ

輸入シ、八萬八千噸ヲ輸出セシカ、一九〇八年ニ於テハ出入汽船七二四隻ニシテ、九萬三千噸ヲ輸入シ、三十九萬五千噸ヲ輸出セリ。兩年度ノ輸出ノ差ハ三十萬七千噸ニシテ十年間ニ於テ土人、佛移住民及ヒ東京ノ商工業者カ大ナル努力ヲ爲シタルコトヲ示ス。

現時ノ海防棧橋ハ不十分ナルヲ以テ之ヲ延長シ、稅關荷揚所ニ於テ河岸停車場ヲ設ケ及ヒ長サ百四十米突ノ修理船渠ヲ築造スルノ議アリ。

(ハ) ツーラー ツーラーヌハ安南ノ港ニシテ形勝ノ灣ニ沿フ。然レトモ稍港口廣キニ過キ又市街ニ接シテ水深十分ナラス。故ニ稍大ナル汽船ハ悉ク氣象臺島ノ附近ニ碇泊シ、此ヲ以テ眞ノツーラーヌ港ト爲ス。サレハ此島邊ニ棧橋ヲ築造シ又浚渫ヲ行ハサルヘカラス。

ツーラーヌ順化、カントリ鐵道ノ運轉ハ大ニツーラーヌ港ノ重要ヲ増加スヘシ。
(ニ) 廣州 廣州ハ印度支那唯一ノ自由港ナリ(廣州ハ支那領ニ存スト雖行政上印度支那ニ附屬ス)。此港ハ廣州灣租借地ノニグエー岬ノ附近ニ全部新タニ築設セラレタルモノナリ。數汽船ト多數ノ戎克此ニ出入ス。此港ハ殊ニ香港、海防、海南島ト關係ヲ有ス。一九〇〇年以來其繁榮漸次ニ増加ス。

尙ホ他ノ諸港ハ印度支那ノ海岸ニ沿ヒ又ハ海ニ近キ河ニ沿フテ散在シ主トシテ支那戎克出入ス。東京ニ於テハ茫街、ボアント、バゴウド、ポールワリ、ユー、廣安、南定、寧平、安南ニ於テハ宜安、ドンホイ、キノ、ン、ナトラン、フアンラン、カムラン、フアンチエ、一、交趾支那ニ於テハミト、トランウイン、ラクジア、東甫塞ニ於テハハチエン及ヒカ、ンボットナリ。總テ此等ノ諸港ハ必要ナル經費ヲ支出スルヲ得ルニ至テ整備セラ、ルヘキモノナリ。

印度支那ノ諸港ニ來ル佛國船ノ數ハ一九〇〇年來著ルシク増加シタリ。然レトモ外國汽船(獨逸、英國、丁扶、和蘭、那威船)頗ル多數來航シ、佛國船ト競争シ通商ノ三分ノ二ヲ占領セリ。此常規ニ悖ル悲シムヘキ形勢ハ特ニ注意スルコトヲ要ス。

又老撾商業ノ一大部分及ヒ東甫塞商業ノ一部分ハ暹羅ニ入り盤谷港ヲ經テ行ハル。盤谷ハ繁榮ナル港ニシテ一九〇八年ニ於テ一億一千七百萬「チカウ」即チ約二億四千萬法ノ商品ヲ輸出セリ。

(一)通過貿易

支那ノ兩廣雲南ニ出入スル產物ニテ、東京ノ鐵道及ヒ河川ニ由ルモノアリ。此貨物移動ハ通過貿易ヲ組成ス。此貿易ニハ上リト下リトアリテ雲南及ヒ廣西ト香港

トノ間ニ行ハル。雲南及ヒ廣西ヨリ見レハ東京ハ即チ通過國ナリ。

雲南ノ首府ハ上海ヨリ楊子江ノ路ヲ經テ二、八〇〇「キロメートル」ノ所ニアリ。西江ヲ經テ廣東ヨリ千五百「キロメートル」ノ所ニ在リ。然ルニ海防ヨリハ紅河ノ路ヲ經テ僅ニ八五〇「キロメートル」ニ過キス。斯ノ如ク東京ノ爲ニ有利ナル距離ノ差アルカ故ニ、東京ハ勢ヒ雲南商業ノ出口タルヘキモノナリ。且ツ東京雲南間ノ通商モ毎年増加ヲ示ス。

然レトモ最近マテ楊子江及ヒ西江ノ路ヲ取リタル支那商業ヲシテ海防、老開ノ途ヲ選ハシムルニハ、海防、老開ノ途カ捷路ニシテ且ツ最モ經濟的ナルコトヲ要ス。故ニ紅河上流ノ水路ヲ改良スルコトヲ要スヘシ。此水路ハ海防、老開、雲南府間鐵道ト競争セスシテ、其副道トナリ重量容積大ニシテ價格少ナキ貨物ヲ運送スルニ便ナルヘシ。

廣西ニ關シテハ河内、ドンダン線ヲ龍州及ヒ南寧マテ延長スルヲ以テ東京ノ爲メ甚タ有利ナリトスヘシ。此鐵道南寧ニ達スレハ、今日尙ホ雲南ヲ出テ西江ヲ下リ、南寧ヲ經テ北海ノ方面ニ向フ相當大ナル通過貿易ヲ東京ニ引付クルコトヲ得ヘシ。

通過貿易ハ一八九七年ニ於テ一一二六〇〇〇法一九〇〇年ニハ二〇、八〇〇、〇〇〇法千九百三年ニハ二四、一六一、〇〇〇法一九〇五年ニハ三〇、六〇〇、〇〇〇法一九〇六年ニハ二五、三〇〇、〇〇〇法ト逐次變遷セリ。

一年二千五百萬法ノ通過貿易ハ左ノ如ク分類セラレ。

上リノ通過貿易千百萬法(煙草、棉絲七、八百萬法、及ヒ綿布)。

下リノ通過貿易千四百萬法(錫千二百五十萬法、茶、阿片等)。

(二) 結論

上記ノ觀察ニ依レハ印度支那ノ商業的繁榮ハ勿論其進歩ヲ繼續ス、即チ其一般商業ハ一九〇七年ニ於テ七億二千五百萬法ニ達セリ(外國貿易五億四千八百萬法、沿岸貿易及ヒ通過貿易一億七千七百萬法)之ヲ一九〇六年ニ比スルニ一億五千五百萬法ヲ増加セリ。

沿岸貿易ヲ除キ單ニ其外國貿易五四八、三三四、〇〇〇法ト其通過貿易二千五百萬法合計五七三、三三四、〇〇〇法ノミニ付テ觀察スルモ直ニアルゼリーノ次位ニ存ス。アルゼリーノ貿易ハ通過貿易ヲ合シテ一九〇七年ニ於テ八二〇、〇〇〇、〇〇〇法ニ達セリ。チユニジーハ二〇六、二二一、〇〇〇法ニシテ遠ク印度支那ニ及ハス。

而シテアルゼリー及ヒチユニジーハ佛國植民地中ノ最モ繁榮ナルモノナリ。

印度支那ハ佛國ノ爲メニ其商品ヲ販賣スヘキ一大市場ヲ組成スルコトヲ認ムヘシ。又佛國カ需要スル物品ヲ之ニ供給スルコトヲ得セシム。此物品タル之ヲ外國ヨリ買ハントスルトキハ時トシテ一層不利ナル條件ニ依ラサルヲ得サルコトアルナリ。之ヲ要スルニ印度支那ハ開發的植民地ノ標本タルヘキモノナリ。

第七節 工業

(一) 土人ノ工業

上文ニ陳ヘタル如ク印度支那ハ主トシテ農業國ナルカ故ニ工業カ此ニ第二位的地位ヲ有スルニ過キサレコトハ敢テ驚クニ足ラス。

土人工業ハ甚タシク地方的ニシテ實用品ヲ製造セリ。即チ織物、花筵、陶器、紙、其土地ニ於テ使用セララルル材料タル石灰、煉瓦、養澤品トシテハ螺鈿細工、唐木細工、彫刻セル象牙及ヒ良木等ナリ。

漁業及ヒ鹽魚又ハ魚醬ノ製造ハ安南及ヒ東甫塞大湖沿岸ノ重モナル産業ヲ組成セリ。又養蠶業ハ數世紀ノ間沈滞ノ状態ニ存シタリ。又各村ニ於テ米ヲ蒸餾シテ

酒ヲ作ルヘキ數箇ノ裝置存在シタリキ。

佛國ノ領有以來此等ノ工業ハ一般ニ發達シ進歩ヲ繼續ス左ニ其重モナルモノヲ研究スヘシ。

(イ)花筵製造。此工業ハ東京ノフアジエム地方ニ於テ甚タ發達シ、毎年香港ヘ向ケ五六千噸ヲ輸出シ、香港ヨリハ支那花筵ノ名ニテ歐洲ニ送ラル。花筵ノ最モ大ナル製造所ハ支那人ノ合資ヨリ成ル。

(ロ)養蠶業。此工業ハ植民地ノ爲メニ大ナル富源ト爲ルヘキモノニシテ、政府ハ大ニ之ヲ獎勵シ桑畑ニ免租セリ。又フランスヨニバストール式ノ選種法ヲ有スル産卵場ヲ創設セリ。此工場ハ一九〇七年ニ於テ百萬、一九〇八年ニ於テ約三百萬ノ卵子ヲ分配セリ。

絹絲紡績學校ヲ太平ニ設立セラレ、又南定ニ於テ模範的絹絲紡績所ヲ設ケ、土人傳來ノ方法ニ代ユルニ歐洲工業ノ方法ヲ以テセリ。此紡績所ハ一九〇六年ニ於テ八千餘キログラムノ生絲ヲ製出セリ。太平ニ於テ新ニ蒸汽器械ノ紡績所建築中ナリ。本年内ニ操業セラルルニ至ルヘシ。

絹織物中殊ニピンデン州キノノ縮緬ハ常ニ顧客ヲ絶タス。

生絲ノ輸出ハ一九〇七年ニ於テ九萬キログラム、價格百萬法ニ達セリ。

桑ノ栽培ハ東京及ヒ安南ニ於テ擴張セラルルヲ得ヘク、亦擴張スルコトヲ要ス。養蠶所モ亦之ヲ増加スヘシ。此等ノ國ハ里昂ノ工業ノ爲メニ今日日本及ヒ廣東ヨリ購求セサルヲ得サル生絲ノ一大部分ヲ供給スルコトヲ得ルニ至ルヘシ。

(ハ)製鹽業。印度支那海岸ノ甚タ延長セルニ拘ハラス、鹽ノ産出ハ一九〇六年マテ漸次減少セリ。即チ一九〇一年ニ於テハ一七〇、〇〇〇噸ナリシモノ、漸次ニ一九〇二年ニ於テ一四七、〇〇〇噸トナリ、一九〇三年ニハ一三八、〇〇〇噸トナリ、一九〇四年ニハ一八四、〇〇〇噸トナリシカ、一九〇五年ニ於テハ一三七、〇〇〇噸、一九〇六年ニ於テハ一七〇、〇〇〇噸トナリテ再ヒ増加セリ。之レ製鹽業ノ眞ノ復興ヲ示スモノニシテ、税關專賣局カ製鹽業者ニ與フル代價ヲ増加セシコト之レカ原因ナリ。鹽ハ東洋ノ總テノ國ニ向ケ輸出セラルルモ、漸ク一萬噸ニ達スルニ過キス。然レトモ此等輸入國ノ消費力ハ莫大ナルカ故ニ此輸出額ヲ十倍スルコトハ容易ナルヘシト信ス。

操業中ノ重モナル鹽田ハ交趾支那(バクリユー)及ヒバリア(ア)及ヒ安南、東京ノ海岸ニ在リ。

(ニ) 漁業及ヒ其副産物。魚ノ乾製、鹽製、魚醬ノ製造、キノシ、及ヒ魚油ノ製造、此等ノ工業ハ一時不振ナリシカ再ヒ盛大トナレリ。

(ホ) 奢侈品製造。河内ノ技藝及ヒ職業學校ハ種々ナル職業ニ於テ土人ノ職工ヲ養成シ、其工業的技能ヲ發達セシム。此等ノ職工ハ甚タ良好ナル天然ノ資性ヲ有ス。即チ彼等ハ器用ニシテ發明ノ才、嗜好ノ精細ヲ有シ、製品作業ニ於テ支那人又ハ日本人ニ對シテ競争スルコトヲ得ルモノナリ。

(二) 歐洲人ノ工業

歐洲人ノ工業モ亦漸次ニ發達ス、若シ植民地ハ本國ニ原料品ヲ供給スヘキ倉庫タルト同時ニ、本國製造品ノ販路タラサルヘカラスト云フ説ニ從ヘハ、植民地工業ノ發達ハ本國人ヲ驚カスヘシ。故ニ本國ノ工業ハ競争スルノ恐レアル工業カ植民地ニ發達スルコトハ、本國ノ好意ヲ以テ迎ヘサル所ナリ。サレハ詮スル所植民地ノ工業ハ本國工業ノ補足タルヘク、地理ノ狀態及ヒ外國競争ノ關係上本國工業ノ力及ハサル市場ニ於テ有利ニ本國工業ヲ代理シテ製品ヲ供給スヘキモノナリ。冶金工場、紡績所、海防ノ「セメント」工場ノ如キ此場合ニ屬ス。

メーフル氏ノ公ニセル研究ニ依レハ一九〇七年ノ末ニ於テ、東京ニ唯八十五箇

所ノ工場アリ、之ヲ運用スルカ爲メニ投シタル資本四千七百七十五萬法、歐洲人使用人二百四十、土人使用人男六千四百、女六千七百、兒童千五百ナリ。

此植民地ニ於テ發達シツツアル重モナル工業ノ中ニテ左ノモノヲ舉グルコトヲ得ヘシ。

(イ) 器械的工業。ベンチユイ(安南)柴棍、河内ニ於ケル燐寸製造所、海防ノ「セメント」製造所、河内、ダツカウ、柴棍ノ煉瓦製造所、造船工場、海防ノ「マルチー」及ヒ「ボルセー」工場、柴棍、大河郵船會社工場。

東京ニ於テ河内、海陽、南定及ヒ柴棍ノ「アル、コトル」蒸餾所、河内、海防、柴棍ニ於ケル製氷所、海防ノ石鹼製造所。

(ロ) 纖維工業。之レ今日迄印度支那工業ノ最重要ナルモノナリ。河内、海防、南定及ヒ東甫塞ノ紡績所ハ全盛ノ勢ナリ。何レモ其周邊ニ莫大ナル販路ヲ有ス。印度支那ハ年々棉絲ヲ消費スルコト四千乃至五千噸、雲南ハ七千乃至八千噸、廣西ハ四千乃至五千噸、此合計一萬五千乃至一萬八千噸ノ棉絲ハ佛本國ニ於テ困難無ク他ニ販路ヲ得ヘキヲ以テ、佛國ハ必スシモ自國ノ製品ヲ此ニ送ルコトヲ要セス。現ニ甚タ高率ノ關稅保護ノ下ニ甚タ少量ヲ印度支那ニ輸入スルノミ。サレハ印度支那ノ紡

續業ハ毫モ本國ノ工業ヲ害セスト云フヘク、即チ吾人カ上記ノ定義ニ入ルヘキ工業ナリ。而シテ印度支那ノ紡績業ハ自然ノ勢トシテ國內ノ市場ハ勿論、隣接セル支那諸州ノ市場ニ於テ印度、日本ノ棉絲若クハ獨逸棉絲ニ代ハルヘキモノナルヘシ。今日ニ於テハ尙ホ未タ然ラス。印度支那ノ紡績所ハ辛フシテ孟買棉絲ノ輸入ニ對シテ競争ス。一九〇九年五月五日印度支那銀行株主總會報告參照。

(ハ)食料品工業。此工業ハ單ニシヨレンニ於ケルハ乃至十箇所ノ精米場アルノミ。各工場一日ニ穀數百噸ヲ精米ス。此等ノ工場ハ殆ント全部支那人ノ手中ニ在リ。

(ニ)探掘工業。印度支那ノ工業ハ其礦物ノ富カ今日ヨリモ能ク知ラレ、大規模ヲ以テ開發セララルルニ至ラハ尙ホ迅速ナル進步ヲ爲スヘシ。然レトモ或鐵山ノ探掘ハ今日ヨリ既ニ重要ナラサルニアラス。

1. 石炭 工業ノ麵包原料化成ニ必要ナル原力ナル石炭ハ印度支那ニ豊富ニシテ左ノ箇所ニ於テ探掘ヒラル。

甲、鴻基炭山 毎年ノ產出三十萬噸(一九一九年ニ於テハ殆ント六十萬噸ニ及フ)價格約四百萬法、無煙炭ナレトモ其儘ニテ冶金ニ使用セラルルコトヲ得。汽船、機關車及ヒ工場ノ燃料トシテハ有煙炭及ヒ「ピツチ」ト混和スルヲ可トス。此炭

山ハ年々約二十二萬噸ノ石炭及ヒ煉炭ヲ輸出ス。

乙、ノンソン炭山(無煙炭) ツーラー!スヲ距ル六十「キロメートル」ノ所ニ在リ。其產額前者ヨリモ少ナシ。其石炭ハ船ヲ通スルツーラー!ス河ニ依テ搬出セラル。

丙、東京ドレトクユー。

丁、東京寧平州ノドンジアオ(褐炭)年產二萬噸。

ケバオ炭山 曾テ巨費ヲ投シテ設備シ、鐵道ヲ敷設シタルモ一時探掘ヲ中止セリ。頃日又再ヒ之レカ經營ヲ始ムルノ議アリ。

紅河ノ露地及ヒ太原州老撾ノリユアンブラバン及ヒシエンカン地方ニ於テモ石炭ノ存在ヲ認メラル。

2. 鐵 鐵ハ全印度支那ニ於テ豊富ニ存在シ、資本家ノ注意ヲ惹クニ至レリ。鑛石ハ甚タ含有分多ク、一般ニ赤鐵鑛ナリ。今迄知ラレタル重モナル鑛床ハ東甫塞ニ於ケルブノンデツク、安南ノカントリ、東京ノ太原、安世、モクサツト(カオバンノ附近)ノ鐵山ニ在リ。

太原ヲ距ルコト十二「キロメートル」ナルキュウヴァンノ鐵鑛ハ探掘中ニテ、約百人ノ勞働者ヲ使役ス。此ニ土人ノ幼稚ナル鑛鑛所アリ。蓋シ東京ニ於ケル最初

ノ冶金工場ノ萌芽タルヘキモノナルヘシ。

3. 錫、錫鑛ハカオバンノ地方ニ在リ探掘中ノモノハチンチユツク及ヒボージツトノ鑛山ニシテ一九〇八年ノ產額二百噸、老撾バクヒンブーンノ地方ニ於テモ一鑛脈探掘セラル。

4. 銅、銅ハ老撾ノヴィヤンシャース及ヒサヴァナケツトノ附近ニ於テ發見セラ
ル。黑河ノ下流地方ニ於テダチヨンノ銅鑛(藍銅鑛)探掘セラル。

5. 鉛、鉛ノ鑛脈ハ諒山及ヒ茫街ノ諸州ニ於テ發見セラル。

6. 亞鉛、亞鉛ハ東京ニ豐富ニシテ現ニ探掘中ノモノ二鑛山アリ。一ハ宣光ノトラ
ンダニシテ一九〇八年ノ產額九三〇〇噸、他ハ太原ノ附近ナルランギツトナリ
(譯者註、其後東京ノ亞鉛產額ハ一年四萬乃至五萬噸ニ達シ戰時中ハ大ニ我國ニ
モ輸入セリ)。

7. 金、金ノ鑛床ハ少シツツ所々ニ發見セラル。老撾ニ於テハヴィヤンシャース及
ヒシエンコンノ地方、東京、安南ノ方面ニ於テ探掘セラルモノハ唯安南ボンミ
エウ金山ノミ。此金鑛會社ハ全盛ニシテ一年ニ鑛石二萬五千噸乃至三萬噸ヲ精
鍊シテ約三百キログラムノ純金ヲ得、要スルニ印度支那ノ鑛富ハ莫大ナレトモ

未タ能ク知ラレスシテ開發セラルルモノ少ナシ。之レ資本家ノ躊躇スルト運搬
方法及ヒ交通道路ノ不備ナルトノ爲メナリ。然レトモ佛國ハ印度支那ノ開發ヲ
實行スルニ十分ナル資本ヲ有ス、何トナレハ十五年以來佛國ハ毎年平均十億法
ノ資本ヲ外國ノ事業ノ爲メニ遠方ノ起業ニ投スルヲ以テナリ。外國ノ起業ハ往
々危險ニシテ且ツ往々重モニ我競争國民ヲ利スルニ止マル。植民地ノ事業ニ投
資スルニ如カサルヘシ。

(三) 第三位的工業

(イ) 製紙業、東京ノダツカウニ於テ普通ノ紙及ヒ信仰用ノ紙ヲ製造スル工場起リ。
此地方ノ人民ハ年々支那ヨリ之ヲ輸入セサルコトヲ得ルニ至レリ。且ツ此製紙ハ
原料(美)豐富ニシテ安價ナレハ輸出セラルルノ望アリ。

(ロ) 窯業、シヨレンノ附近カイマイノ陶器製造所アリ。

(ハ) 麥酒製造業、唯一ノ麥酒釀造所ハ河内ニ在リ。其麥酒ハ相當ニ賞味セラル。佛國

及ヒ外國ノ輸向麥酒ヨリハ「アルコール」分少ナシ。

(ニ) 澱粉製造所、アリ。

(四) 結論

印度支那工業ノ將來ハ明白ニ豫測スルコトヲ得ヘシ。其發達ハ三條件ニ依ル。國內ノ平穩交通道路及ヒ運輸方法ノ發達、及ヒ資本ノ集注是レナリ。第一條件ハ良好ナル土人政策及ヒ十分強力ナル占領軍ノ存在ニ依テ得ラルヘシ。第二條件ハ今實行セラレツツアリ。第三ノ條件ハ第一、第二條件ノ實行ト同時ニ實行セララルヘシ。

第四章 陸海軍組織

第一節 陸軍組織

前各章説述セル所ノ目的ハ印度支那ヲ知ラシメ、其有スル莫大ナル價值及ヒ吾人カ土人ノ同情ヲ確保スルコトニ由リ生スル利益ヲ判明ナラシムルコトニ在リ。此富裕植民地ヲ防禦スルノ必要ハ當然ノコトニシテ、或侵害者ニ對シ陸上及ヒ海上防禦ヲ確實ニスル爲メニ採レル組織ハ此植民地ノ積極的防禦ニ任スルニ必要ナル兵力及ヒ印度支那艦隊ノ金城トモ湯池トモ看做スヘキ根據地ノ爲メニ守備兵ヲ供給スルニ足ル有力ナル守備軍ノ存在ヲ以テ根本義ト爲ス。

余ハ逐次ニ左ノ研究ヲ爲スヘシ。

甲、占領軍ノ組織、其必要ヲ證明スルコト、今日編成セララル守備軍ヲ觀察シ、他日編

成セララルヘキ守備軍ヲ斷定スルコト。

乙、海岸防禦ノ組織ヲ畧説スルコト。

第二節 駐屯軍

(一) 其組織

現時ノ印度支那駐屯軍ハ左ノモノヲ含ム。

東京。

植民地軍歩兵一箇聯隊

(第九聯隊、二箇大隊編成)

植民地軍歩兵一箇聯隊

(第十聯隊、三箇大隊編成)

東京土人兵四箇聯隊

(每聯隊三箇大隊編成第一、第二、第三、第四聯隊)

外人兵三箇大隊

植民地軍砲兵一箇聯隊、五箇中隊編成、(内二箇中隊ハ野砲、三箇中隊ハ山砲)

二箇旅團ヲ組織ス。其本部
ハ一ハ河内、一ハ北寧ニ在
リ。

土人工兵一箇中隊

砲隊付工夫一箇中隊

軍馬廠一

安南

第九聯隊ノ第三大隊(中三箇中隊ハ順化、一箇中隊ハツォラーヌ駐屯)

植民地軍砲兵一箇中隊

交趾支那

植民地軍歩兵一箇聯隊

(四箇大隊編成第十一聯隊)

安南土人兵一箇聯隊

(四箇大隊編成)

植民地軍砲兵一箇聯隊(十四箇中隊編成、内野砲五箇中隊、山砲二箇中隊、要塞砲兵

七箇中隊)

土人工兵一箇中隊

砲隊付工夫一箇中隊

一箇旅團ヲ編成ス。

註一 第十聯隊ハ廣州灣地域ニ一箇中隊ヲ分派ス。

印度支那駐屯軍ハ合計左ノモノヲ含ム。

歐人兵十三箇大隊、土人兵十六箇大隊、砲兵十九箇中隊、内十二箇中隊ハ混成(一九〇六年ニ於テハ此兵員歐人兵二十箇大隊、土人兵二十六箇大隊、砲兵二十七箇中隊ナリキ)。歐人兵一箇中隊ハ約百二十五人、土人兵一箇中隊ハ百五十人乃至百七十ヲ有ス。一九〇九年ニ於ケル駐屯軍兵員ハ總計二萬五千四百七十四人ニシテ内一萬一千六百九十二人ハ歐人兵ニシテ、一萬三千七百八十二人ハ土人兵ナリ(一九〇九年植民省豫算經費ノ部参照、歐人兵ノ數ニハ別ニ外人兵三箇大隊ヲ組成スル千五百人ヲ加フヘシ)。

(二) 其ノ目的

日佛協商(一九〇七年六月十日)及ヒ英佛和親協約ノ調印以來、從來良好ナリシ此三國間ノ關係ハ益良好ニ赴キタルヲ以テ、印度支那駐屯軍ノ目的ハ結局左ノ如クナルヘシ。

第一、國內秩序ノ保全ヲ確實ニスルコト。

第二、國境ノ安寧ヲ確實ニスルコト(支那及暹羅ノ國境)。

第三、左記ノ如キ或種ノ亞細亞問題ニ對シテ確乎タル態度ヲ持セシメ得ルコト。

甲、支那ノ軍事的進歩。

乙、大平洋覇權問題。

第四、日佛協約ノ一條ニ於テ兩國ハ日本或ハ佛國カ主權保護權又ハ占領權ヲ有スル地方ニ接近セル支那ノ地方ニ於テ安寧ヲ保全スルカ爲メ兩國ハ互ニ援助スルコトヲ約束ストノ協定ヲ爲セルカ故ニ確實ニ之ヲ履行スルコト。

(三) 國內秩序ノ保全。

佛人カ印度支那ヲ占領シテヨリ日尙ホ淺キカ故ニ、爭亂ノ生スヘキ恐レアルコト、又ハ佛人ノ勢力ニ敵意ヲ有スル土人ノ學者、野心家、隱謀者ノ爲メニ過ラレ又ハ或理由ノ下ニ一旦激昂セル人民ヲ再ヒ靜謐ナラシムル爲メニ或場合ニ於テハ兵力ノ干涉ヲ要スルコトヲ慮カラサルヘカラス。

曩ニ土人政策ニ關スル觀察ニ於テ畧說シタル最近ノ事變ハ吾人ヲシテ此必要ヲ想起セシムルニ足ル。

(四) 國境ノ平穩。

東京ノ中部及ヒ上部ノ地方ヲ攪亂シタル匪徒ヲ兩廣及ヒ雲南ニ擊退スルニ大

ナル困難ヲ感シタルコトハ、勢ヒ屯營ヲ設ケテ國境ヲ守リ、亂民ノ侵入ヲシテ容易ナラサラシムルヘク國境ノ防備ヲ必要ナラシム。

今日ニ於テハ殆ント全ク其跡ヲ絶チタル軍政地ノ組織、國境地方混成警察法ノ適用、適機ノ地點ニ於ケル歐人及ヒ土人軍隊ノ駐屯、國境地方ニ於ケル忠實ナル人民ノ武装(土民有志兵)此等ノモノハ相合シテ吾人ノ希望スル目的ヲ達セシムルコトヲ得タリ。東京平野ノ勤勉平和ナル人民ヲ支那土匪ノ侵入ヨリ保護スルコトハ即チ此目的ナリ。此匪徒ハ革命黨ノ侵入ニ對スル防邊策ハ支那東京ノ國境竝ニ暹羅、柬埔寨、老撾ノ國境ニ於テ常ニ實際ノ問題タルナリ。

現時ノ守備軍組織ニ於テハ曩ニ大ニ兵員ヲ減少セルニ拘ハラズ、訓練ヲ經タル正規軍隊ヲ以テ此國境ノ保護ヲ爲スノ必要ヲ認メタリ。東京土人兵五箇大隊歐人兵二箇大隊ハ茫街ヨリロンボニ至ル廣大ナル國境ヲ守備ス。

他ノ軍隊ハ或ハ鐵道及ヒ水路ニ沿ヘル地點、或ハ此等交通路ト近接セル要所ヲ占領シ、以テ威迫ヲ受ケタル地點ニ容易ニ集中セラルルコトヲ得ヘシ。其守備地點ノ撰擇ニ就テハ國內ノ政治狀態ヲモ參考スル處アリタリ。

一九〇八年及ヒ一九〇九年ニ支那革命黨ハ東京ニ於テ重大ナル騷擾ヲ起シタ

ルカ、辛クモ鎮定セラレタリ。此事タル支那國境ニ沿フテ我軍隊ヲ配布スル理由ヲ説明シテ餘リアリ。匪徒ニ關シテ本年當初佛國ト支那トノ間ニ協定ヲ爲セルニ拘ハラズ、此國境ハ恒常ニ必然的ニ反亂ノ状態ニ存スルヲ以テ、永ク佛國人ノ爲メニ煩厭ノ原因タルヘシ。

暹羅ノ方面ニ於テハ佛人ト此國民トノ間ニ、現ニ和親ノ關係保タルルカ故ニ、斯ノ如ク危險ナラス。然ルニ拘ハラズ正規ノ軍隊ヲ以テ過般東甫塞ニ還付セラレタル諸州ニ駐屯セシメタルコトハ、思慮アル緊要ノ行動ナリト云フヘシ。此軍隊ハ盜賊ノ如キ喧噪ナル人民カ住居スル此國境地方ヲ監視シ、平穩ヲ保持スルノ任務ヲ有ス。

(五) 亞細亞問題

(甲) 支那ノ軍事的進歩

支那帝國陸軍改革案ハ直隸總督袁世凱ニ依テ初メハ領兵處陸軍高等會議ノ種類ニ於テ、次ニハ之ニ代ハレル陸軍府陸軍省ニ於テ創定セラレタリ。此案ハ日本人ノ教ヘタルモノニシテ、陸軍ヲ國家的機關ト爲サントスルモノナリ。此案ハ秩序正シク漸次ニ實行セラレツツアリ。

中央政府ノ意志監督ニ服従スル一萬二千人編成ノ八箇師團ハ既ニ北部ノ諸省ニ存在ス。別ニ六箇師團ハ同一ノ諸省及ヒ沿海諸省ニ於テ編成中ニ屬ス。兩廣及ヒ雲南ニ於テハ漸ク編成ニ著手セルノミ。此三省ニ於テハ土匪常ニ存在シ、當局者ハ之レカ處分ニ全力ヲ注クヲ以テ、一時ノ間、陸軍省ノ主張ノ下ニ先帝ノ裁可ヲ經タル陸軍改革ニ對シテ十分ノ力ヲ盡スコト能ハサルナリ。

然レトモ支那十八省カ各豫定セラレタル二箇師團(實際總テノ兵種ヲ具備スル小軍團ニ異ナラス)ヲ有スルニ至ルノ時ハ恐ラク遠カラサルヘシ。即チ豫定ノ四十五萬ノ常備軍(別ニ編成セララルヘキ豫備師團ハ之レニ含まレス)ヲ有スルカ爲メニ、上奏文ニ於テ定メタル一九二二年ヲ待ツニ及ハサルヘキヤモ知レス。

支那ハ其政治上ノ獨立及ヒ領土ノ保全ヲ得ルコトニ汲々トシ、且ツ自カラ其國カヲ了解スルニ至リ、總テノ外國ト平和ノ關係ヲ保ツコトヲ希望ス。而シテ一方ニ於テ吾人モ亦富メル印度支那ノ植民地ヲ保有スルコトヲ希望スルカ故ニ、曩ニ日本ト締結シタルカ如キ協約ヲハ復興中ノ支那ト新ニ締結シテ以テ印度支那ニ於ケル我利益ノ最良ナル擔保タラシムルコト必要ナラスヤトノ問題多數識者間ニ生セリ。之レ重要ナル問題ニシテ誠實ニ研究セララルコトヲ要ス。

(乙) 太平洋問題

佛國カ印度支那ヲ領有シタル事實、此廣大ナル國ノ形勢、佛國カ此ニ生シタル利害關係等ノ爲メニ、今日日米兩國カ争フ太平洋霸權ノ現實問題ヲ等閑ニ付スルコトヲ得ス。佛國ハ東洋ニ於ケル活動ニ就テ印度支那ヲ根據地ト爲スコトヲ要スルナリ。

太平洋霸權ノ問題ニ關スル當該諸國ハ、各其準備ヲ爲ス、日本ハ密ニ既ニ有力ナル其艦隊及ヒ武装ヲ完全ニシ、陸軍ニ於テハ絶エス其師團ヲ増設シ、日露戰爭中ニハ十三箇師團ナリシヲ十九箇師團ト爲シ、尙ホ外ニ近衛師團ヲ有ス。斯カル陸海軍ノ擴張ハ單ニ防禦ヲ目的トシテ行ハルルモノトハ信セラレサルナリ。

一方ニ於テ米國ハ巴拿馬地峽開鑿ヲ迅速ニ進行セシムルヲ以テ足レリトセス、亦カリフォルニア海岸、サントウイツチ島、グアム島及ヒ馬尼刺ニ堅固ナル防禦工事ヲ組織スルヲ以テ足レリトセス。エヴァンス提督ノ率ヒタル大艦隊ノ示威的巡航ヲ組織シテ太平洋ニ於テ一時失墜セシトシタル其名聲ヲ回復セリ。此艦隊ハ世界一週ニ於テ途中故障無ク成功シ、其乘組水兵ハルーズヴェルト氏ノ力アル形容ニ從ヘハ「最良ノ大使、平和ノ軍使」タル職任ヲ盡セリ。此時機ニ投シタル示威運動ノ

直接ノ結果トシテ米國及ヒ日本間ニ一ノ協約ヲ生シ、之ニ由テ兩國ハ互ニ東洋ニ於ケル其領土ノ平和的領有ヲ擔保シ、又支那ノ領土保全ヲ保護スルコトヲ約セリ。此協約ハ兩國間ノ避クヘカラサル衝突ヲ或時期ノ間遠サカラシメタリ。

又英國ハ既ニ形勝ヲ占メテ堅固ナル香港ノ海軍根據地ヲ有スルニ拘ハラズ、更ニ熱心ニ新嘉坡海軍根據地ノ組織ヲ完成ス。

且ツ歐洲ノ新聞ニ依レハ獨逸ノ造船所カ有力ナル活動ヲ爲シ、以テ其海軍ノ驚クヘキ擴張ヲ行ハントシ、今ヤ英國ヲ憂慮セシムルノ域ニ進ムトノ時論頻リナリ。サレハ佛國ハ重要ナル太平洋問題ノ解決ニ由テ生スヘキ經濟上ノ結果ニ就テ無頓著ナルコトヲ得サルヘシ。タイチ島ノ形勝ノ位地、支那海ニ於ケル領土ノ位地ハ佛國ヲシテ柴根、カツブ、サンジャックノ海軍根據地ヲ完全ニシ、茲ニ訓練セラレタル十分強力ノ常備守備隊ヲ置クノ義務ヲ負ハシム。

印度支那ノ運命ハ恐ク歐洲ノ戰場ニ於テ決セラレヘキモノナリ。然レトモ之ヲ以テ印度支那ノ移住佛人ヲ土人叛亂又ハ或外國ノ理不盡ナル侵畧ノ犠牲ニ陥ラシムヘキ理由ナシ。

(六) 日佛協約ノ履行

前記ノ日佛協約中ニ於テ東京ニ隣接セル支那諸州ノ安寧秩序ヲ保シカニ佛國カ干涉スル場合アルコトヲ規定セル約束上必然の結果トシテ、此等地方ノ附近ニ於テ有效ナル干涉ヲ爲スニ足ルヘキ十分ノ力ヲ有スル正式軍隊ヲ置クノ義務ヲ生ス。

夫ノ伯林條約ニ關シ巴爾幹問題ニ就テ之ヲ見タルカ如ク、凡ソ條約又ハ協商ナルモノハ締約國雙方ノ利益トナルヘキ期間ニ於テノミ尊重セラルルニ止マルコトハ久シキ以來ヨリ證明セラル。故ニ自己ヲ尊重セシムルカ爲メニ、兵力ヲ使用スルコトヲ得サル國民ニハ如何ナル權利モ無ク、自己ノ利益ヲ堂々ト主張スルカ爲メニ、十分有力ナル武器ヲ有セサル國民ニハ如何ナル安寧モ無シ。日米英獨ハ各其利益ヲ保護スルニ適當ナル方法ニ就テ好先例ヲ我々ニ與ヘタリ。我々ハ之ニ倣フテ印度支那ニ於テ可及的有力ナルコトヲ勉ムヘシ。

(七) 駐屯軍ノ最良利用法

上記ノ觀察ハ成ルヘク強力ナル統一の駐屯軍存在ノ必要ヲ證明シテ餘リアリ、之レ佛國ノ利益ヲ完全ニ保護シ他國ヲシテ敬意ヲ拂ハシムルカ爲ニ必要ナリ。而シテ植民地防禦諮詢委員會ハ現時ノ兵員ハ最小限ノ組織ニシテ之レ以下ニ之ヲ

減少スルコトハ危險ナリト宣言セリ。然ルニ他ノ一方ニ於テハ重大ナル財政上ノ理由ハ此駐屯軍ノ増加ニ反對ス。是ニ於テ今日吾人カ有スル兵員ヲ利用スル最良方法ヲ探究スルノ利益ヲ生ス。

歐人兵及ヒ土人兵間ニ於ケル現行兵員割合ハ歐人兵一ニ對スル土人兵二ニシテ、原則トシテ甚タ可ナリ。但シ土人兵ノ募集ヲ完全ニシ、常ニ現存ノ歐人兵ノ定員ヲ充實スルコトヲ必要トス。第二ノ問題ハ印度支那ノ守備ヲ土人自身ニ委任スルコト、即チ安南國軍隊ニ委任スルコトニ存ス。故ニ余ハ遂次左ノ問題ヲ研究セントス。

- (イ) 土人兵ノ募集
- (ロ) 安南國民軍ノ考案
- (ハ) 人兵ノ募集

印度支那ノ征服、其平定殊ニ東京山地ノ平定ハ十分ニ吾人佛人兵ノ補助ヲ交趾支那ヒ東京土人兵ノ軍事上ノ價値アルコトヲ明白ナラシメタリ。此等土人兵ハ多ク、戰鬪ニ於テ佛人兵ト共ニ死傷セリ。多クニ將校ハ土人兵ハ能ク佛人兵ト混同的

ニ組織スル時ハ至良ノ兵士タリ。謀叛匪亂ノ難局ニ際シテモ忠實ニシテ献身シ、批難スヘキ二三ノ過失アルモ其殊功ニ依テ尤ニ之ヲ償ヒ得ルヲ認ム。此等ノ將校ハ亦タ土人兵ハ規律ヲ尊重シ、物品ヲ需要スルコト少ナク、且ツ非常ニ耐忍力ニ富ムカ故ニ之ヲ指揮スルコト容易ナリト附言セリ。

土人兵ノ募集法ハ現今兩回ノ大統領命令ノ規定スル所ニ依ル。第一命令ハ一九〇八年八月二十八日ノモノニシテ、交趾支那ニ於ケル土人兵ノ募集法ヲ定ム。第二ノ命令ハ一九〇四年十一月一日ノ發布ニシテ東京及ヒ安南ニ於ケル安南人種ニ關スルモノナリ。

交趾支那ニ於ケル土人兵ノ募集ハ左ノ如ク行ハル。

甲、各村落ニ於テ土人官長ノ注意ヲ以テ土人兵タルヘキ者ヲ指定シ、其中ヨリ抽籤ニテ必要ノ兵員ヲ徵集ス。

乙、補充トシテ志願兵ヲ雇入レ、又ハ再雇入レヲ爲ス。

募集兵數ハ毎年總督ノ命令ヲ以テ定ム。之ヲ各州ニ割付クルコトハ副總督ノ命令ヲ以テシ、一州内ノ各村ニ割付クルコトハ登錄土人ノ數ニ應シテ民政官之ヲ爲ス。

募集兵ノ服役年限ハ現役二年、豫備十三年、在郷後備五年トス。募集兵ハ徵集ノ年ノ一月一日前ニ二十二歳ニ達セルコトヲ要ス。志願雇入兵ハ少ナクモ滿二十歳ヲ有シ、多クモ二十六歳以下ニシテ部隊長ノ承認ヲ得ルコトヲ要ス。總テ兵員ハ無病、壯健、體格好ク、品行方正ニシテ曾テ體刑及ヒ加辱刑ニ處セラレサルコトヲ要ス。

土人兵ハ服務年限二十年ニ達スルマテハ一、二、三年ノ再役志願ヲ爲スコトヲ得。東京及ヒ安南ニ於テモ大體ノ原則ハ殆ント同一ナリ。唯抽籤ヲ以テ召集者ヲ定ムルノ制ヲ取ラス。

現役ノ期限ハ五箇年トス。但土人兵ハ再役志願ニテ最大限二十年マテ之ヲ延長スルコトヲ許可セララルコトヲ得ヘシ。

大統領命令ヲ以テ定メタル賞與金及ヒ加俸ノ如キ金錢上ノ利益ノ外ニ、土人兵ハ或他ノ利益ヲ享有スルノ權利アリ。其種類金額及ヒ分配法ハ總督府命令ヲ以テ之ヲ定ム。又一九〇四年十一月一日ノ大統領命令ハ印度支那ニ於ケル土人豫備兵ノ組織ヲ規定シ、豫備兵及ヒ後備兵ノ義務ヲ定ム。

上ニ記スル所ニ由テ見レハ兵役ハ總テノ登錄土人ニ對シテ義務的ナルモノニ

アラス、唯其一小部分ノミカ此義務ニ服スルノミ。故ニ一九〇六年ラネツサン氏カシエーケル紙上ニ於テ總テノ登錄土人ニ兵役ノ義務ヲ負ハシメ、全國ヲシテ佛國ニ對スル怨恨ヲ懷抱セシムト云ヒシコトモ亦精確ヲ失ス。

且ツ安南人モ亦總テノ東洋人ノ如ク進化セリ。今日ニ於テハ最早ヤ兵役ハ安南人、支那人、暹羅人ニ依リテ賤劣ナルモノトシテ觀察セラレス。彼等ハ皆等シク國內ノ安寧ヲ保持スルノ必要ヲ了解ス。數年前交趾支那ノ多數土人官長カ連署シテ總督ニ上書シ、安南人ヲ土人兵下士官ニ登用スルノ途ヲ一層廣ク開クコトヲ要求セルハ之レカ適切ナル例證ナリ。

支那ニ於テモ亦曾テハ武官ニシテ滿洲人ナラサル限リハ十八省ノ支那本土ヲシテ武力薄弱ナラシムルコトヲ欲シタル清朝ノ命令ニ服從シ、然カモ下級文官ヨリモ劣等視セラレタル時代アリタルモ、斯ル時代ハ既ニ去レリ。軍事學校ヲ出テ更ニ日本ノ陸軍學校ニテ其研究ヲ完成シタル士官ハ、總督、高官、巨商ノ子弟タル者多シ。之レ土人ハ同時ニ武官タリ且ツ學者タルヲ得ヘキモノナルコトヲ表示シタルニ異ナラス(過日清朝ノ攝政ハ陸海軍ノ最高指揮官タタ稱號ヲ取レリ。且ツ歐洲式ノ軍服模型ヲ採用セリ。攝政ハ之ヲ著シテ閱兵シ演習ニ臨マントスト云フ。之レ表

面一鎖事ニ過キササルカ如シト雖、亦以テ數年前ヨリ支那帝國ニ於テ軍制ノ創定及改良ノ必要カ當面ノ問題タル點ニ於テ一大變化ノ行ハレタルコトヲ表示スルモノト云フヘシ)。

夫ハ兎モ角モ東京ニ於テ兵役ニ適當ナル青年ヲ指定シ、之ヲ徵兵委員會ニ呈示スル者ハ村落ノ官長ナリ。

然ルニ村落ニ於ケル官長ノ權限ナルモノハ十分ニ行ハレス。且ツ今日迄徵兵ノ事務ハ餘リニ土人官憲ノ歡迎スル所ニアラサリシカ故ニ、其結果トシテ實際ニ於テ呈出セラレタル徵集兵ハ多クノ場合ニ於テ土人ノ糟粕トモ云フヘキモノナリ。而シテ志願兵ハ例外ニシテ土人官憲カ甘言ヲ以テ欺キ又ハ脅迫シテ指定徵集シタル者一般ニ多シ。

斯カル狀態ナルカ故ニ、就役ノ當初ニ於テ兵役ニ對シ熱誠ヲ缺ク土人ヲ以テ良兵士ヲ得ントスルハ難シ。而シテ忠實教育、權威ヲフ必要ノ品格ヲ具備スル良下士ヲ之ヨリ得ントスルハ更ニ難シ。

指揮官ノ輔佐トナリ、責任ヲ有シ權威ヲ行ヒ歐洲人下士ノ代理ヲ爲スヘキ此土人下士養成ノ問題ハセツト、バゴウドニ下士養成ノ學校ヲ創設セルコトニ依テ僅

ニ其一部ヲ解決シタリ。此學校ニ於テハ教育アルト同時ニ忠實良好ノ下士ヲ養成スルカ爲メ選良ノ土人ヲ入學セシムルコトニ勉ム。

今日土人軍隊ハ其數少ナク、隨テ吾人カ土人ニ課スル兵役ノ義務ハ僅少ナレハ、吾人ハ更ニ徵集法ヲ改正スルノ權利アリ。而シテ然改正ヲ實行スルカ爲メニハ今日交趾支那ニ適用スル徵集法ヲ、東京ニ適用スルヲ以テ足レリトスヘシ。此徵集法ハ既ニ満足ナル結果ヲ與ヘ且ツ徵集ノ事ニ關シ土人官憲ノ職任ヲ明確ニ規定ス。

土人兵ノ俸給ヲ増加シ新タナル生活狀態公共大工事ノ實行ニ由テ著ルシク變化シタルニ適應スルヲ得セシムルコトモ亦東京土人兵ノ徵集ヲ改良スルノ一方法タルヘシ。此事既ニ正當ニ交趾支那土人兵ノ爲メニ實行セラレタルモノナレハ（一九〇八年六月二十五日ノ大統領命令安南及ヒ東京ノ土人兵ニモ同一ノ恩遇ヲ爲スヲ至當ナリトスヘシ）。

稍長キニ涉リタル此土人兵徵集ニ關スル觀察ヲ終ラントスルニ當テ、尙ホ研究スヘキコトハ土人警吏即チ土人警察隊ノ兵士ヲ以テ土人兵ニ代用スルコトノ問題ナリ（此土人警察兵ノ員數ハ中々ニ多ク東京ノミニテモ二十箇中隊アリ、其兵員一九〇九年ノ初ニ於テ七千人）。

此代用ノ問題ハ既ニ一九〇八年ニ於テ研究セラレタルモノナルカ、植地民防禦高等會議ニ於テ不適當ナリト判定セラレタルカ如シ。余ハ此代用ヲ以テ危險ナリト云ハントス。

土人警察隊ノ將校下士及ヒ其指揮ニ屬スル警察兵ニ爭フヘカラサル能力アルコトハ之ヲ認ムト雖、之ヲシテ正式ノ軍隊ニ代ハラシムル時ハ其職任ノ目的變シ其任務餘リニ過重トナルヘシト思ハル。元來此警察隊ハ州長ナル民政官ノ直接命令ノ下ニ屬シ、州内ノ警察、高官及ヒ行李ノ護衛、佛國人及ヒ土人官衙ノ警衛、囚徒ノ看守、交通道路ノ警察ヲ其目的トスルモノナルコトヲ忘レルヘカラス（一九〇四年十二月三十一日ノ大統領命令第一條。然ルニ屢、爭亂アル國境地方ヲ守備シ、印度支那ノ如キ大國ノ内外ノ安寧ヲ保持シ、秩序ヲ回復スルカ爲メニ、隣國ニ迄モ干渉スルノ任務ハ全ク之レト種類ヲ異ニス。斯ノ如キ重大ニシテ複雑ナル任務ハ地方民政長官又ハ民政官、土人警察隊ノ將校及ヒ準將校ニ屬スル任務ニ於ケルヨリモ優秀ナル専門上ノ智識ヲ有スル軍隊ノ將校ヲ必要トス。又完全ナル武裝ヲ有シ教育ト訓練トヲ經タル作戰ニ適スル軍隊ヲ必要トス。總テ此等ノ事ヲ今日ノ土人警察隊ニ期待スルコトハ法外ナリト云フヘシ）。

吾人ハ上ニ示セル一九〇四年十二月三十一日ノ大統領命令第三十四條ノ諸項ニ規定セル所ハ甚タ理論ニ適合セルコトト認ム。之ニ依レハ印度支那ノ土人警察隊ハ左ノ場合ニ於テ陸軍官憲ノ指揮下ニ移ル。

第一、戦争ノ場合。

第二、戒嚴令公布ノ場合。

第三、争亂、一撥運動又ハ武装團體ヲ爲セル凶徒追撃ノ場合。

此問題ノ結論トシテ云ハントスルハ、土人兵ノ價值ハ其指揮者之レノ土人兵ニ對スル軍事教育及ヒ現在ノ物質上及ヒ道德上ノ状態ニ依テ定マルコトナリ。

土人兵ハ平時大都會ニ於テ疑心ト不平トヲ抱懷スル民象ノ中ニ住居スルカ爲メニ必然的缺點ヲ有ス。然レトモ此等ノ缺點ハ數日間戰鬪行動ニ入ル時ハ自ら消滅スヘキコト及ヒ今日ノ土人兵ハ其先役者ニ劣ラサルヘキコトハ余ハ同僚ノ多數ト共ニ信スル所ナリ。支那革命黨及ヒ安世ニ於ケル題探ニ對スル過般ノ戰鬪ハ之ニ關シテ適切ナル實例ヲ與フルモノト云フヘシ。

(ロ) 安南國民軍ノ考案。

土人兵ノ利用カ是認セラレタル以上ハ更ニ一步ヲ進メ漸次其數ヲ増加シ、殆ン

ト全ク土人兵ノミノ軍隊ヲ組織シ、之ニ此植民地ノ保護ヲ委任スルコト能ハサルカノ問題ヲ生ス。

此人心ヲ傾ケシムニ足ル新奇ノ方案ノ主張者ハ斯クノ如クシテ白人兵ノ數ヲ必要ナル最小限ニ減シツツ、此植民地ノ財政ニ新タナル軍事上ノ負擔ヲ生スルコト無クシテ、而カモ印度支那ノ防禦力ヲ増加スルコトヲ得ヘシト信セルナリ。

此論者斯カル軍隊ノ組織ヲ是認スルカ爲メニ、久シク印度支那ニ住シ安南人カ一般的叛亂ヲ爲シ得ヘキ事ヲ信セサル或官吏ノ論定ヲ基礎トスルモノナリ。此等官吏ハ各郡各村互ニ競争スルカ故ニ、叛亂ハ單ニ一部地方ノ一撥ト變スヘク、之ヲ鎮定スルコト容易ナリト斷定ス。更ニ佛人カ抱懷スルカ如キ本國又ハ國家ヲフ觀念ハ安南人ノ知ル所ニアラスト附言セリ。

余ハ此樂觀主義ニモ此觀察法ニモ全然左祖スルコトヲ得ス。既ニ近時ノ事件ハ之ニ對シテ殆ント明確ナル反證ヲ與ヘタリ。安南國民軍ノ創設ハ實行スルヲ得ヘキモノナリト思ハルルノミナラス、或ハ他日之ヲ必要トスルコトアラン。然レトモ今日ハ未タ其時機ニアラスト信スルナリ。

安南人ノ進化ハ事實ナリ。寧ロ甚タ迅速ニ進化ス。而カモ其進化ヲシテ秩序的ナ

ラシメ且ツ之レニ指導ヲ與フルコトヲ要ス。此點ニ留意スルハ安南人ニ利益ヲ齎スト同時ニ佛人ノ利益トナルナリ。

且ツ安南國民軍ト云フ以上ハ安南將校ニ依テ指揮セララル軍隊ノ意味ヲ含ム。此軍隊ハ愛國心ニ富ミ、總テノ侵略者ニ對シテ國土ヲ防禦スルコトヲ希望スヘシ。サレハ嚴確ニ云フトキハ佛國人ニ對シテモ國土ヲ防禦セントスルモノナルヘシ。時機未タ熟セサルニ斯カル軍隊ヲ創設スルトキハ徒ニ土人ヲ刺戟シテ結合シ、集團シ、以テ有ユル意欲ヲ遂ケントスルノ觀念ヲ懷セシムルノ恐レアリ。斯クシテ他日翻テ佛人ニ反對スルコトアルヘキ一國ヲ組織スルコトトナルヘシ。一八五七年印度ニ於テ英人ノ受ケタル大損害ノ經驗ヲ佛人ノ不利益ノ爲メニ反覆スルモ及ハサルヘシ。

且ツ尙他ノ一問題アリ。此問題ハ暫ク安南國民軍ノ組織ヲ延期セシムヘキモノナリ。即チ眞ニ其職務ヲ盡シ得ル土人將校募集ノ問題ナリ。

然レトモ組合政策ニ關スル原則ノ適用ニヨリ得タル實驗ニ依レハ、土人軍隊ノ現行組織ハ未タ不完全ナルヲ認メサルヲ得ス。尙ハ既ニ如何ナル方法ヲ以テ完全ナラシメ得ヘキカノ問題ヲ研究セリ。唯此ニ簡單ニ説明スヘキハ土人軍隊ニ勤務

スル佛人將校下士ノ職任如何ノ問題ナリ。素ヨリ此等佛人將校下士ハ土人軍隊ヲ以テ佛國ノ勢力及ヒ權威ノ爲メニ最良ノ保障タラシムコトニ盡力スヘキナリ。

此等將校下士ハ民政官ト同シク或ハ之レヨリモ多ク其屬スル特別ノ範域ニ於テ佛、安兩國人間ノ同情ヲ成立セシムヘキモノナリ。何トナレハ土人ノ惡感情カ存在スルコト眞ナリトセハ、此惡感情ハ土人軍隊ニモ感染セサルニアラサルコトヲ等シク認識スルヲ至當トス。佛國人將校下士ハ現役ノ土人兵及ヒ短期服役ノ豫備兵ノ爲メニ變遷シツツアル社會ノ漸次的進化ニ向ヒテ指導スヘキモノナリ。斯クノ如クシテ如何ナル場合ニ於テモ土人兵ノ同情アル自發的協力ニ信賴スルコトヲ得ヘシ。

然レトモ之レカ爲メニハ土人兵ト之ヲ指揮スル佛人將校下士トノ間ニ絶エス接近ノ行ハルルコトヲ必要トス。指揮者殊ニ將校ハ部下土人兵ノ複雜ナル思想ヲ洞觀スルコトヲ勉ムヘシ。之レカ爲メニハ土人兵ノ教育ニ任セル將校下士カ土人語ヲ解スルコト必要ナリ。

土人語ヲ解スル將校ハ土人兵ヲシテ就役中彼等ニ要求スル所ノモノハ兵役ニ對シテ多大ノ好意ヲ有スルコトニシテ佛人將校下士ニ要求スル所ハ甚タ多種ナ

ルコトヲ了解セシムヘシ。佛人將校下士ハ其配下ノ權利及ヒ利益ノ防護者タルヘシ。土人兵ニ對シテハ熱心ト好意トヲ要求スルニ止マル一方ニ於テ、彼等ハ之ニ懇切ト助言トヲ與フヘシ。夫レ斯クノ如クスルニアラサレハ此土人青年ヲ熱誠ナラシメ以テ大事業ヲ遂行セシムルコトヲ得サルヘシ。

部下ノ言語ヲ能ク解スルヲ此第一必要事ノ外ニ、土人兵付キノ將校ニ必要ナル尙ホ他ノ多クノモノアリ。最近ゴーシエー伯ノ著「軍隊心理論」ニ於テ之ヲ要説セルヲ見ル。即チ其智識ニ依テ土人ノ信賴ヲ贏チ得、其品性ト其高尚ナル生活トニ依テ土人ノ尊敬ヲ得、自カラ模範ト爲テ土人ヲ訓練シ、慈愛ノ性情ト有形無形ニ土人ノ健全性ヲ謀ル懇切トニ依テ土人ノ親愛ヲ引キ付タルコト等肝要ナリ。

第三節 海岸防禦ノ組織

印度支那ハ海上ヨリ來ル侵畧者ニ對シテ二大目的地ヲ提供ス。東京及ヒ交趾支那是レニシテ孰レモ富裕ニシテ且ツ侵入ニ敢テ困難ナラス。之レニ次ク目的地ハツララヌ灣ニシテ安南國王住居シ安南ノ首都タル順化ニ近接スルカ故ニ幾分重要ナリ。

其他ハ延長二千「キロメートル」ヲ超ユル海岸ナレハ上陸地點甚タ多シト雖モ、何レモ迅速ニ重要ナル目的地ニ達スルコトヲ得サルモノナルカ故ニ甚タ重要ナラスト觀察セラル。

幾度カ討議ヲ經、且ツ一八九二年ヨリ一九〇五年ノ間ニ起草セラレタル幾多ノ方案ヲ見タルモ再ヒ大體ニ於テ一八九七年ニ採用セラレタル防備案ニ復歸スルコトトナレリ。此方案ハ二箇所ノ艦隊根據地ヲ設定スルコトヲ基礎ト爲ス。即チ主タル根據地ヲ柴棍カツプサンジャツクニ置キ、副タル根據地ヲホンゲーニ置ク。又廣州灣ニ重要ナル海軍根據地ヲ設定スルノ議論アリタリ。然レトモ其土地遠隔ニシテ支那ノ領土ニ嵌入シ、東京ト陸上ノ交通ヲ缺クヲ以テ此案ヲ廢棄セシカ之レ當然ノ理ナリ。

器械ノ設備完全ナル造船所ヲ有スル柴棍市及ヒ之レニ通スル河流ノ入口ハカツプサンジャツク竝ニソアラツプ河ノ入口ニ築造セラレタル砲臺ヲ以テ防禦セラル。又ホンゲーニモ數箇所ノ砲臺ヲ築造セリ(譯者云フ、今日ハ總テ大砲ヲ撤去セリ)。之レ此ニ存スル重要ナル炭坑會社ヲ保護シ且ツ敵艦隊カベードロンヲ占領スルコトヲ一層困難ナラシムルカ爲メナリ。

柴棍及ヒホンゲーハ此外水雷驅逐艦、水雷艇及ヒ或潜水艇ヲ以テ編制セル水雷防禦隊ノ根據地ナリ。此等ノ水雷防禦ハ交趾支那及ヒ東京平野ヲ縱横スル多數ノ堀割及ヒ河川ニ對スル敵艦ノ近接ヲ防禦スルニ要ス。

印度支那沿岸ノ最良ノ防禦法ハ艦隊ヲ以テ之ニ充ツルニアルヘシ。然レトモ日英及ヒ日佛協商ノ結果トシテ佛國ハ漸次ニ其東洋艦隊ノ勢力ヲ減少セリ。今日ニ於テ其有スル所ハ左ノモノニ過キス。

第一、二、三隻ノ巡洋艦ヨリ成ル東洋分遣艦隊ト稱スルモノ。

第二、海軍少將ノ指揮ニ屬スル印度支那分艦隊ニシテ第三級ノ軍艦數隻、河川用砲艦、上記ノ水雷艦艇ノ或モノ。

第四節 結論

上ニ述ヘタル簡單ナル説明ヨリシテ印度支那ハ其單獨ノ勢力ヲ以テ自足セサルヘカラサル結論ヲ生ス。

陸軍防禦ハ二萬七千人ノ駐屯軍ヲ以テ保持セラル。其中一萬三千人ハ歐人兵ニシテ一萬三千八百人ハ土人兵ナリ。此二萬七千人ハ左ノ如ク配布セラル。東京ニ於

テ一萬八千七百人、安南ニ七百人、交趾支那ニ於テ八千三百人。平時ノ兵員ハ戰時ニ於テハ土人警察隊、歐人豫備兵及ヒ土人豫備兵ヲ合シテ容易ニ之ヲ二倍ニスルコトヲ得ヘシ。

海岸防禦ハ左ノモノヲ以テ保持セラル。

第一、海軍根據地二箇所、但シ柴棍ノミ稍組織ヲ有ス。

第二、水雷艦艇根據地二、柴棍及ヒホンゲー

第三、東洋分遣艦隊此植民地ノ防禦ニ參加スヘキ旨明白ニ決定セラレタルニ

アラサレトモ)

第四、印度支那分艦隊。

佛領印度支那大觀 (終)

1421
778

終